

志摩町文化財調査報告書 第21集

久米遺跡

県営農業担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査

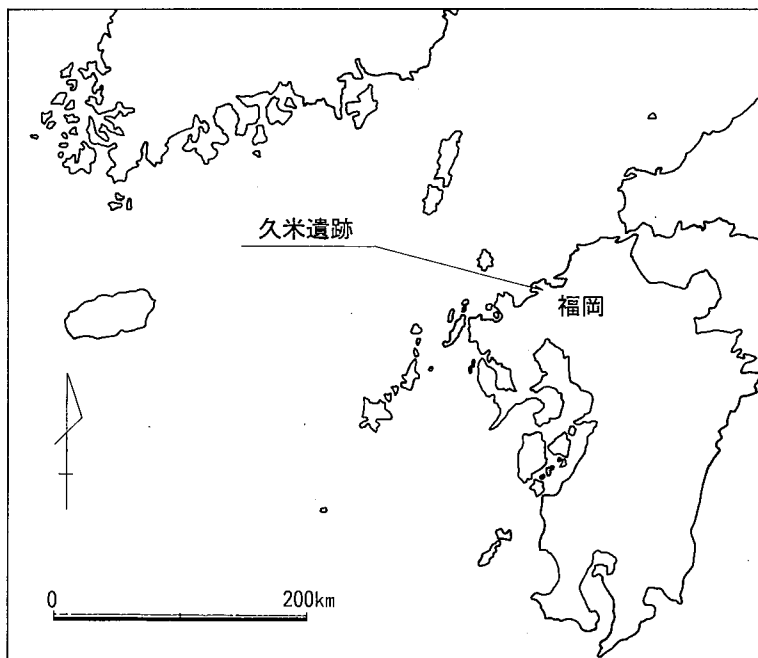
1999

志摩町教育委員会

志摩町文化財調査報告書 第21集

久米遺跡

県営農業担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査



1999

志摩町教育委員会



久米遺跡出土の細形銅剣・銅戈

a. 6号甕棺墓
細形銅劍出土状況



b. 23号甕棺墓
細形銅戈出土状況



序

玄界灘をはさんで韓半島に面する志摩町には、古来より中国・朝鮮など東アジア世界との交流を示す数多くの遺跡が発見されています。

この中、町の北部にある桜井川下流域の野北地区は、火山・彦山両峰から派生する丘陵部を中心として、弥生時代以来、永きにわたって沢山の遺跡群が分布し、わが町でも有数の文化財包蔵地として知られています。

本書は、その野北地区の農業担い手育成基盤整備事業に伴い平成9年度に実施した久米遺跡の発掘調査報告書であります。

調査では、弥生時代の甕棺墓群にともなって細形銅剣や細形銅戈など朝鮮半島に係わりの深い貴重な副葬品が出土し、当地に他地域と活発な交易を行っていた有力集団が存在していたことが明らかになりました。これらの調査成果は、弥生時代の社会・墓制・交易等の諸問題を考える上で大変重要な意味をもつものと思われます。

本書が町民の方々の埋蔵文化財に対する認識と理解につながり、更に学術研究の分野にいささかでも貢献することができれば幸甚に存じます。

なお、末筆ではありますが、本報告書の作成にあたり多大な協力をいただきました関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月31日

志摩町教育委員会
教育長 溝口 偉通

例 言

1. 本書は、野北地区農業担い手育成基盤整備事業に伴い、発掘調査を実施した糸島郡志摩町大字野北字久米に所在する「久米遺跡」の調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡県福岡農林事務所の委託により、志摩町教育委員会が国庫及び県費補助を受け実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図の作成は、河村裕一郎、河合 修、遺物実測図の作成及び製図は河合が行なった。
4. 本書に使用した写真のうち、巻頭図版①とP L - 10・11の遺物撮影は「フォトハウスOKA」の岡紀久夫氏、図版P L - 1の空中写真撮影は「空中写真企画」の壇睦夫氏に委託し、他は河村、河合が撮影した。
5. 本書で使用する方位は全て磁北である。
6. 遺物の分析のうち、甕棺胎土の分析は、九州大学中園聡氏・奈良教育大学教授三辻利一教授の両氏に、出土人骨の鑑定は九州大学大学院中橋孝博教授に、銅剣付着物の鑑定は国立歴史民俗博物館永嶋正春助教授にお願いし、それぞれ玉稿を頂くことができた。
7. 出土青銅器保存の為に材質分析及び保存処理については、奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏にお願いし、分析データを頂くことができた。
8. 遺物写真の縮尺は不統一である。
9. 本書で使用した記号はK = 甕棺墓、D = 土壌、M = 溝を示す。
10. 本書の執筆・編集は河合が行なった。

本文目次

I	調査の経過	1
i	調査に至る経過	1
ii	調査の経過	1
iii	調査の組織	2
II	位置と環境	3
i	志摩町の地理的環境	3
ii	志摩町の歴史的環境	3
iii	久米遺跡の位置と桜井川流域の遺跡群	5
iv	調査区の位置	7
III	調査の報告	8
i	調査の概要	8
ii	遺構と遺物	10
1.	遺構	10
(1)	甕棺墓	10
(2)	土壇	23
2.	遺物	25
(1)	土器	25
(a)	甕棺	25
(b)	土壇出土の土器	41
(2)	青銅器	43
(3)	玉類	45
(4)	その他の遺物	45
IV	分析と考察	46
i	久米遺跡の甕棺墓について	46
ii	久米遺跡出土の青銅器について	51
iii	福岡県志摩町久米遺跡および周辺遺跡出土甕棺の胎土分析(中園 聡・三辻利一) …	54
iv	福岡県志摩町久米遺跡出土の弥生時代人骨(中橋孝博)	68
v	久米遺跡 6 号甕棺内銅剣周囲の黒色物について(永嶋正春)	70
V	結語	73

挿 図 目 次

Fig. 1	志摩町内の主要遺跡分布図 (1/75,000)	4
Fig. 2	桜井川流域の遺跡分布図	5
Fig. 3	調査区位置図 (1/2500)	6
Fig. 4	調査区配置図	8
Fig. 5	久米遺跡遺構配置図 (1/80)	9
Fig. 6	甕棺墓関連遺構配置図	10
Fig. 7	1号甕棺墓実測図 (1/20)	11
Fig. 8	2号甕棺墓実測図 (1/20)	12
Fig. 9	3号甕棺墓実測図 (1/20)	12
Fig.10	4号甕棺墓実測図 (1/20)	13
Fig.11	5号甕棺墓実測図 (1/20)	13
Fig.12	6号甕棺墓実測図 (1/20)	14
Fig.13	7号甕棺墓実測図 (1/20)	14
Fig.14	8・9号甕棺墓実測図 (1/20)	15
Fig.15	10号甕棺墓実測図 (1/20)	16
Fig.16	11号甕棺墓実測図 (1/20)	16
Fig.17	12号甕棺墓実測図 (1/20)	17
Fig.18	13号甕棺墓実測図 (1/20)	17
Fig.19	14号甕棺墓実測図 (1/20)	18
Fig.20	15号甕棺墓実測図 (1/20)	18
Fig.21	16号甕棺墓実測図 (1/20)	19
Fig.22	17号甕棺墓実測図 (1/20)	19
Fig.23	18号甕棺墓実測図 (1/20)	20
Fig.24	19号甕棺墓実測図 (1/20)	20
Fig.25	20号甕棺墓実測図 (1/20)	21
Fig.26	21号甕棺墓実測図 (1/20)	21
Fig.27	22号甕棺墓実測図 (1/20)	22
Fig.28	23号甕棺墓実測図 (1/20)	22
Fig.29	24号甕棺墓実測図 (1/20)	23
Fig.30	1号土壇墓実測図 (1/40)	23
Fig.31	1号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	25
Fig.32	2号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	26
Fig.33	3号甕棺墓下甕実測図 (1/8)	26
Fig.34	4号甕棺墓下甕実測図 (1/8)	27
Fig.35	5号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	27

Fig.36	6号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	28
Fig.37	7・8号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	29
Fig.38	9号甕棺墓下甕実測図 (1/8)	30
Fig.39	10号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	30
Fig.40	11号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	31
Fig.41	12号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	32
Fig.42	13号甕棺墓下甕実測図 (1/8)	32
Fig.43	14号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	33
Fig.44	15号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	34
Fig.45	16号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	35
Fig.46	17号甕棺墓甕実測図 (1/8)	35
Fig.47	18号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	36
Fig.48	19号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	37
Fig.49	20号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	38
Fig.50	21号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	39
Fig.51	22号甕棺墓下甕実測図 (1/8)	39
Fig.52	23号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	40
Fig.53	24号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)	41
Fig.54	1号土壙出土土器実測図 (1/4)	41
Fig.55	銅鏡片実測図 (2/3)	43
Fig.56	細形銅剣・細形銅戈実測図 (1/2)	44
Fig.57	6号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1)	45
Fig.58	その他の遺物実測図 (1/2)	45
Fig.59	久米遺跡出土甕棺の変遷	48
Fig.60	久米遺跡甕棺墓の形成過程①	49
Fig.61	久米遺跡甕棺墓の形成過程②	50
Fig.62	糸島地域の弥生中期前半期における副葬墓の分布	52

表 目 次

Tab. 1	桜井川流域の縄文～古墳時代の遺跡一覧表	5
Tab. 2	甕棺墓の埋葬主軸方位と埋置角度	11
Tab. 3	久米遺跡甕棺墓一覧表	24
Tab. 4	久米遺跡出土甕棺一覧表	42
Tab. 5	6号甕棺墓出土管玉計測表	45

図 版 目 次

巻頭図版① 久米遺跡出土の細形銅剣・銅戈

巻頭図版② a. 6号甕棺墓細形銅剣出土状況

PL-1 久米遺跡遠景（西側上空から）

PL-2 a. 6号甕棺墓細形銅剣出土状況

PL-3 a. 23号甕棺墓細形銅戈出土状況

PL-4 a. 14号甕棺墓出土状況

c. 16号甕棺墓出土状況

PL-5 a. 18号甕棺墓出土状況

c. 22号甕棺墓出土状況

PL-6 a. 1号甕棺墓下甕

c. 5号甕棺墓下甕

e. 7号甕棺墓下甕

PL-7 a. 8号甕棺墓下甕

c. 12号甕棺墓下甕

e. 14号甕棺墓上甕

PL-8 a. 14号甕棺墓下甕

c. 15号甕棺墓下甕

e. 16号甕棺墓下甕

PL-9 a. 18号甕棺墓下甕

c. 19号甕棺墓下甕

e. 21号甕棺墓上甕

PL-10 a. 細形銅剣出土 6号甕棺墓下甕

PL-11 a. 6号甕棺墓出土細形銅剣

c. 23号甕棺墓出土細形銅戈

b. 23号甕棺墓細形銅戈出土状況

b. 細形銅剣出土状況

b. 細形銅戈出土状況

b. 15号甕棺墓出土状況

b. 21号甕棺墓出土状況

b. 4号甕棺墓下甕

d. 6号甕棺墓上甕

b. 11号甕棺墓下甕

d. 13号甕棺墓下甕

b. 15号甕棺墓上甕

d. 16号甕棺墓上甕

f. 18号甕棺墓上甕

b. 19号甕棺墓上甕

d. 20号甕棺墓上甕

f. 21号甕棺墓下甕

b. 細形銅戈出土 23号甕棺墓下甕

b. 6号甕棺墓出土管玉（ほぼ実大）

d. 銅鏡片（表採資料）

I 調査の経過

i 調査に至る経過

志摩町では、町の基幹産業である農業の活性化を図る為、農業基盤の整備を積極的に推進している。そのような中、平成8年（1996年）に県営農業担い手育成基盤整備事業として着工予定であった野北矢田溜め池の改修工事において、溜め池の土手のはがね土として、粘性の強い真砂土が必要となった。そこで、事業主体である福岡県農林事務所は、周辺地域の土質検査を経て、志摩町大字野北3177-1（約800㎡）に土取り場を選定した。このような経過により事業計画が提示され、志摩町土木課を通じて本町教育委員会に工区内の埋蔵文化財の有無確認について照会があった。大幅な削平こそうけてはいるものの当地は以前から弥生土器の散布地として知られており遺構の残る可能性があったので、教育委員会は翌年3月に確認調査を実施し、その結果、工区内に甕棺墓2基を確認した（本報告1・2号甕棺墓）。遺構が確認されたことにより、当然、事業計画に支障をもたらす状況となり、志摩町教育委員会と同町土木課、福岡県農林事務所の三者で設計及び工期変更をも含め文化財保護についての協議を行った。しかし、他に候補地がないなどどうしても遺跡の破壊を免れない状況であったので、発掘調査による記録保存により対処することでやむなく合意し、本調査のなされる運びとなった。調査費用については国・県費の補助を受け、志摩町教育委員会が事業主体となって、平成9年6月から本調査を実施した。

ii 調査の経過

本調査は平成9年6月3日から開始した。当初、調査区内に多くの不法投棄ゴミが散乱しており、その撤去に1週間を必要とした。ゴミ撤去後、発掘調査に入り、人力による表土剥ぎ・検出作業を調査区の西側から徐々にすすめていった。6月13日、遺構検出段階で、調査区南東端の表土中から青銅鏡片が出土し、地元の新聞にて報じられた。調査開始からほぼひと月経過した6月30日、弥生時代中期の甕棺墓24基を含む諸遺構をほぼ検出し、遺跡の空中写真撮影を実施。7月5日には、地元住民と関係者に遺跡を公開し文化財に対する理解を高める為、現地説明会を行い100名近い見学者が訪れた。その後、遺構の掘り下げと実測および写真撮影作業をすすめたが、台風や大雨などの影響で作業は遅々として進まず、予定より大幅に作業日程が遅れることとなった。そのような中、8月8日に6号甕棺墓から細形銅剣、8月21日に23号甕棺墓から細形銅戈が出土し、近年稀に見る重要な遺物の発見があった。このような経過により8月24日には、全ての現場作業を終了し、整理作業に入った。青銅器類の出土など重要な成果があったので、多角的な視野から遺物の分析の必要があり、保存処置を含めた種々の科学分析を様々な研究機関に依頼した。銅剣・銅戈などの青銅器類の保存処置と蛍光X線分析を奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏、銅剣付着の遺存体の分析を国立歴史民俗博物館の永嶋正春助教授、出土人骨の鑑定を九州大学大学院の中橋孝博教授、出土甕棺の胎土分析を九州大学の中園聡氏、奈良教育大学の三辻利一教授にそれぞれお願いした。

調査終了後の出土遺物及び図面・写真等はすべて志摩町歴史資料館にて整理保管している。今後、当資料館の展示資料として、住民の文化財保護思想の啓蒙に積極的に活用し、特別展などを通じて広く町内外に紹介していく予定である。

iii 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調 査 主 体	総 括	志摩町教育委員会		教 育 長	溝口 偉通	
				社会教育課長	高田 秀五（前任）	
	庶 務			学校教育課長兼 社会教育課長	樗木 一（現任）	
				社会教育係長	梶塚 三郎	
				同 主 査	洞 龍二郎	
				同 主 査	吉富 一雄	
				同 主任主事	河村裕一郎	
	調査担当			同 主 事	河合 修	
発掘作業員	秋田 幸子	石橋 勝信	石橋とし子	小出 竹子	島内 浩輔	
	高田あい子	田中 妙子	浜地百合子	原田 佳子	平野 京子	
	平野みちえ	平野 杜夫	松尾 儀一	吉原 富子		
整理作業員	小河 三郎	七村 江利	原田 佳子	平野 弘毅	平野 幸子	
復元作業員	酒田 恵子	波多江久留美	吉住ふみ子			

なお、調査中においては、久米区長藤原要氏をはじめとする地元有志に文化財調査に対する御理解と御協力を得た。調査にあたっては、福岡県教育委員会橋口達也氏、福岡教育事務所の池辺元明氏など関係諸氏に多くのご指導を賜った。また、青銅器の取り上げ作業では、九州歴史資料館の横田義章氏に現場まで来ていただきご迷惑をかけた。種々の科学分析関係では、九州大学大学院の中橋孝博教授、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏、国立歴史民俗博物館の永嶋正春助教授、九州大学の中園聡氏、奈良教育大学の三辻利一教授をはじめ、それぞれの所属機関の皆様にも多大なご協力を賜った。前原市教育委員会岡部裕俊氏、二丈町教育委員会古川秀幸氏、村上敦氏には、調査中何度も現場に来ていただき、ご指導・ご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

i 志摩町の地理的環境

東に博多湾、西に唐津湾を分ける位置を占めて玄界灘に突き出た糸島半島は、古来から大陸との交流の玄関口として知られている。この糸島半島の大部分を占める志摩町は、外周の約70%が海に面し、東と北は福岡市元岡・北崎地区に、南は雷山川と加布里湾を隔てて前原市に接する。地形的には、筑紫富士といわれる可也山（標高 365m）を最高峰として、標高 200m級の火山・彦山・天ヶ岳・立石山などが半島全体



上空から見た志摩町

に峰々を連ね、その間を桜井川・初川・小金丸川・沖田川などの小河川が流れ小沖積平野をつくり出している。地質は、山塊のほとんどが「糸島型」と呼ばれる花崗閃緑岩からなるが、野北から桜井にかけて結晶片岩の三郡変成岩層が帯状に分布するのをはじめとして、芥屋の大門や可也山頂上に玄武岩、立石山南面に角閃岩、その他アプライトや石英斑岩等の露出を町内各地で局地的にみることができる（註1）。

ii 志摩町の歴史的環境 (Fig. 1)

志摩町の歴史は、古く縄文時代早期に遡ることが知られており、学史的に有名な芥屋の天神山貝塚（註2）からは、早・前期と中期の土器片を含む貝・包含層が出土している。その他、縄文時代の遺跡としては、後期前葉の貝塚である新町貝塚（註3）、や後期中葉の貝層と住居址が発見された岐志元村貝塚（註4）などが知られており、引津湾沿岸部に遺跡が集中する。弥生時代になると、遺跡の数、範囲ともに飛躍的に増大する。最も遺跡の密度の濃い引津湾沿岸部には、早・前期の支石墓群で有名な新町遺跡（註5）を中心として、貨泉・半両銭の出土で知られる御床松原遺跡（註6）など古墳時代まで継続する漁村型の一大集落が形成される。この地域では、漢式土器など外来系遺物の出土が多いことが特徴としてあげられる。引津湾沿岸以外では、現在役場の位置する初や稲留の内湾部、北側を玄界灘に面した小金丸・貝塚周辺、そして今回報告の久米を含む桜井川流域などで、それぞれ小平野単位でまとまりをもった中・小遺跡群が丘陵上にみられる。副葬品を所有する墳墓の調査例は少ないが、近年調査された東貝塚の橋の上遺跡（註7）では、中期前半の小型甕棺から完形の磨製石剣の出土をみている。古墳は、町内で大小あわせて約300基以上が確認されている。代表的なものとして、90m級の前方後円墳である井田原開古墳（註8）や、県内でも最古級の稲葉古墳（註9）などがある。これらが集中する現在の初周辺から前原市泊周辺にかけての古墳群は、県内でも有数の大型古墳密集地である。後期古墳は町内各地に分かれて点在するが、可也山南麓の鰐口・荒牟田古墳群が最大の密集度を誇っている。

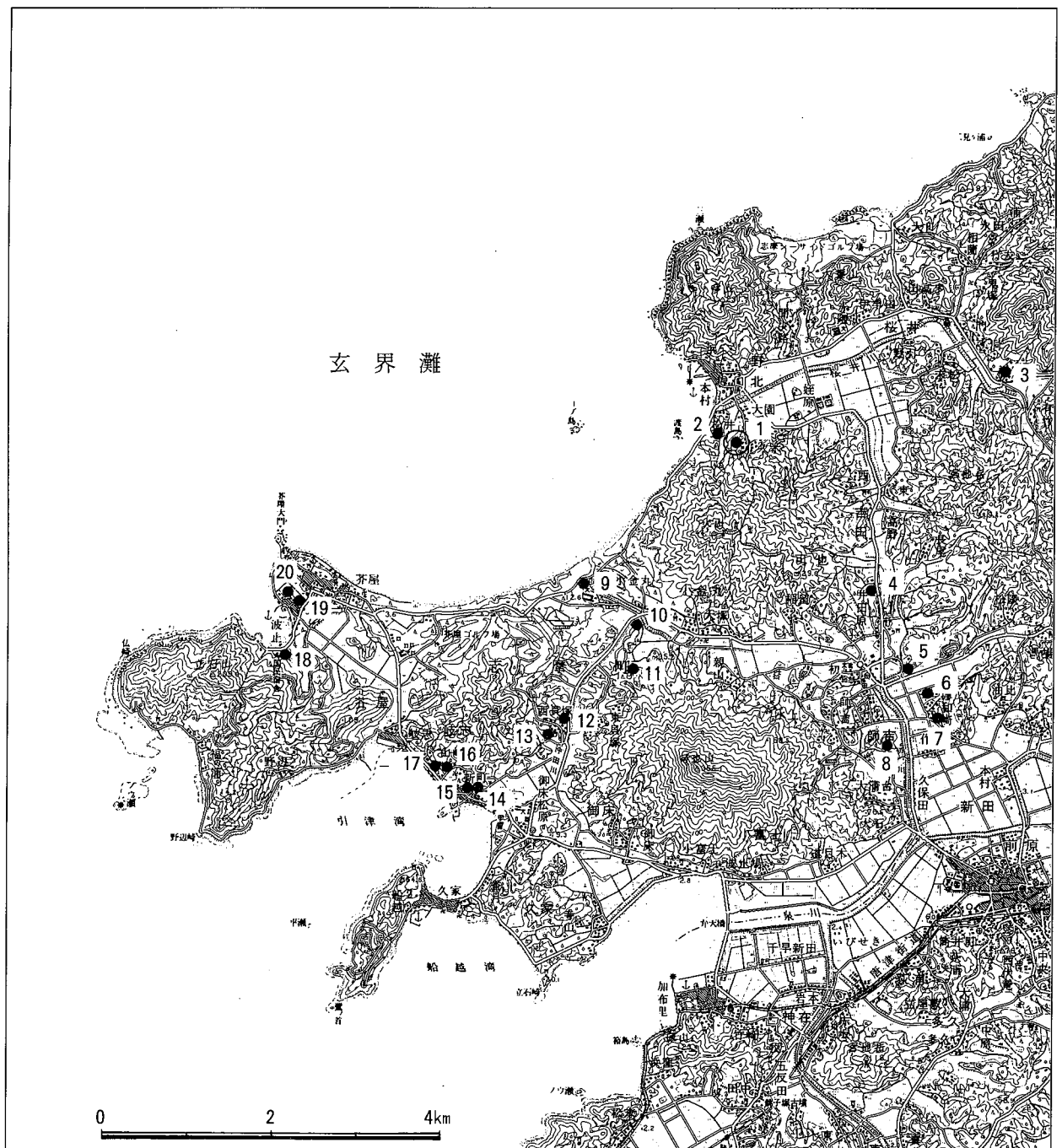


Fig. 1 志摩町内の主要遺跡分布図 (1/75,000)

- | | | | | |
|------------|------------|-----------|------------|------------|
| 1. 久米遺跡 | 2. 向畑古墳 | 3. 谷古墳群 | 4. 井田原開古墳 | 5. 四反田古墳群 |
| 6. 後口古墳 | 7. 権現古墳 | 8. 稲葉古墳群 | 9. 大牟田遺跡 | 10. 熊添遺跡 |
| 11. 橋の上遺跡 | 12. 八熊製鉄遺跡 | 13. 千町田遺跡 | 14. 御床松原遺跡 | 15. 新町遺跡 |
| 16. 岐志元村貝塚 | 17. 海徳寺遺跡 | 18. 天神山貝塚 | 19. 藤原遺跡 | 20. 久保地古墳群 |

iii 久米遺跡の位置と桜井川流域の遺跡群 (Fig.2 : Tab.1)

遺跡は、火山（244m）から北にむかって派生する舌状丘陵の東側緩斜面（標高14m前後）に位置する。北には、彦山（231m）、東には、かつて内湾であったと考えられる桜井川流域の水田地帯を俯瞰することができ、丘陵の頂部からは、西に玄界灘を一望できる。地元の古老の話によれば、以前からこの丘陵には、弥生土器や石器等の出土例が多く、その中には土錘などの漁撈具の出土もあったといわれる。現在の海岸線から直線距離にして約500mと海に近く、水田可耕低地が過少であるという地理的条件を考えれば、周辺に漁撈専門集団の弥生集落の存在が想定できる。

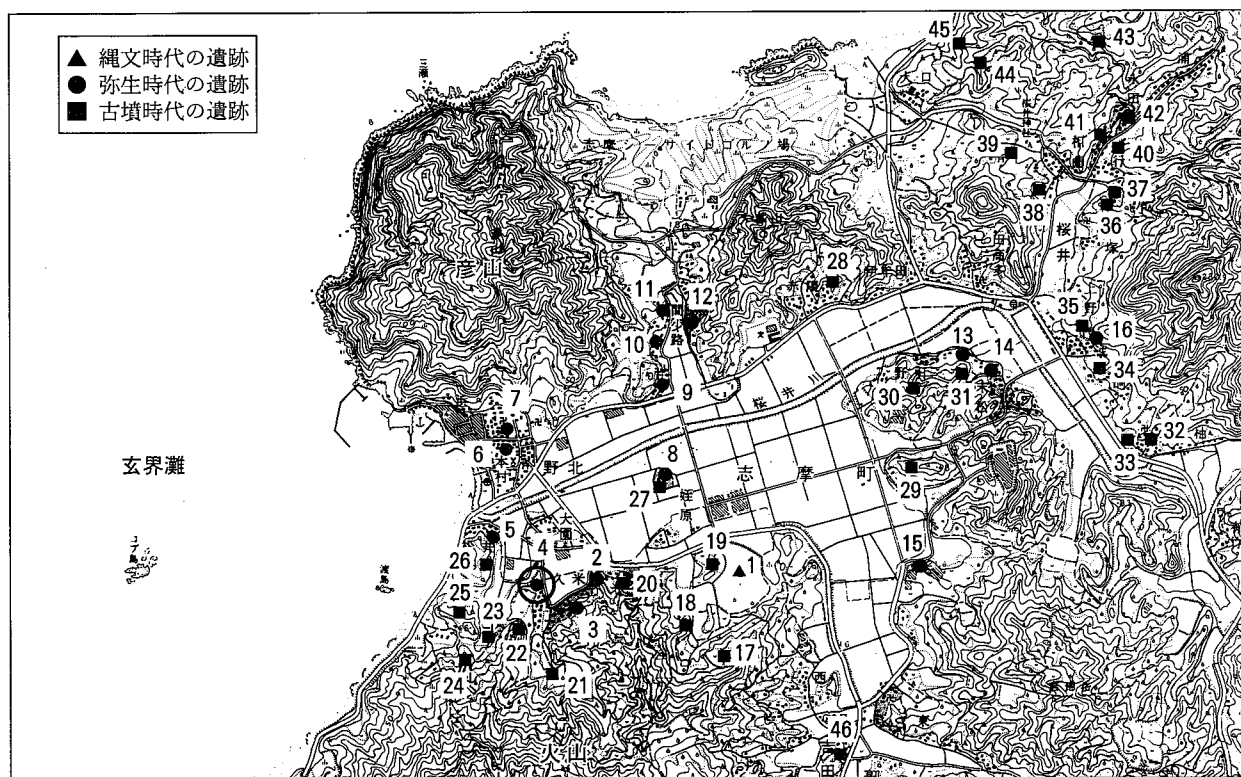


Fig.2 桜井川流域の遺跡分布図（町内遺跡分布調査の成果による）

No.	遺跡名	時代	概要	No.	遺跡名	時代	概要
1	矢田溜池遺跡	縄文	縄文土器・石器散布地	24	合火屋古墳	古墳	円墳
2	久米3号遺跡	弥生	弥生土器散布地	25	吹切古墳	古墳	円墳
3	久米2号遺跡	弥生	弥生土器散布地	26	向畑古墳	古墳	円墳、調査済み
4	久米遺跡	弥生	今回報告・甕棺墓	27	折口古墳	古墳	消滅
5	向畑遺跡	弥生	弥生土器散布地	28	盤石古墳群	古墳	円墳
6	高塔遺跡	弥生	甕棺墓	29	勝後古墳	古墳	円墳
7	辻遺跡	弥生	弥生土器散布地	30	野引古墳	古墳	円墳
8	折口遺跡	弥生	墳墓、銅剣出土？	31	押方古墳群	古墳	円墳
9	山崎遺跡	弥生	弥生土器散布地	32	谷古墳群	古墳	円墳、調査済み
10	中ノ箇遺跡	弥生	弥生土器散布地	33	宗田古墳	古墳	円墳
11	北蘭遺跡	弥生	弥生土器散布地	34	洞古墳群	古墳	群集墳
12	葉山遺跡	弥生	弥生土器散布地	35	門古墳群	古墳	円墳
13	押方遺跡	弥生	弥生土器散布地	36	鬼ノ内古墳	古墳	円墳
14	末松遺跡	弥生	弥生土器散布地	37	蔵の下遺跡	古墳	集落
15	赤畑遺跡	弥生	甕棺墓	38	井手古墳	古墳	円墳
16	門遺跡	弥生	弥生土器散布地	39	相古墳	古墳	円墳
17	矢田古墳群B	古墳	群集墳	40	柏木古墳群	古墳	円墳？
18	社古田古墳群	古墳	群集墳	41	永田遺跡	古墳	土器散布地
19	矢田古墳群A	古墳	群集墳	42	浦古墳群	古墳	円墳・鉄剣出土？
20	田附古墳群	古墳	群集墳	43	登浦遺跡	古墳	群集墳
21	後田古墳群	古墳	群集墳	44	荻の浦古墳	古墳	円墳
22	久米古墳	古墳	円墳	45	魚津古墳	古墳	円墳
23	淵の浦古墳	古墳	円墳	46	大畑古墳群	古墳	群集墳

Tab.1 桜井川流域の縄文～古墳時代の遺跡一覧表

周辺には、桜井川を挟む丘陵裾部を中心に沢山の遺跡が分布している。分布調査の成果（註10）に基づいて桜井川流域における弥生～古墳時代の遺跡の分布状況を概観すると、弥生時代の遺跡は、海岸部の野北・久米一帯、桜井川の北岸をおさえる間小路一帯、桜井川中流域に位置する野引・末松一帯の3つの遺跡群にグルーピングできる。それぞれ主要な遺跡をあげるならば、野北・久米一帯では、今回報告の久米遺跡をはじめとして、甕棺墓である向畑遺跡や高塔遺跡、信憑性には欠けるものの銅剣出土の墳墓の記載（註11）が残る折口遺跡などがある。間小路地区では、本調査例はないが北園遺跡・山崎遺跡など土器散布地が点在しており、さらに内陸にはいった野引・末松地区には祭祀土器の散布地である押方遺跡などがある。これら3つの遺跡群は、それぞれが河川を見下ろす丘陵上を占め、ほぼ同距離を保って立地している。現在の集落立地ともほぼ一致しており、これらは当時の集落単位を表象しているものと想定できる。

古墳時代になると、平野に跨がったかたちで久米を中心とした火山北側丘陵の古墳群と桜井を中心とした桜井川上流域の古墳群のふたつの遺跡群に二極化する傾向がみられる。代表的なものとして、久米周辺では、海岸部に5世紀前半の築造と考えられる向畑古墳群（註12）、やや内陸にはいったところに淵の浦古墳や後田古墳群、さらに東側には田附古墳群や金銅装大刀が出土している社古田古墳群（註13）、矢田古墳群などがある。桜井川上流域には、桜井神社岩戸宮の神体として知られる相古墳を代表として、昇浦古墳群や浦古墳、柏木古墳などがある。近年では、天ヶ岳から派生する丘陵で7世紀頃の円墳2基（谷古墳群：註14）が調査されている。

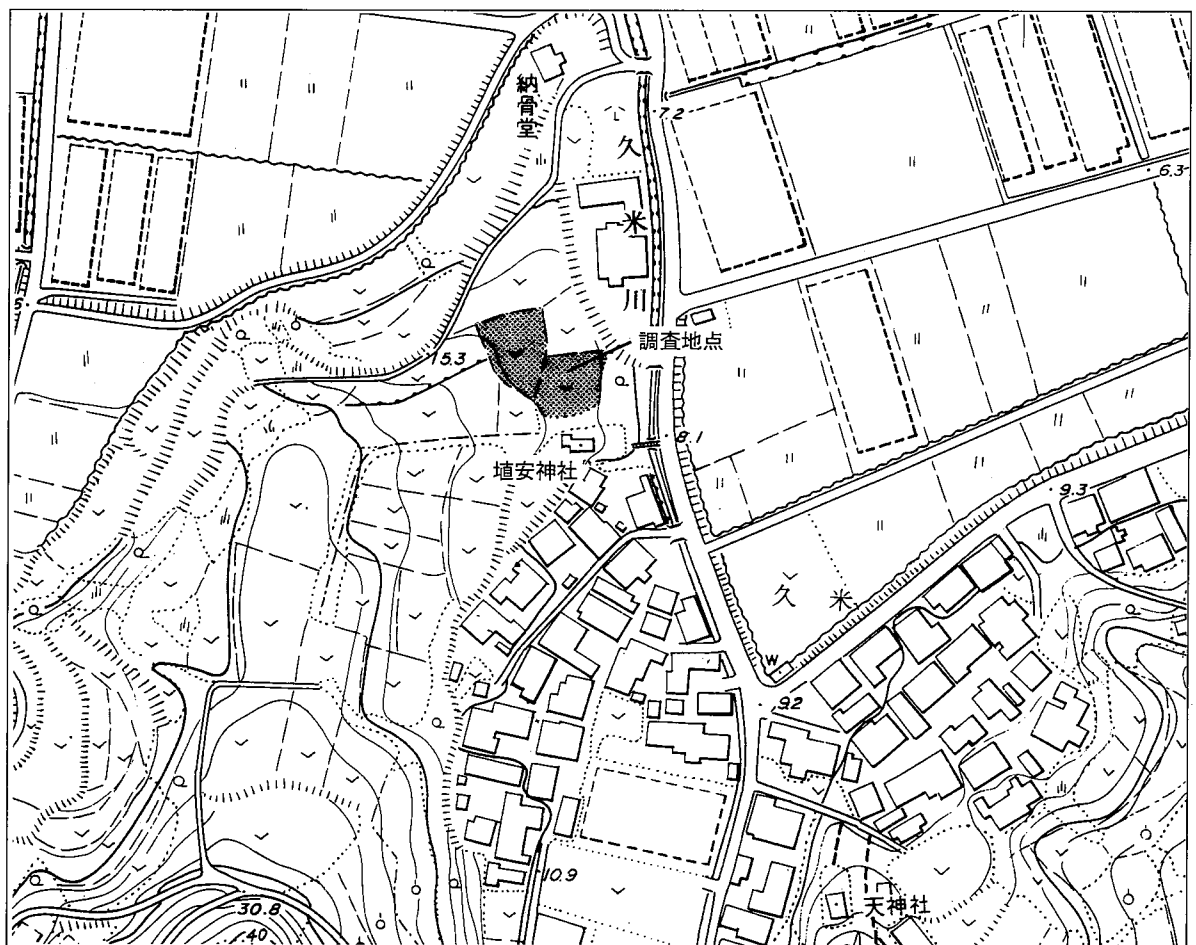


Fig. 3 調査区位置図 (1/2,500)

「久米」という地名については、602年に新羅遠征のため軍を率いて筑紫国に駐屯し、翌年死去した聖徳太子の実弟、来目（くめ）皇子に由来するものと伝えられている（註15）。遺跡周辺にも皇子の仮埋葬地といわれる史跡や、大館庁（おおたちょう）と小館庁（こたちょう）とよばれる伝承地が残り、当地は、古代における対外交渉の要地であったものと推定される。

10世紀代の「和名類聚抄」によれば、古代志麻郡として、韓良（加良）・久米・登志（度之）・明敷（安加之支）・鷄永・川邊・志麻の七郷が記載されており、地名の名残り等から判断すれば、現在の久米を含む野北一帯を「久米郷」に比定することは無理ないようである。（註16）

なお、古代遺跡の発掘調査例としては、海岸部の丘陵上に7～8世紀代の製鉄関連遺跡である吹切遺跡（註17）の調査例がある。

このような歴史的環境からみて久米の集落は、桜井川下流域周辺一帯の中心的役割を果たしてきたとすることができる。野北・桜井地域は、玄界灘と山地により四方を遮ぎられ、他平野と隔絶されるという地理的な独立性をもっており、小平野単位での地域社会の形成過程を考えるのに典型的な自然地形をそなえている。埋蔵文化財の調査例こそ少なく、いまだ遺跡の様相は詳細ではないが、今後、調査例が増えれば、地域社会を考える上で格好の資料となりうるに違いないだろう。

iv 調査区の位置（Fig. 3）

遺跡は、火山から北に延び平野に突き出た標高約14mの丘陵上にある。調査区は、もともと東に向いた緩斜面であったと考えられるが、調査の段階では、後世の畑地開墾によりほぼ平坦な地形となっていた。丘陵の東脇には久米川が流れ、それを取り巻くかたちで南東の谷部に現在の久米集落が広がっている。調査区から斜面を北に降りたところに納骨堂があり、調査区の南側は、埴安神社と接している。調査区の東側は、削平により崖となっているが、そこが削平される以前には、調査区付近は丘陵上への登り道になっていたといわれる。地山は花崗岩質の赤土であり、遺構の検出は比較的容易であったが、強い酸性土壌により遺物の保存状態が極めて悪かった。

註

1. 「糸島海岸の自然」 福岡県衛生部環境整備局環境保全課 1985
2. 「天神山貝塚」 志摩町文化財調査報告書第1集 1974
3. 1991年志摩町教育委員会が発掘調査
4. 1998年九州大学考古学研究室により発掘調査
5. 「新町遺跡」 志摩町文化財調査報告書第7集 1987
6. 「御床松原遺跡」 志摩町文化財調査報告書第3集 1983
7. 1998年志摩町教育委員会が発掘調査
8. 岡部裕俊・河村裕一郎 「糸島地方の古墳資料集成（その1）」 福岡考古第16号 1994
9. 「稲葉古墳群」 志摩町文化財調査報告書第5集 1985
10. 「志摩町遺跡等分布地図」 志摩町文化財調査報告書第17集 1995
11. 「志摩町文化財地図」 原田大六監修 志摩町教育委員会 1975
12. 「向畑古墳・藤原遺跡」 志摩町文化財調査報告書第9集 1988
13. 「再見！糸高の博物館」 伊都歴史資料館企画展示図録 伊都歴史資料館 1997
14. 1991年に志摩町教育委員会が発掘調査。
15. 「志摩町史」 志摩町史編集委員会 1972
16. 註15に同じ
17. 「吹切遺跡」 志摩町文化財調査報告書第12集 1990

Ⅲ 調査の報告

i 調査の概要

調査区の位置する丘陵は、昭和初期の大規模な畑地造成によって段々畑に改良されており、元の地形をとどめるのは一部のみである。今回の調査区も段々畑として利用されており、比高差約1.5 mの段差をもって上段面（西側）と下段面（東側）に分離されていた。その為、東側下段面をⅠ区、西側上段面をⅡ区と設定し（Fig. 4）、調査を進めた。事前に周辺状況についての聞き取り調査と露出した土層の観察を行ったところ、Ⅰ区北側の雑木林は、現況では調査区と同じ段にあるが、調査区境界線をさかいに客土した痕跡が確認された。一段落ちていた畑を嵩上げたものと推測される。Ⅰ区の東側は、本来ならば丘陵斜面がなだらかに下に伸びるはずだが、重機により大幅に削り取られ崖面となっていた。これは昭和40年頃の工事によるものであるが、地元の人の話では、その際にも甕棺土器片の出土があったといわれる。実際に、調査中にもその地点で甕棺の破片が採集されている。Ⅰ区南側は、神社の境内となっており、植樹及び盛土によって境界が築かれている。

上段のⅡ区は、重機による表土剥ぎ後、トレンチを2基（T1・T2）入れたが、すでに地山の面を大幅に削りだしており、旧地形を残すものはなく遺構の存在は皆無な状況であった。

Ⅰ区は、確認調査時点ですでに地表下約20cm程のところで2基の甕棺を発見しており、その周辺を人力によって丁寧に掘り下げながら検出作業を行い、削平をまねがれた東側を中心に遺構を確認した。その結果、検出した遺構は次のとおりである（Fig. 5）。

＜検出遺構＞	甕棺墓（弥生時代前期末～中期中頃）	24基
	土 墳 弥生時代	1基
	その他	3基
	溝	1条
	ピット	少数

甕棺墓とそれに関わる遺構は、後で詳述することとして、ここでは、甕棺墓関連遺構以外の遺構について触れておきたい。1号土墳以外の2～4号土墳は、遺物が発見されておらず時期・性格等が不明である。甕棺の抜き取られた墓墳であった可能性も残るが、掘り方が浅く埋土が甕棺墓等とは違う為、別の時期の所産であると考えたい。2号土墳は、表層からはキセルが発見されており、近世墓であった可能性があるが断定はできない。調査区北端で検出された溝は、19号甕棺墓の墓墳をなぞって検出されたが、これも後世の攪乱溝であると考えられる。



Fig. 4 調査区配置図

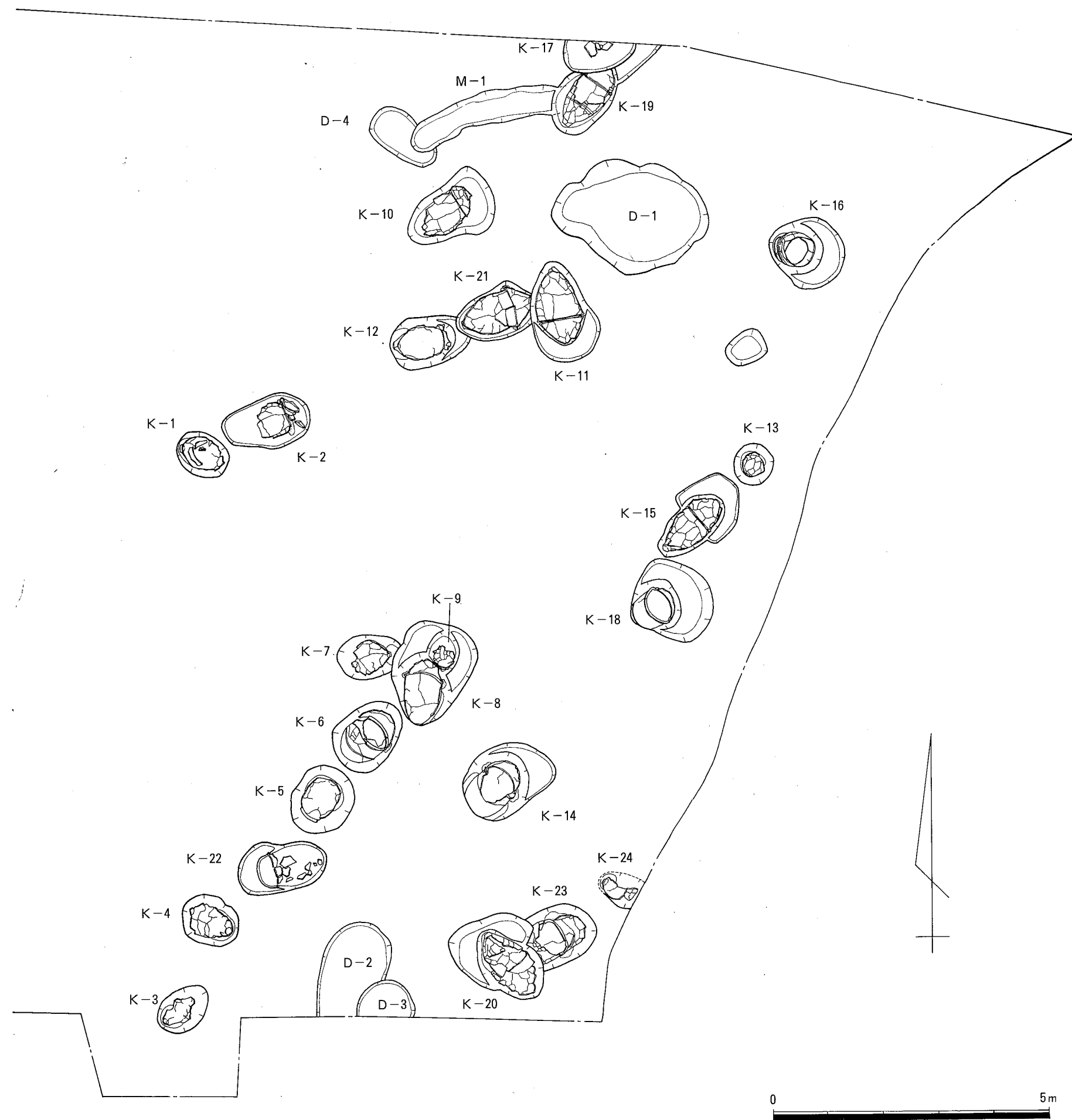


Fig. 5 久米遺跡遺構配置図 (1/80)

ii 遺構と遺物

1. 遺 構

(1) 甕棺墓

甕棺墓は計24基検出されている。造営時期は、弥生時代前期末から中期中頃におよび、全体的な遺構の密集度は高い。それにもかかわらず、墓墳は切り合っても甕棺相互の破壊がないのは、土饅頭あるいは標石等の地上標記物の存在も想定されようが、基本的には同墓地の造営が同一集団によって契機的になされたことによるものであろう。墓群は、北東にはしる空閑地によって南北2群に大別され、さらにそれぞれ2つの小群（計4小群）に分けることができる。群別の墳墓数をみると、北群9基（A群2基・B群7基）、南群15基（C群12基・D群3基）であり、A・D群には削平により失われたものがある可能性が高い。造営に関しては、最も古い時期の16号甕棺墓が北群にあることを除いて、全体に南群から北群へと墓地が展開している。

棺の内訳は、成人用と考えられる大型甕棺墓が22基、小児用と考えられる中型甕棺墓および小型甕棺墓が2基であり、ほぼ大半が大型の甕棺墓である。掘り方の浅かった小児用甕棺墓は、削平により欠失していると考えられる。墓墳プラン（上部構造）が明らかなものは少ないが、ほとんどの甕棺が2段掘りの墓墳に埋葬されていたものと推定される。甕棺埋葬時には、一般的に、堅墳（1次墓墳）を掘ったあとで、その一端に甕棺をいれる横墳（2次墓墳）を掘って棺を埋置する方法が知られているが、今回の調査では、2次墓墳のみを検出したものが大半であるといえよう。

埋葬の主軸方位(Tab.2)は、北東方向から挿入するパターンが多く、24基中半分の12基がN-40°~80°-Eの間に集中する。これは、墓群を南北にわける道状の空閑地の方向に一致している。埋葬角度は、全体で-6°~54°の間にあり、埋葬角40°±20°前後で傾斜埋置されるものと、0°±5°前後に水平埋置されるものとで2群にわかれる(Tab.2)。下甕が高位にくる例は、本遺跡では少ない。傾斜角の大きい甕棺が多いのは、唐津地方など糸島以西の玄界灘沿岸地域の甕棺埋葬の特徴であるといえよう。時期的には、古い時期の甕棺墓に傾斜角の大きいものが多く、より新しくなるにつれて水平埋置に近づく傾向が窺え、概して埋葬方法が傾斜埋置から水平埋置へと変化したことがわかる。傾斜角の大きい古い時期の甕棺墓の中には、少数ながら拳大の礫で下甕を固定するものもみられる。

次に上下甕棺の器種の組合せをみると、甕+甕の組合せが3基、鉢+甕が15基、不明6基となり、明らかな単棺での埋葬例はなく、鉢+甕の組合せが大半を占める。この上下棺の組合せパターンにも甕

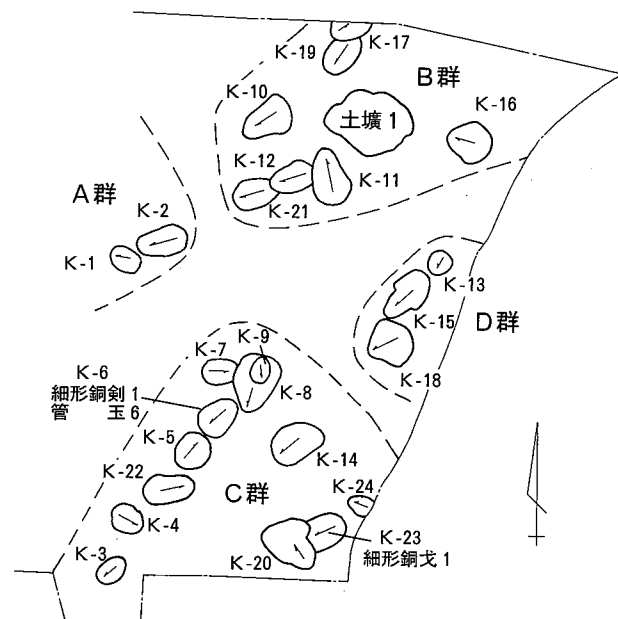
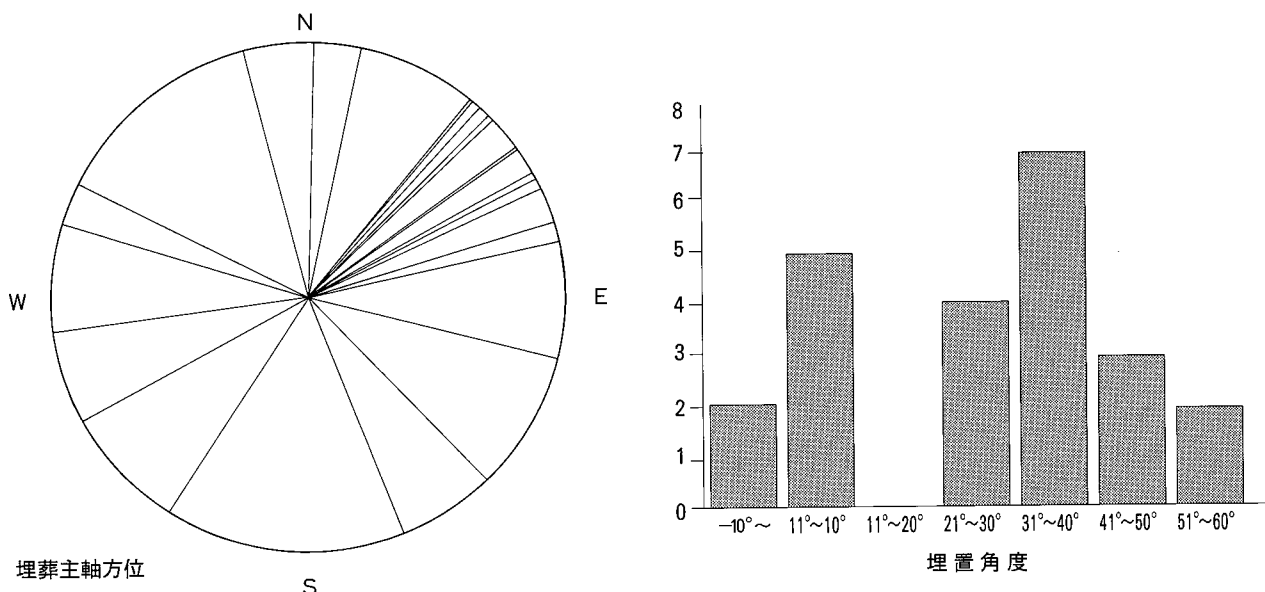


Fig.6 久米遺跡甕棺墓関連遺構配置図



Tab. 2 甕棺墓の埋葬主軸方位と埋置角度

+甕の組合せ（古）から鉢+甕の組合せ（新）への時期的な変化が読み取れる。棺の合口方式は、この組合せパターンにほぼ対応し、甕+甕の組合せでは呑口式（上甕が口縁を打ち欠いた下甕に被る：23号甕棺墓のみ接口式）、鉢+甕の組合せでは接口式である。目貼り粘土は9基から検出されている。最後に副葬品等の出土状況であるが、C群中央付近の6号甕棺墓から細形銅剣1口と碧玉製管玉6点、同群南東端の23号甕棺墓から細形銅戈1口が出土している。また、複数の甕棺墓の墓壇内埋土中から黒曜石片数点が検出されている点も興味深い。これらには製品が含まれておらず、すべて不定形の剥片である。おそらくは、甕棺の覆土中に流入したものであろうが、まじないの意味での副葬品である可能性も含めて、今後の調査で注意が必要である。人骨の遺存例は3例認められるが、状況のわかるものはD群の18号甕棺墓のみである。

1号甕棺墓 (Fig. 7)

遺跡の最西部のA群に位置し、主軸をN-73°-Wにとる。後世の開墾及び試掘時の削平により、遺構の残存状況が悪く、墓壇上面の形状等は不明である。下甕の一部のみ原位置をとどめる。採集された破片から鉢（上甕）と打ち欠甕（下甕）による接口式甕棺墓であったと推定される。およそ+49°の角度で傾斜埋置される。墓壇の埋土中から黒曜石片1点が出土している。

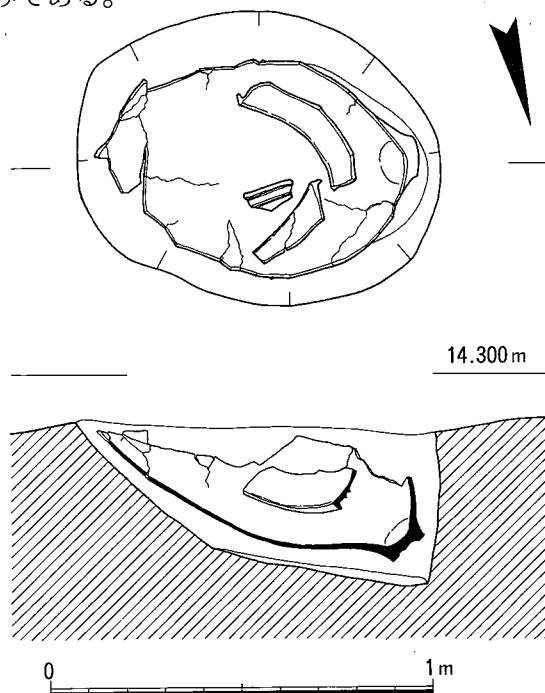


Fig. 7 1号甕棺墓実測図 (1/20)

2号甕棺墓 (Fig. 8)

遺跡の最西部A群にあり、1号墓と近接して埋置される。主軸をN-66°-Eにとる。1号墓と同様、削平により墓墳の形状等は不明である。上甕は原位置になかったが、下甕の残存状況と採集された破片資料から、鉢（上甕）と大型甕（下甕）の接口式甕棺墓と推定される。上下棺の合口部分を数個の礫により固定し、さらに目張り粘土を使用する丁寧な埋葬形態をとる。ほぼ水平に埋置される。

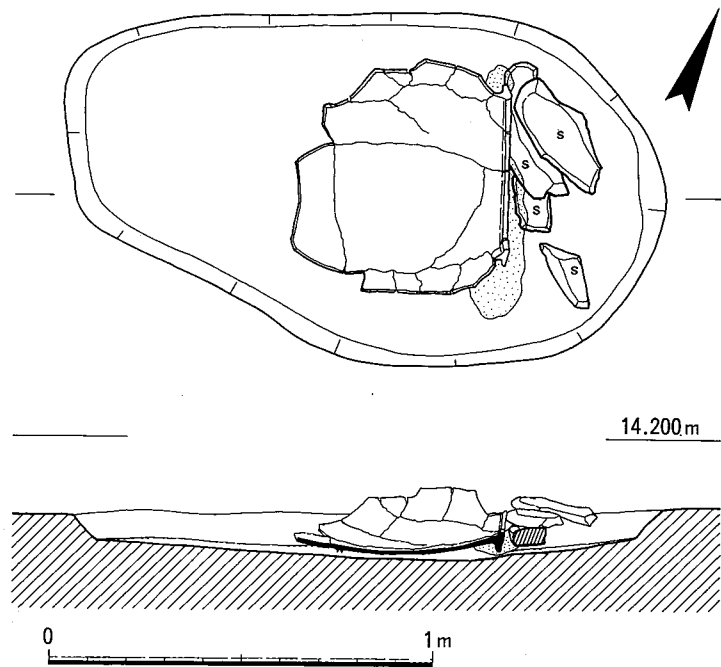


Fig.8 2号甕棺墓実測図 (1/20)

3号甕棺墓 (Fig. 9)

墓地の広がりを確認する為に、遺跡の最南端部を拡張して掘り下げた時に検出された。削平を受け墓墳および埋置方法などは一切不明だが、下甕底部付近のみ原位置を保っている。拡張部分の掘り下げの際、付近から他の甕棺片も出土したが、それらは後世の開墾等で南側に押し遣られ堆積したものと推測され、本遺構との関連は薄い。主軸をN-42°-Eにとり、埋置角度は+40°前後と傾斜埋置。C群に属する。

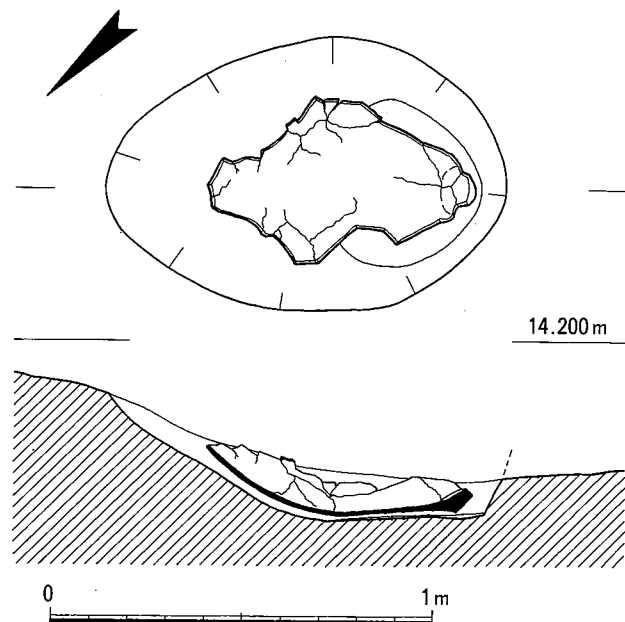


Fig.9 3号甕棺墓実測図 (1/20)

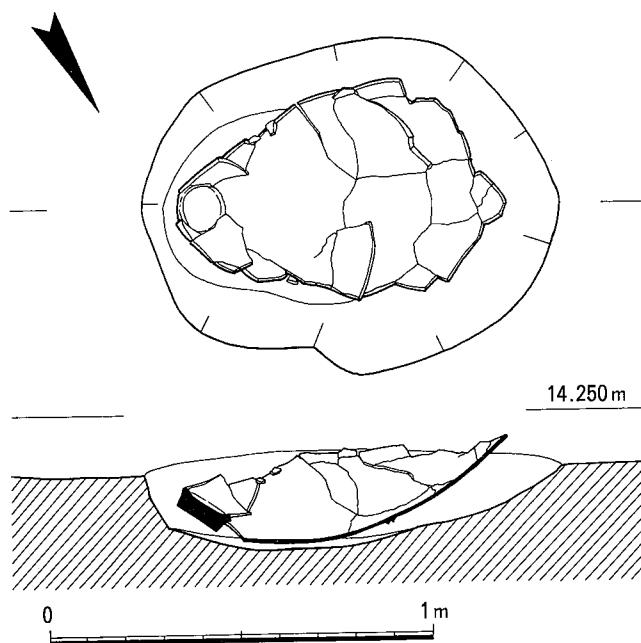


Fig.10 4号甕棺墓実測図 (1/20)

4号甕棺墓 (Fig.10)

C群の南西部にあり、3号及び22号墓間に近接して埋置される。検出されたのは下甕の一部のみで上甕及び墓壇上部の形状等は不明。下甕はほぼ楕円形プランの掘形に納められ、主軸をN-63°-Wにとる。埋置角度は+30°前後とやや傾斜ぎみの埋置である。

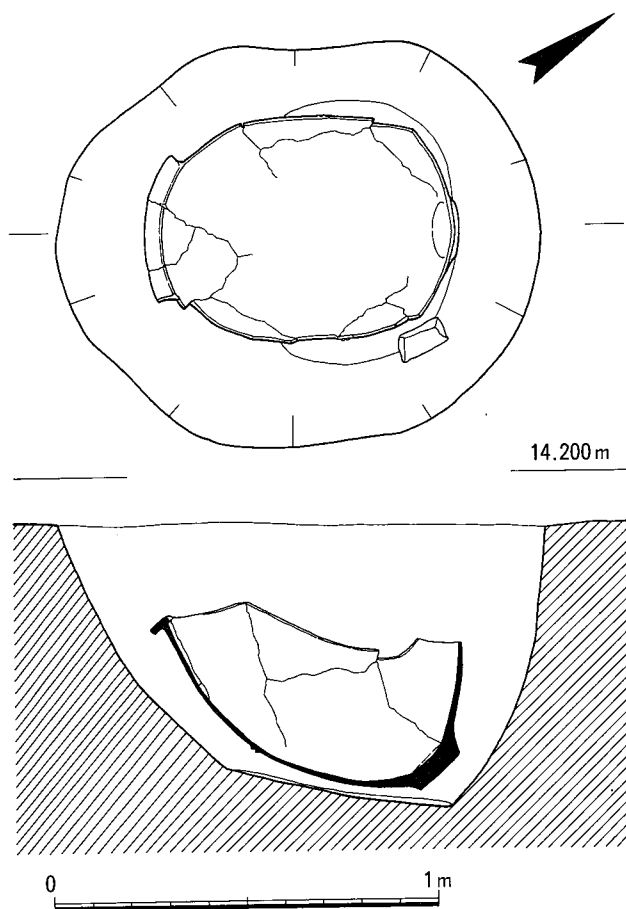


Fig.11 5号甕棺墓実測図 (1/20)

5号甕棺墓 (Fig.11)

C群の中央付近に位置し、6号と22号墓に挟まれて近接する。6号墓とは、棺の挿入方向でむかい合わせの形になる。6号墓とは、甕棺の形態等に共通する点が多く、何等かの因果関係が考えられる。墓壇上部および甕棺の大部分は攪乱を受けており、特に上甕の埋葬状況がはっきりしない。破片資料から判断すれば、鉢（上甕）+大型甕（下甕）の組合せで、埋置角度は+49°と傾斜の大きい埋置である。下甕の片方を礫で固定。埋葬主軸をS-32°-Wにとる。

6号甕棺墓 (Fig.12)

C群の北に位置し、5・7・8号墓に近接する。主軸をN-40°-Eにとり、5号墓と棺の差し込み方向が向き合う。検出された墓壇は、長軸約140cm×短軸約110cmの楕円形プラン。鉢（上甕）+大型甕（下甕）の接口式甕棺墓で、合口部に目張り粘土が残る。埋置角度は+38°で傾斜が大きい。下甕の中央部、被葬者側からみてやや右よりの位置から、割れた下甕破片が被さった状態で細形銅剣1口が出土した。銅剣は切っ先を下にして置かれており、周辺の埋土からは碧玉製管玉6点が検出された。

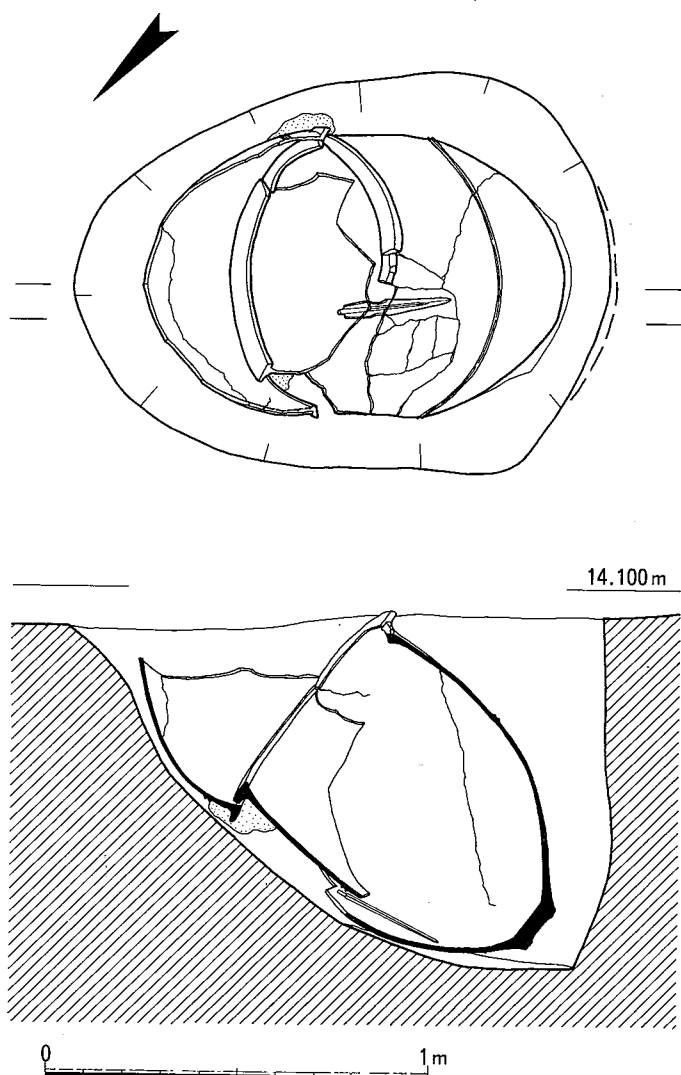


Fig. 12 6号甕棺墓実測図 (1/20)

7号甕棺墓 (Fig.13)

C群の北に位置し、8号墓に墓壇の一部を切られる。検出された墓壇プランは長軸約120cm×短軸約80cmの楕円形を呈する。上甕は破片のみの出土で原位置をとどめていないが、破片資料から鉢（上甕）+甕（下甕）の組合せと推定される。埋葬主軸はS-83°-Wに向き、埋置角度は+36°で傾斜して埋葬される。

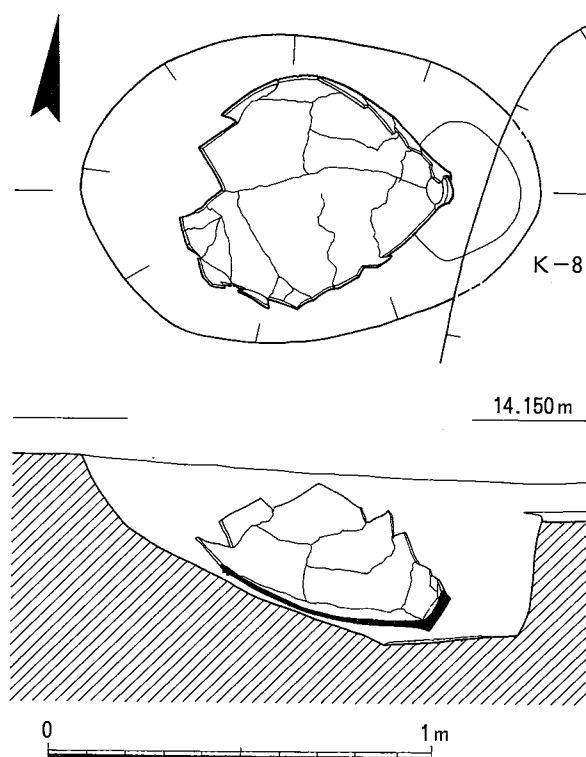


Fig. 13 7号甕棺墓実測図 (1/20)

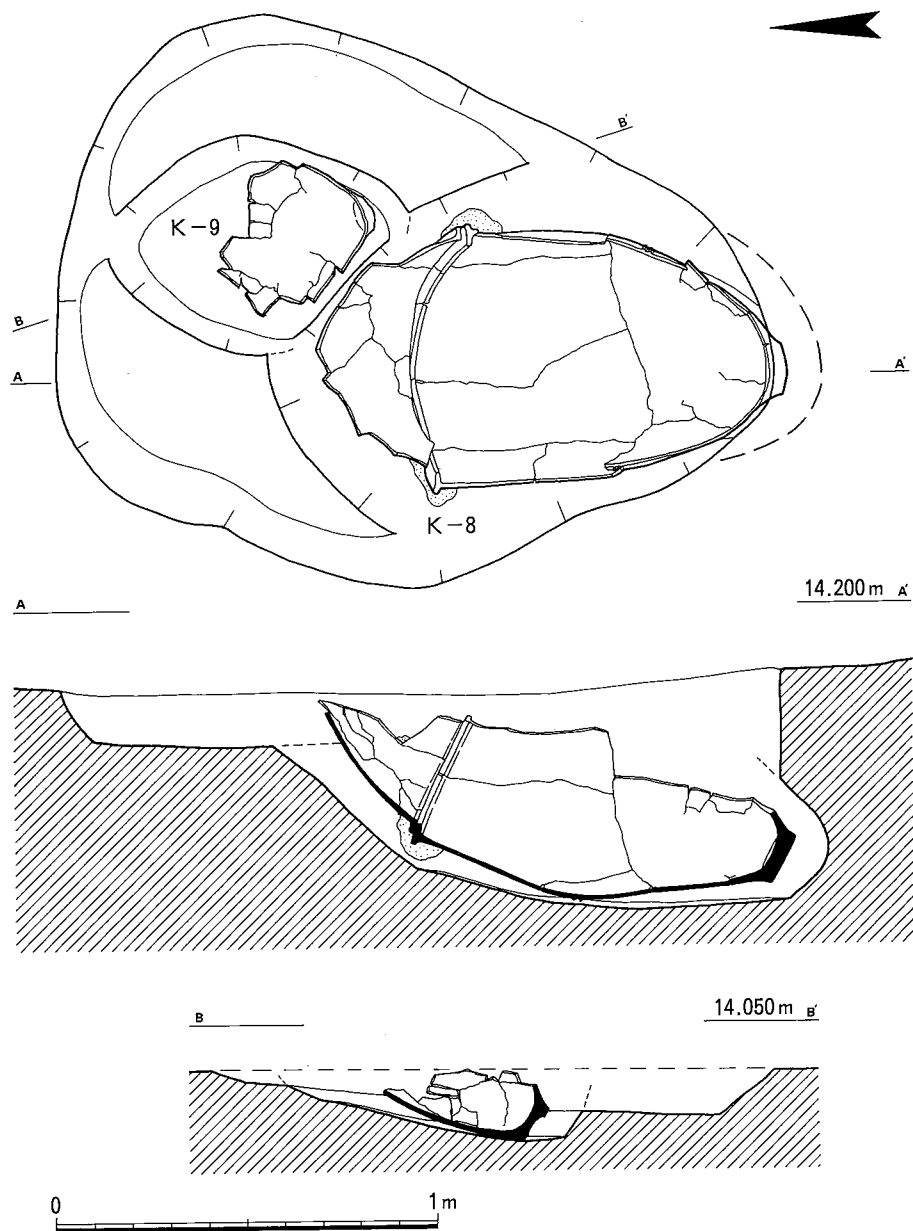


Fig.14 8・9号甕棺墓実測図 (1/20)

8号甕棺墓 (Fig.14)

C群の北側に位置する。7号墓の墓壇の隅と直交して切り合う。いわゆる二段掘りであるが、1次墓壇を切って後に9号墓が埋置されている。墓壇上部のプランは隅丸正方形であると推測されるが明らかではない。鉢（上甕）＋大型甕（下甕）の接口式甕棺墓で、合口部分に目貼り粘土を施す。埋葬主軸は、 $N-2^{\circ}-E$ にとり、埋置角度は $+23^{\circ}$ でやや傾斜して埋葬される。

9号甕棺墓 (Fig.14)

C群の北側、8号墓の一次墓壇を切って埋置されている。8号墓の埋土と混ざって、墓壇の切り合い関係を把握することができなかったが、8号墓の1次墓壇をさらに掘り下げて埋葬されており、8号墓より新しいことがわかる。下甕底部のみの検出で、上甕や墓壇プランの状況は不明である。埋葬主軸を $N-14^{\circ}-W$ にとり、埋置角推定 $+37^{\circ}$ とやや傾斜して埋葬されている。

10号甕棺墓 (Fig.15)

B群の北西部、12・21号墓と約1.5mの間隔をあけて平行して埋置される。墓壇プランは、上甕のほうに開く楕円形を呈するが、これは、本来、二段掘りの墓壇であった為であろう。鉢（上甕）＋大型甕（下甕）の接口式甕棺墓である。埋葬主軸を $N-56^{\circ}-E$ にとる。埋置角は推定 -6° を測り、下甕がやや高位にくる。

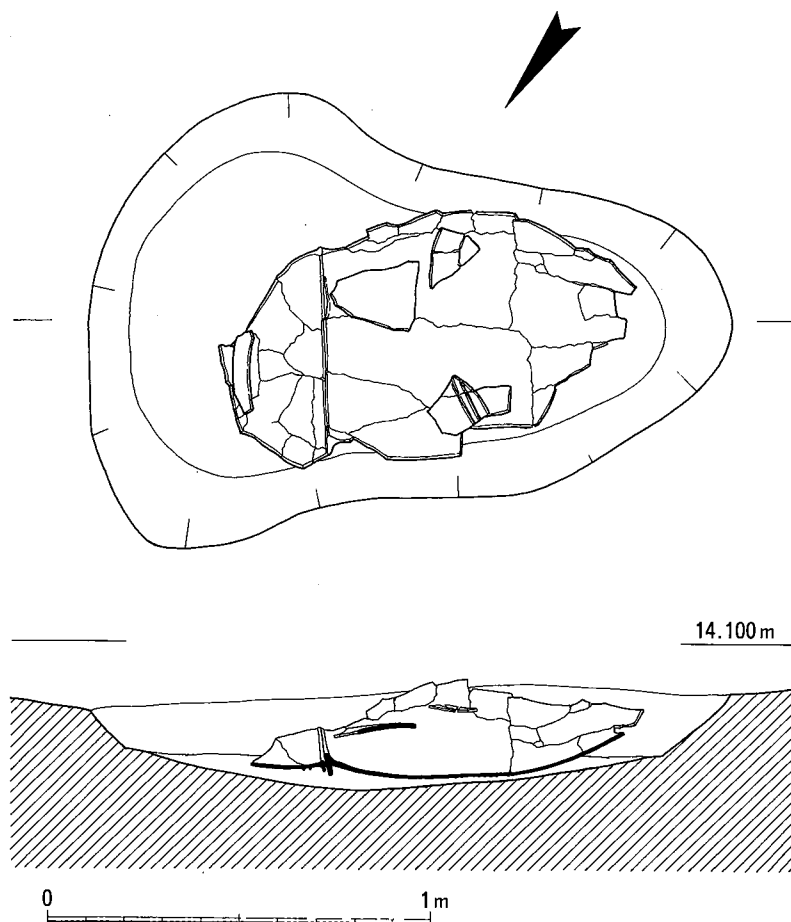


Fig.15 10号甕棺墓実測図 (1/20)

11号甕棺墓 (Fig.16)

B群の中程に位置し、21号墓と直交して切り合う。二段掘りの墓壇形態をとるが、1次墓壇のプランは削平により不明である。鉢（上甕）＋大型甕（下甕）の接口式甕棺墓である。埋葬主軸を $S-22^{\circ}-E$ にとり、埋置角は $+1^{\circ}$ ではほぼ水平である。埋土中より黒曜石片1点が出土している。

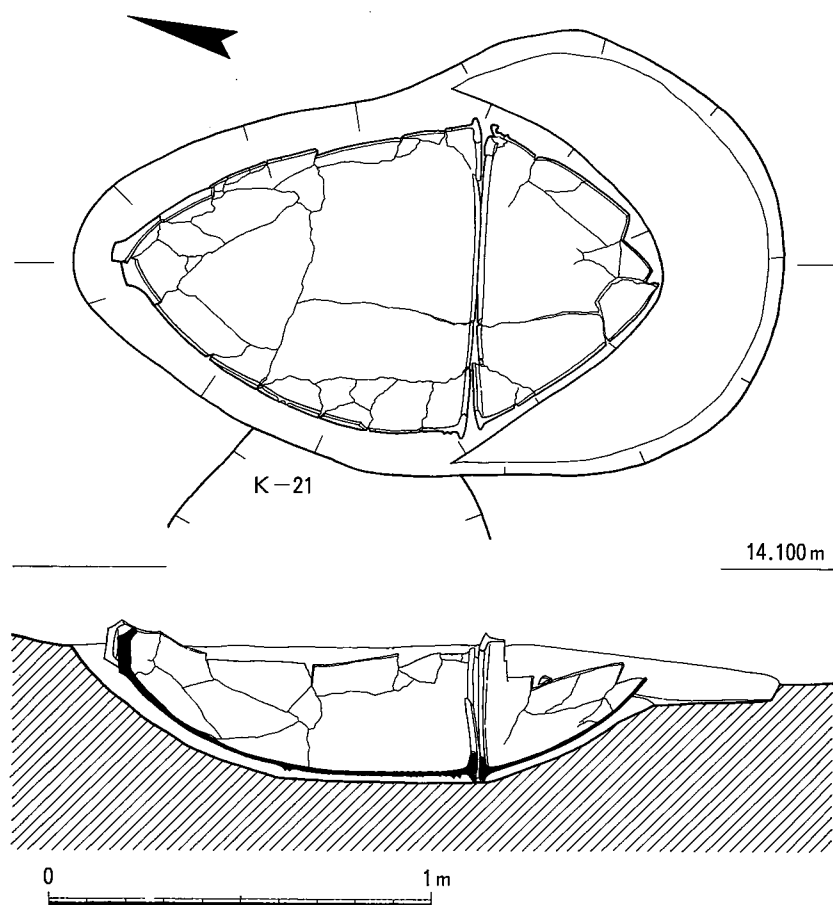


Fig.16 11号甕棺墓実測図 (1/20)

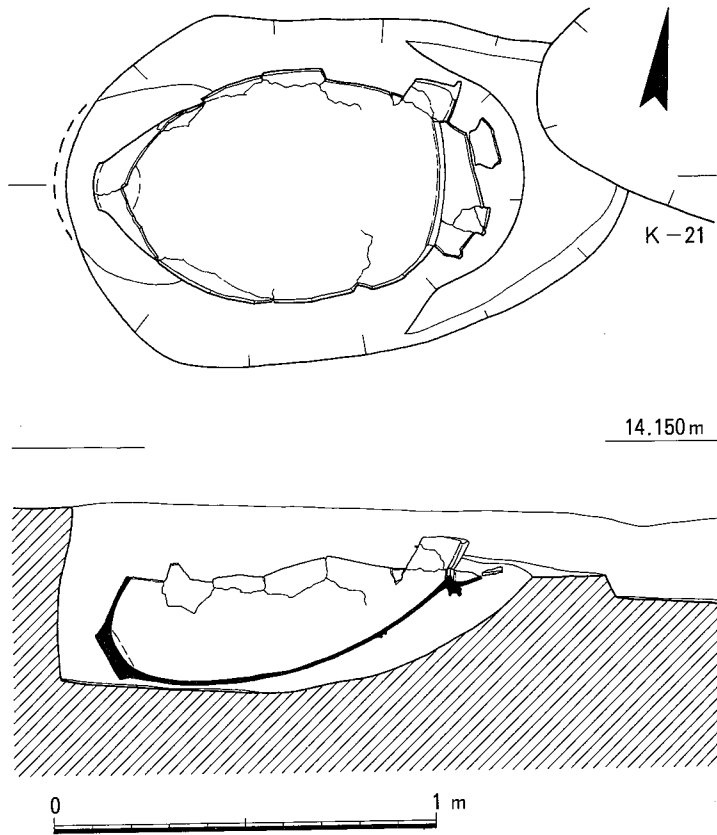


Fig. 17 12号甕棺墓実測図 (1/20)

12号甕棺墓 (Fig.17)

B群の南西部に位置し、21号墓と直列して切り合う。頭位側にテラスが残り、いわゆる二段掘りの墓壇であったと推定される。鉢（上甕）+大型甕（下甕）の接口式甕棺墓で、埋葬主軸をB群の中で一番多い北東方向（ $N-78^{\circ}-E$ ）から差し込む。埋置角度は $+28^{\circ}$ を測り、傾斜は大きい。

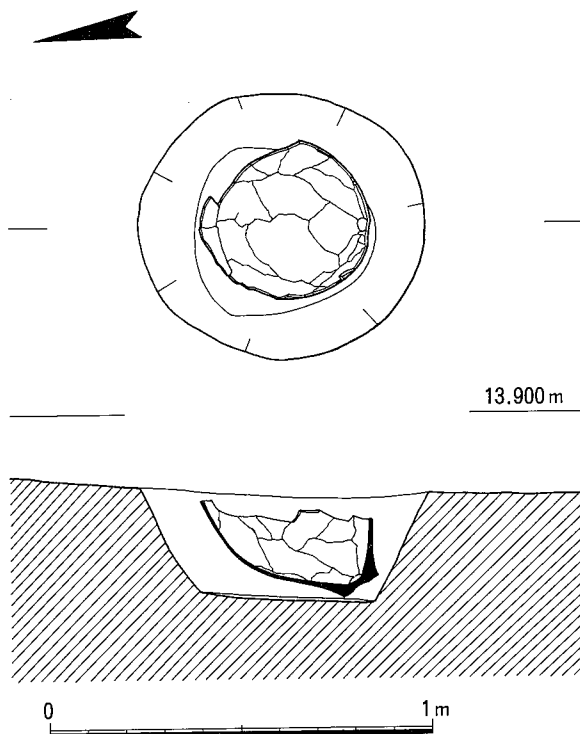


Fig.18 13号甕棺墓実測図 (1/20)

13号甕棺墓 (Fig.18)

D群の最北端にあり、K-15に近接する。下甕の一部のみ残存の小型甕棺である。ほぼ円形の墓壇プランであるが、上甕などの上部構造は明らかでない。24号墓などと同じく遺跡の最も低いところで検出された。斜面の関係で削平を免れたのであろう。埋葬主軸を $N-12^{\circ}-E$ にとり、埋置角 $+55^{\circ}$ の非常に傾斜で埋葬されている。

14号甕棺墓 (Fig.19 : PL-4)

C群の北西部にやや他の甕棺と離れて位置する。鉢（上甕）+大型甕（下甕）の接口式甕棺墓で、合口部には目貼り粘土を施す。埋葬主軸は $N-45^{\circ}-E$ にとり、副葬品をもつ6号墓や23号墓とそれぞれ一定の距離を置いて平行埋葬されている。甕棺の規模からして同等の被葬者の墓であると推測するが、副葬品はみつかっていない。埋置角 $+35^{\circ}$ でつよく傾斜して埋葬されている。

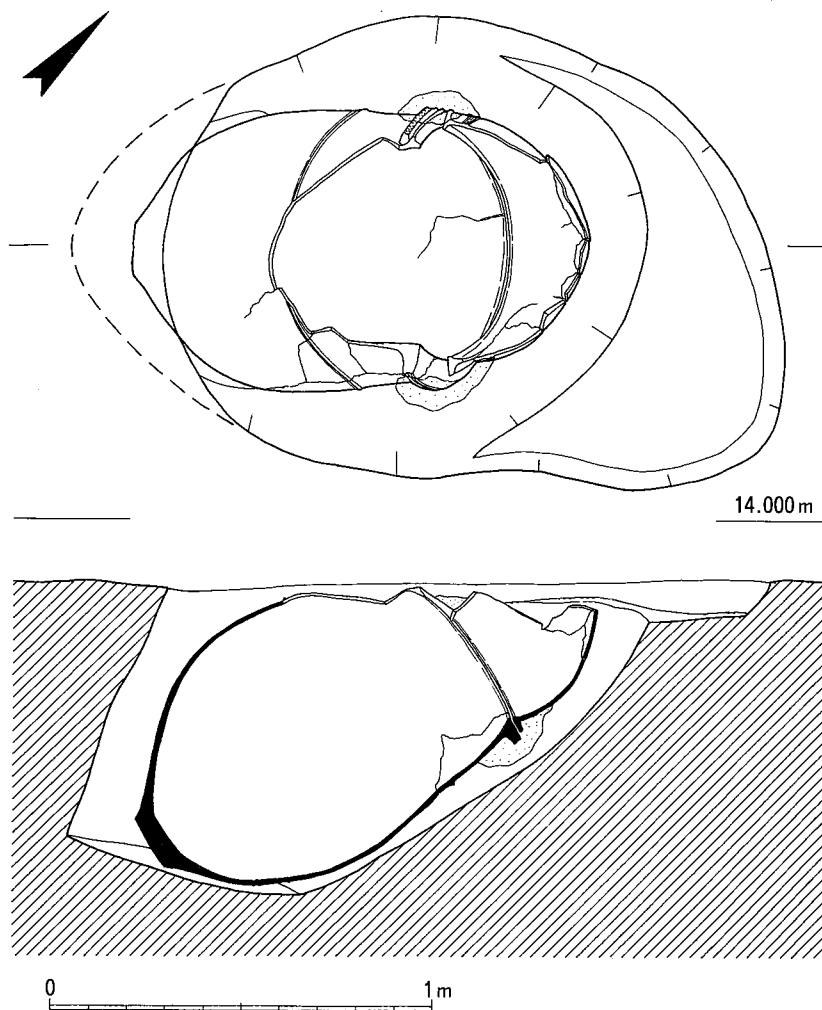


Fig.19 14号甕棺墓実測図 (1/20)

15号甕棺墓 (Fig.20 : PL-4)

D群3基のうち、13号墓と18号墓に挟まれた真ん中に位置する。墓壙は、不整楕円形の1次墓壙に2次墓壙を掘りこんでいる。鉢（上甕）+甕（下甕）を組み合わせる接口式甕棺墓で、傾斜角 -6° で下甕を高位にして埋置される。主軸は同群の甕棺墓と同じく空閑地とほぼ平行して $N-46^{\circ}-E$ に向く。

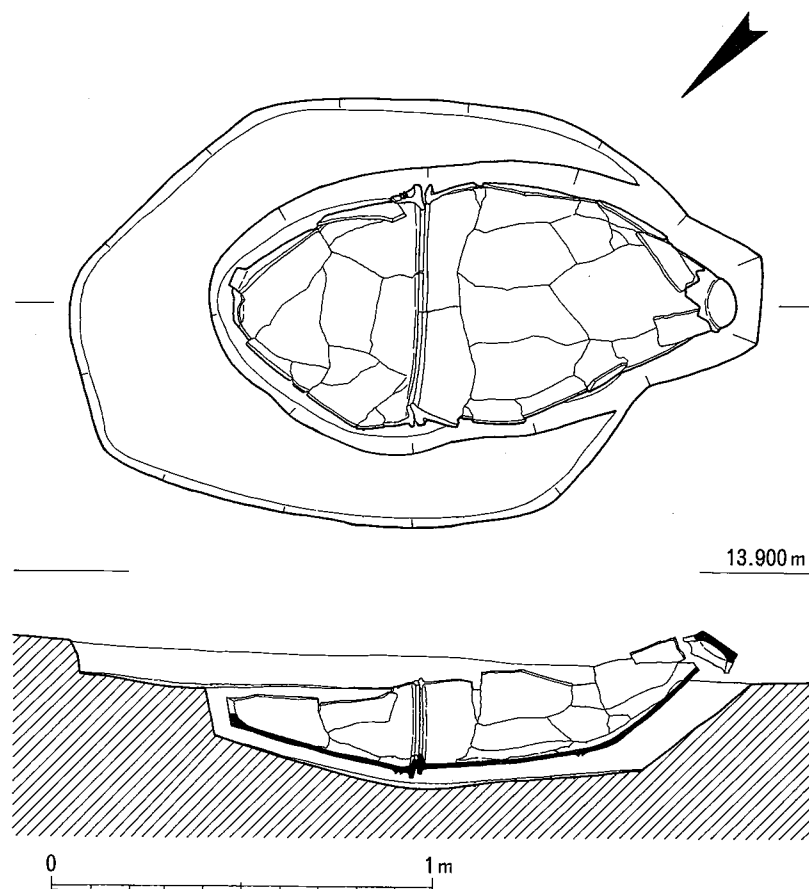


Fig.20 15号甕棺墓実測図 (1/20)

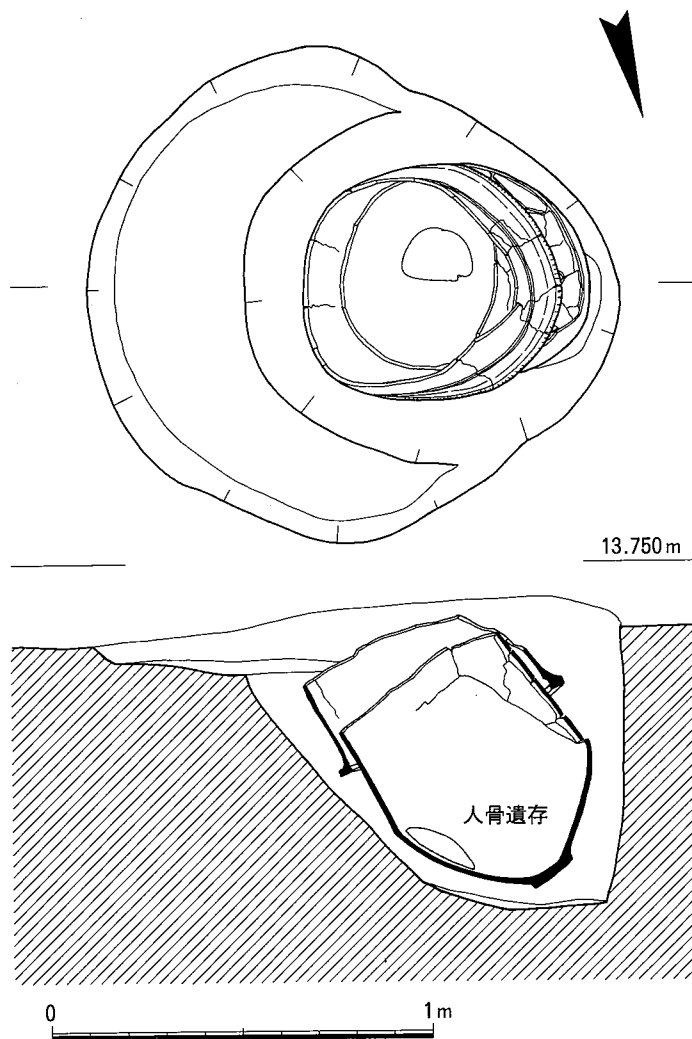


Fig.21 16号甕棺墓実測図 (1/20)

16号甕棺墓 (Fig.21 : PL-4)

B群の東、墓群全体の北東端にあり、他の甕棺とやや距離を置いて埋置される。B群の他の甕棺とは明らかに形態差があり、時期的に一線を画する必要がある。いわゆる二段堀りで、径約130cmの円形の墓壇プランを検出した。口縁打ち欠きの下甕(甕)に上甕(甕)を被せた呑口式甕棺墓で、埋置角度は、 $+54^{\circ}$ と傾斜が極めて大きい。埋葬主軸を $N-76^{\circ}-E$ にとる。下甕底部付近に人骨細片混じりの土が堆積していた。ほか、埋土中から黒曜石片1点が出土している。

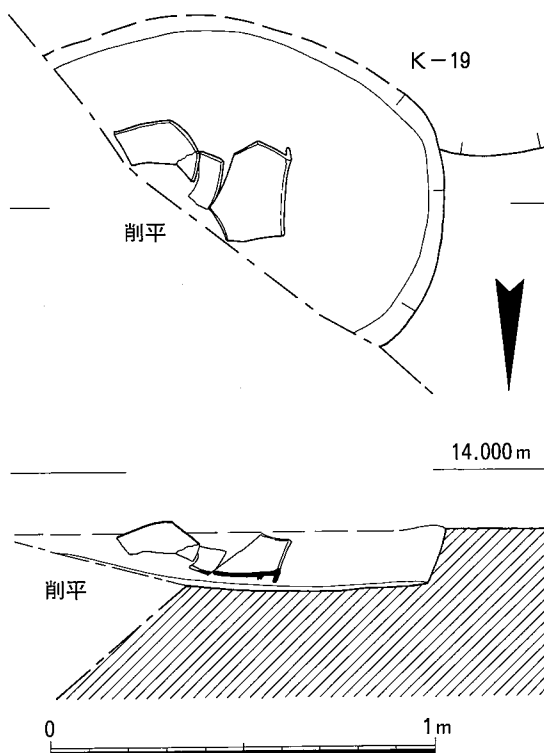


Fig.22 17号甕棺墓実測図 (1/20)

17号甕棺墓 (Fig.22)

調査区の最北端、B群に位置し、19号甕棺墓を切る。残存深約15cmしかなく墓壇及び甕棺の埋葬状況は不明であるが、下甕のものと推定される口縁部破片が原位置を保つ。主軸は北東方向にむき、埋置角度は不明。

18号甕棺墓 (Fig.23 : PL-5)

D群の南部に位置する。墓壇は、径約150cm規模の円形プランからの二段掘りで、遺構の残存状況が良好である。鉢（上甕）＋甕（下甕）の接口式で、傾斜角 $+50^{\circ}$ と大きく傾斜して埋置される。埋葬主軸をN- 63° -Eにとり、D群の13・15号墓と軸を同じにして埋葬される。下甕底部付近に熟年男性の人骨の遺存が認められる。

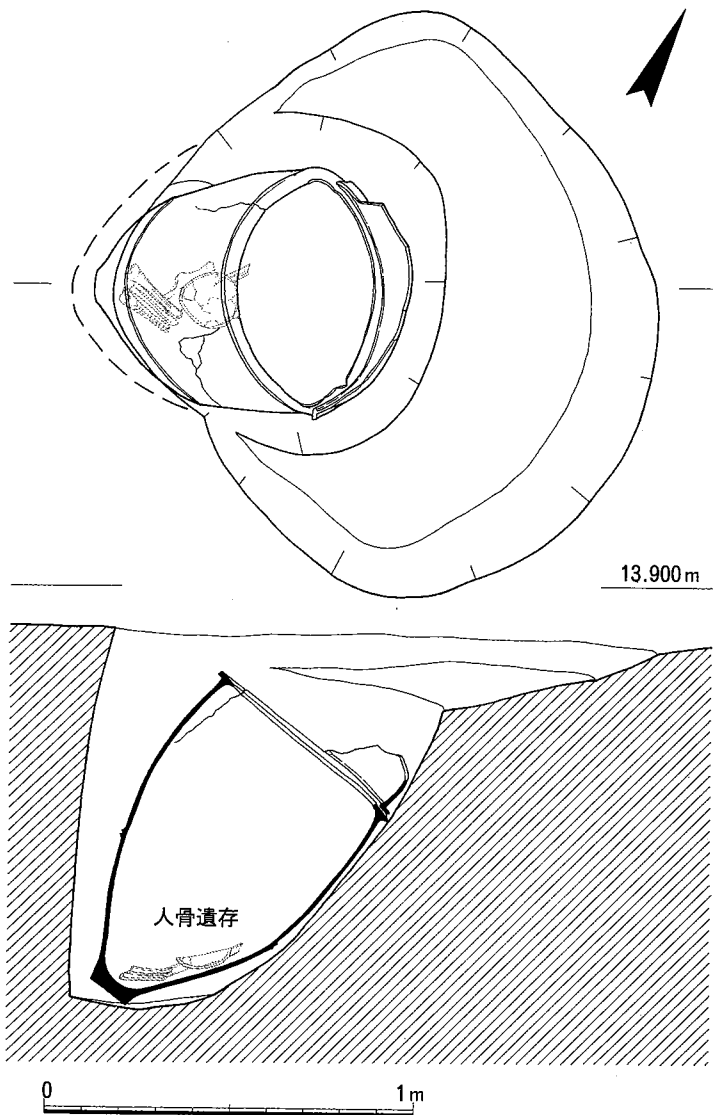


Fig.23 18号甕棺墓実測図 (1/20)

19号甕棺墓 (Fig.24)

遺跡の最北部にあり、B群に属する。17号墓と切り合い、溝により墓壇の一部を攪乱されている。検出面での墓壇は、長軸約150cm、短軸約100cmの楕円形プラン。合口方式は、鉢（上甕）＋大型甕（下甕）の接口式である。埋葬主軸は、N- 40° -Eにとり、傾斜角 $+6^{\circ}$ で水平に埋置される。埋土中から黒曜石片が出土している。

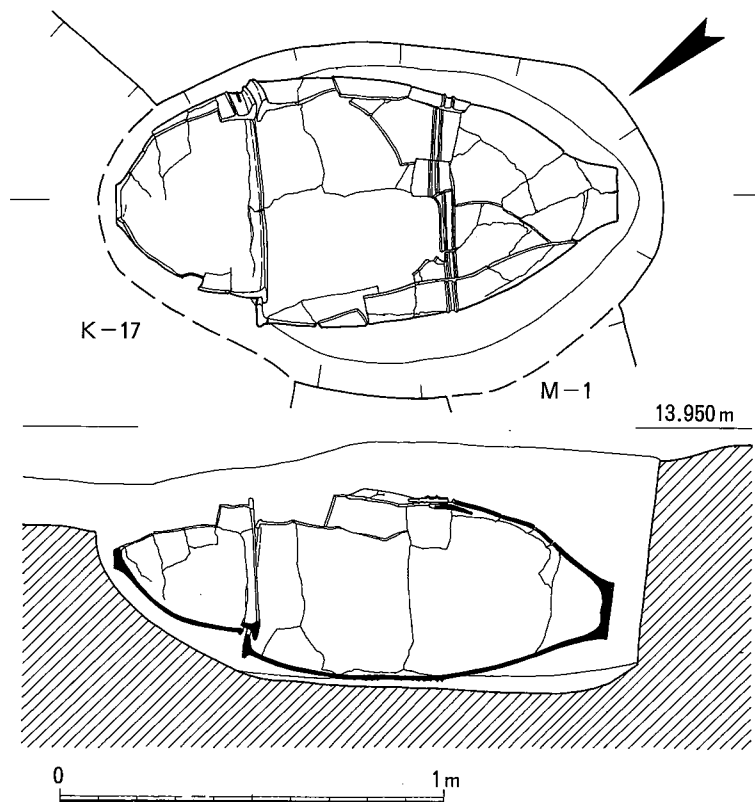


Fig.24 19号甕棺墓実測図 (1/20)

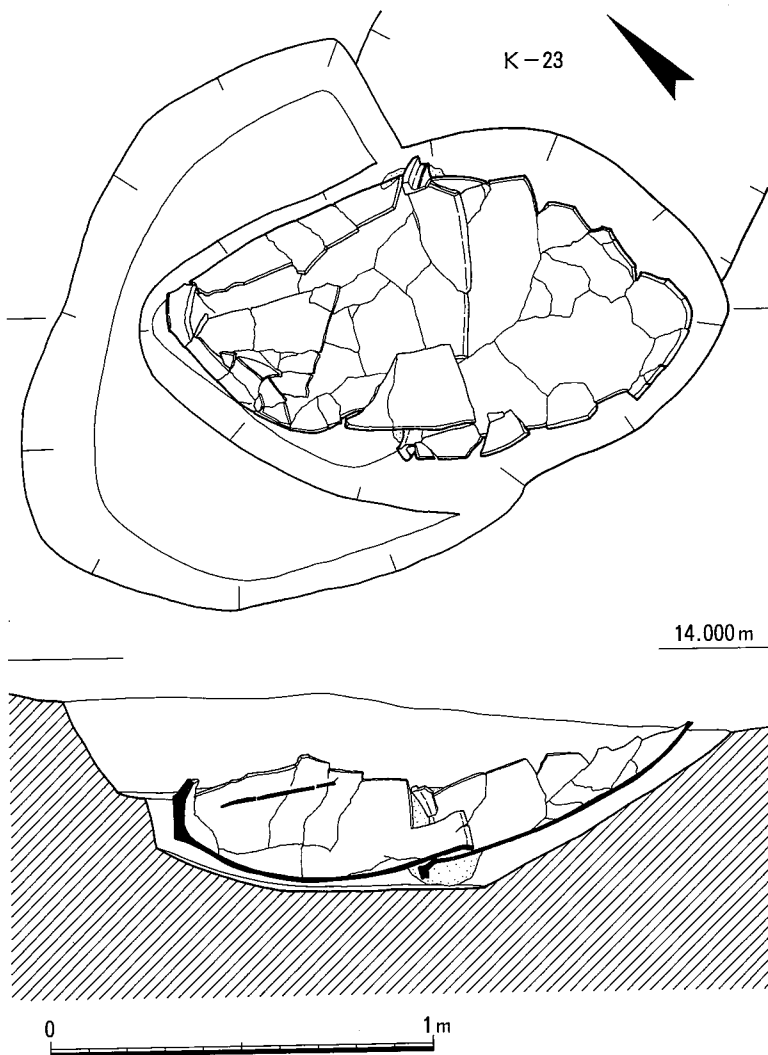


Fig.25 20号甕棺墓実測図 (1/20)

20号甕棺墓 (Fig.25)

遺跡の南東端、C群に位置する。23号墓の上に直交して埋置される。挿入方向とは逆方向にテラス状の掘りこみが検出されているが、そこからは、中期初頭の小型甕の底部片が出土している。小型甕棺墓の墓壇であった可能性があるが、ここでは一括している。甕（上甕）+打欠甕（下甕）の呑口式甕棺墓で、合口部に目貼り粘土を施す。埋葬主軸をS-44°-Eにとり、+25°前後で傾斜埋置される。埋土中から黒曜石片が出土している。

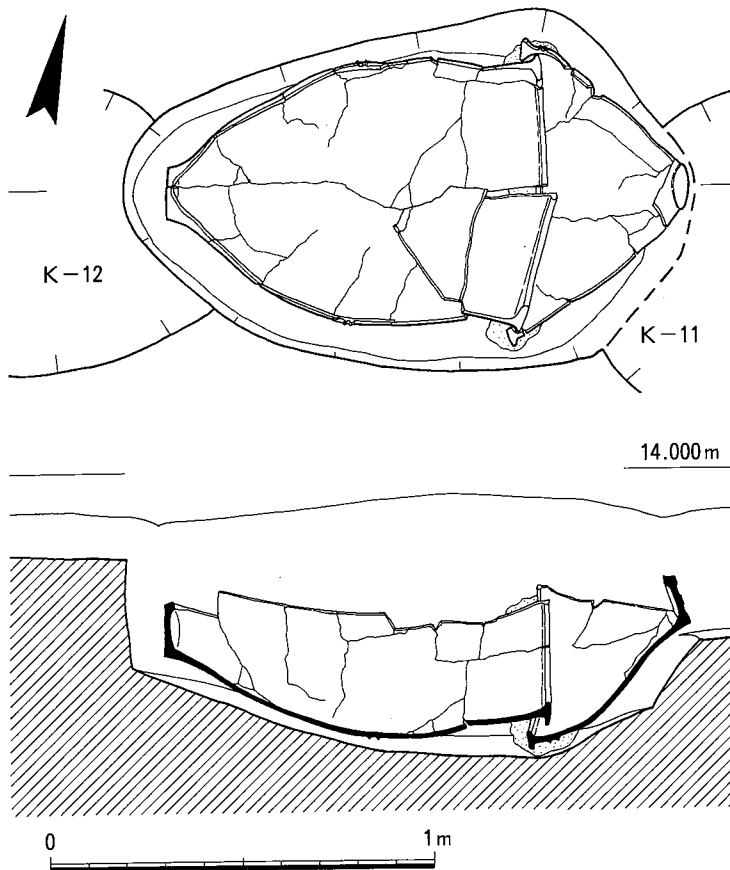


Fig.26 21号甕棺墓実測図 (1/20)

21号甕棺墓 (Fig.26 : PL-5)

B群の南西部に位置し、12号墓の墓壇を直列に切り、11号墓に直交して切られる。検出面での墓壇は、長軸約150cm、短軸約90cmの楕円形プランを呈し、鉢（上甕）+大型甕（下甕）の接口式で、合口部に目貼り粘土を施す。埋葬主軸をN-74°-Eにとる。埋置角0°で水平に埋葬される。

22号甕棺墓 (Fig.27 : PL-5)

C群に属し、4号墓と5号墓に挟まれて位置する。検出面の墓壇は、長軸約160cm、短軸約80cmの楕円形プランで、墓壇の主軸方位はS-61°-Wを示す。上下甕とも抜き取られて損失著しく、下甕の口縁部を含む破片数点のみが残存するだけである。甕棺の埋置状況等は不明。口縁接合部分に目貼り粘土が残る。

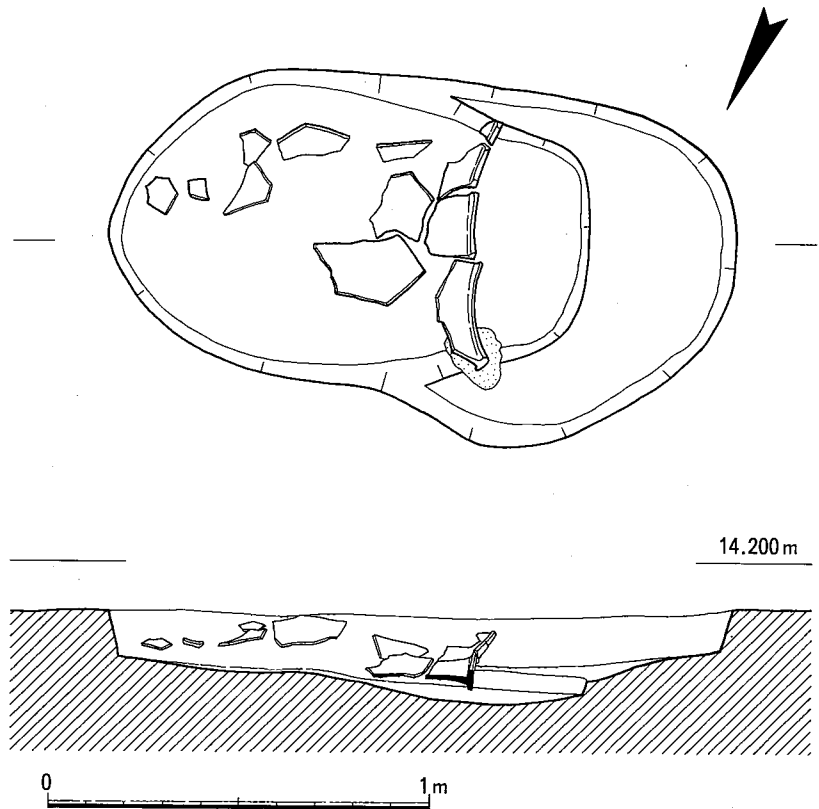


Fig.27 22号甕棺墓実測図 (1/20)

23号甕棺墓 (Fig.28 : PL-3)

C群の南側に位置し、20号墓に直交して切られる。検出墓壇は、長軸約180cm×短軸約100cmの楕円形プラン。大型甕（上甕）+大型甕（下甕）の接口式の甕棺墓で、合口部に目貼り粘土を施す。下甕の端、被葬者の左側の位置に細形銅戈1口を副葬する。銅戈は、切っ先を下にし、甕棺に貼り付いた状態で検出されており、柄などの痕跡はない。埋葬主軸はN-61°-Eにとり、埋置角+38°で傾斜して埋葬される。

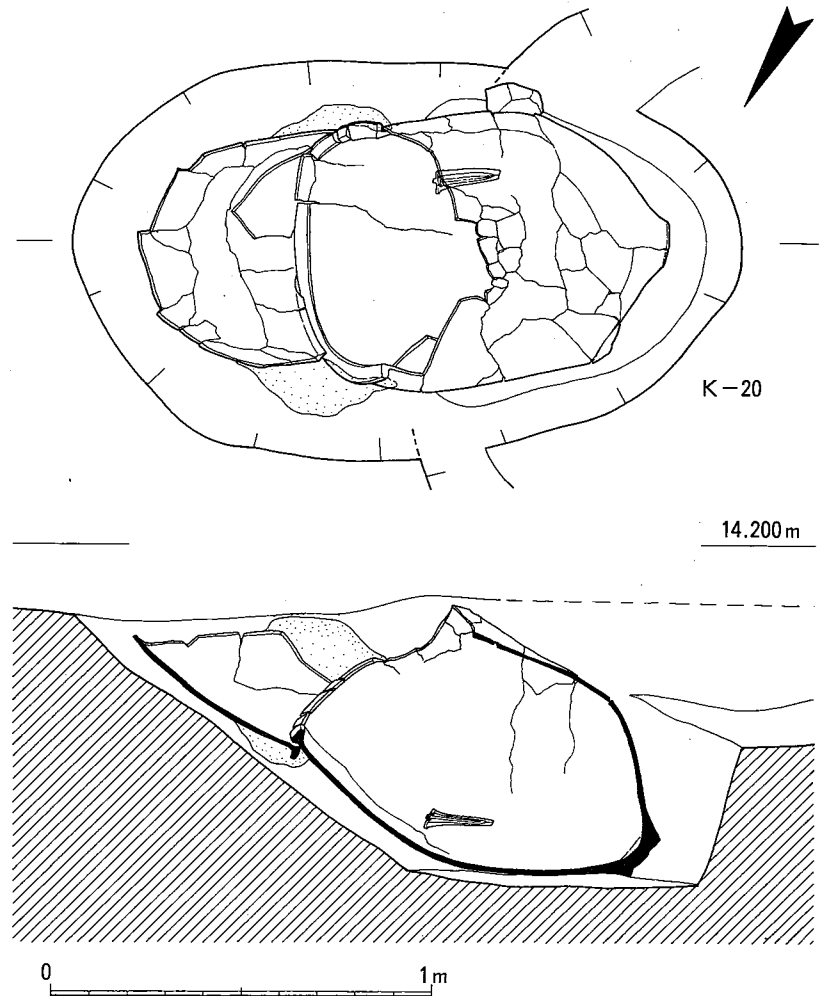


Fig.28 23号甕棺墓実測図 (1/8)

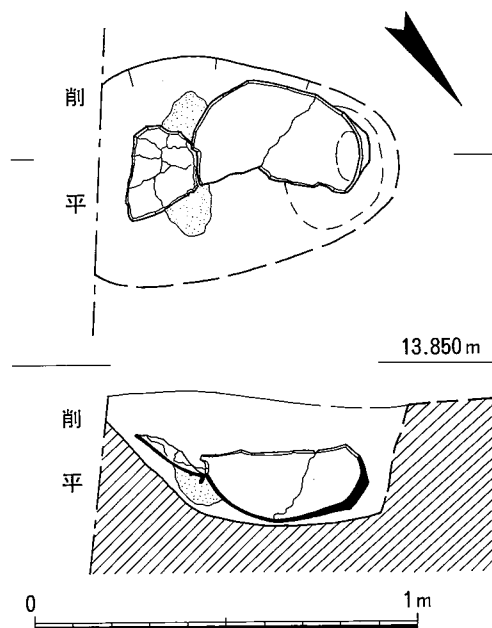


Fig.29 24号甕棺墓実測図 (1/20)

24号甕棺墓 (Fig. 29)

C群の南東、遺跡の東側崖面に半分露出したかたちで検出された。実測中に大雨で崖部が一部崩落し、遺構の半分を記録することができなかった。小型甕（上甕）+打欠壺（下甕）の組合せの呑口式の小型甕棺墓で、合口部に目貼り粘土を施す。埋葬主軸をN-56°-Eにとり、傾斜角+38°をもって埋置される。

(2) 土壌

土壌は計4基検出したが、その内3基は、調査の結果、近世・近代以降の攪乱穴と判明した。ここでは、弥生時代のものである1号土壌のみ報告する。

1号土壌 (Fig. 30)

調査区北部、甕棺墓群B群のほぼ中央部で検出した。形態は不整形な楕円形プランで、長軸約3m、短軸約2mの規模をもつ。深さは検出面から約40cmを測り、甕棺墓の墓壇底のレベルとそう変わらない。地形が削平されていなければ、かなりの深さであったと推定される。出土遺物は、弥生

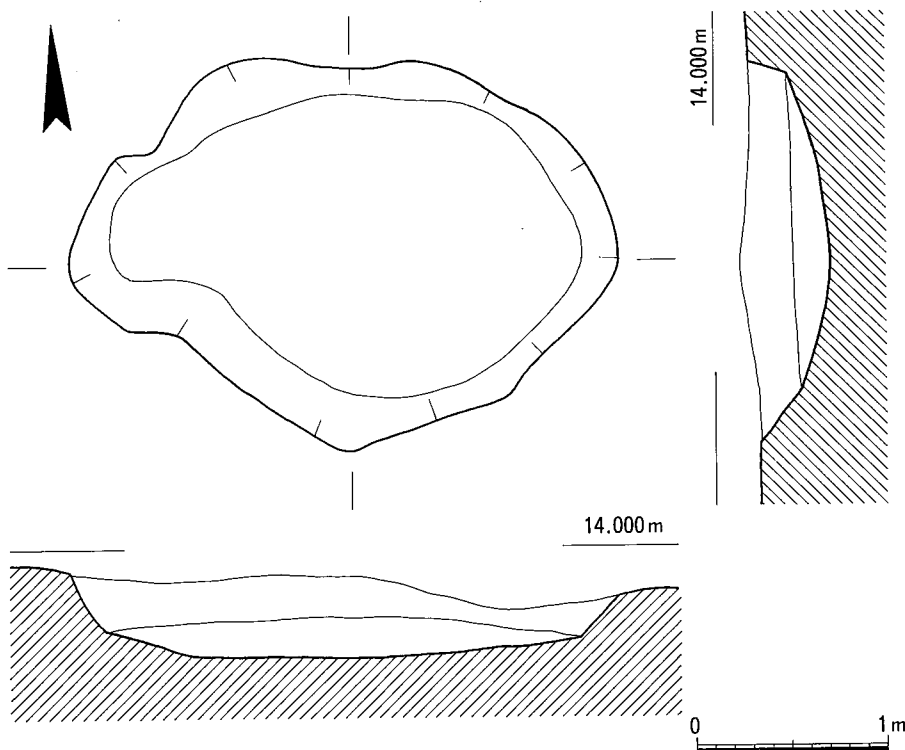


Fig.30 1号土壌実測図 (1/40)

中期の土器 (Fig.54) や土製紡錘車 (Fig.58)、黒曜石片等であり、これらは主に上層付近から出土した。遺構の位置及びその時期的な関連からして甕棺墓群に伴う祭祀遺構である可能性が考えられるが、丹塗土器などは出土していない。福岡市西区の飯氏遺跡群Ⅱ区でも、弥生中期初頭の甕棺墓群に関連して同様な遺物の出土した土壌が検出されており、この遺構もそれに近い例といえるだろう。

No.	器種(上+下甕)	合口	目貼粘土	埋葬方位	埋值角度	時 期	備 考
K-1	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-73°-W	+49°	久米Ⅲa期	A群・黒曜石片
K-2	上下 鉢形土器 大型甕	接口	有	N-66°-E	ほぼ水平	久米Ⅲa期	A群
K-3	上下 一 大型甕	不明	無	N-42°-E	+40°	久米Ⅱb期	C群
K-4	上下 一 大型甕	不明	無	N-63°-W	+30°	久米Ⅲb期	C群
K-5	上下 鉢形土器 大型甕	不明	無	S-32°-W	+40°	久米Ⅱb期	C群
K-6	上下 鉢形土器 大型甕	接口	有	N-40°-E	+38°	久米Ⅱb期	C群・細形銅剣1 碧玉製管玉6
K-7	上下 鉢形土器 甕	不明	無	S-83°-W	+36°	久米Ⅲb期	C群
K-8	上下 鉢形土器 大型甕	接口	有	N-2°-E	+23°	久米Ⅲb期	C群
K-9	上下 一 甕	不明	無	N-14°-W	+37°	久米Ⅲb期	C群
K-10	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-56°-E	-6°	久米Ⅲc期	B群
K-11	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	S-22°-E	+1°	久米Ⅲc期	B群・黒曜石片
K-12	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-78°-E	+28°	久米Ⅱb期	B群
K-13	上下 一 小型甕	不明	無	N-12°-E	+55°	久米Ⅲb期	D群
K-14	上下 鉢形土器 大型甕	接口	有	N-45°-E	+35°	久米Ⅱb期	C群
K-15	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-46°-E	-6°	久米Ⅲc期	D群
K-16	上下 甕 甕	呑口	無	N-76°-E	+54°	久米Ⅰ期	B群・人骨遺存 黒曜石片
K-17	上下 一 甕	不明	無	不 明	不明	久米Ⅲc期	B群
K-18	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-63°-E	+50°	久米Ⅲa期	D群・人骨遺存
K-19	上下 鉢形土器 大型甕	接口	無	N-40°-E	+6°	久米Ⅲc期	B群・黒曜石片
K-20	上下 大型甕 打欠甕	呑口	有	S-44°-E	+25°	久米Ⅱa期	C群・黒曜石片
K-21	上下 鉢形土器 大型甕	接口	有	N-74°-E	±0°	久米Ⅲc期	B群
K-22	上下 一 大型甕	不明	有	S-61°-W	不明	久米Ⅲc期	C群
K-23	上下 大型甕 大型甕	接口	有	N-61°-E	+38°	久米Ⅱa期	C群・細形銅戈1 人骨遺存
K-24	上下 小型甕 小型壺	呑口	有	N-56°-E	+38°	久米Ⅲb期	C群

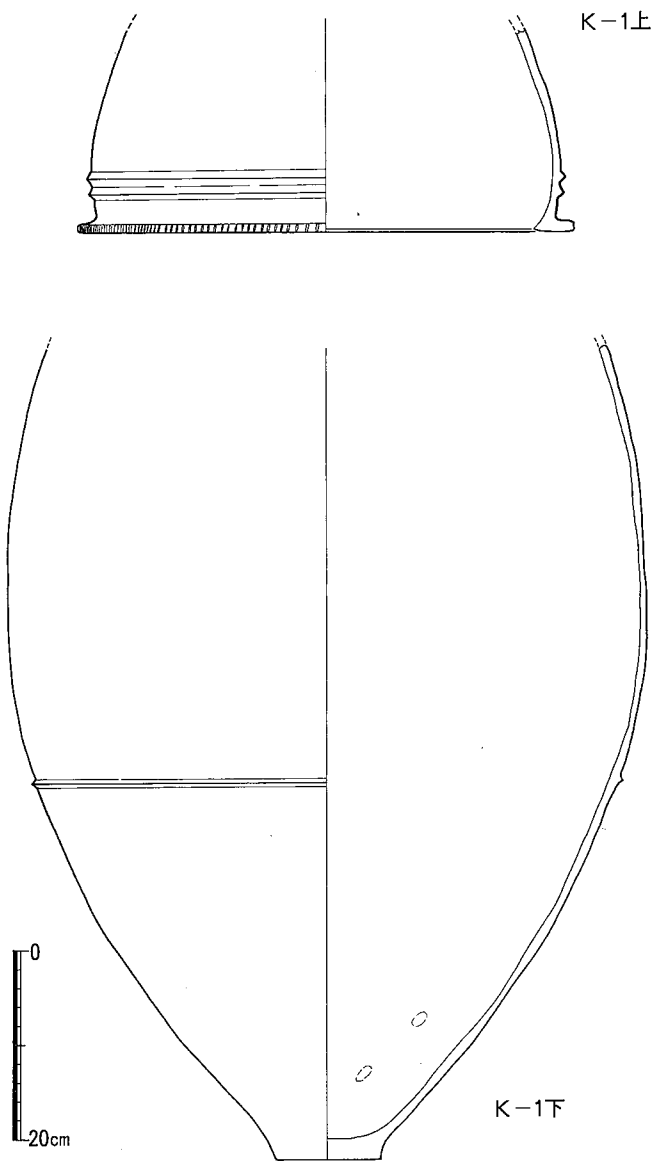
Tab.3 久米遺跡甕棺墓一覽表

2. 遺物

(1) 土器

(a) 甕棺

甕棺は、計24基分、総個体数42点を数える。その内訳をみると、大型甕（器高75cm以上）16(+4)点、中・小型甕（器高75cmより下）6(+2)点、上甕としての鉢形土器14点となる。時期的には、前期末～中期中頃までに及び、そのほとんどが中期前半期の所産である。形態的に特徴的なものが多いのは、当該期において棺の形態的な変異の幅が大きいことを示唆している。1・11号墓のように、口縁の刻目が中期前葉まで残るもの、23号墓のように大型でありながら胴部突帯がないもの、などが特徴的な甕棺としてあげられるが、これは、糸島周辺の甕棺の地域的特性とみてよかろう。また、中期前葉の早い段階で、上甕専用の鉢形土器が定着している点も、墓地全体の特性としてあげられる。



1号甕棺墓

上甕 逆L字状の口縁をもつ鉢形土器。下半部は欠失。口唇部は、偏平に整え全面に斜線状の刻目を施す。口縁下に貼り付け三角突帯2条。調整は、内外面ともナデ、口縁部は横ナデ仕上げである。器色は、内外黄褐色で内面に黒塗り痕。胎土には、砂粒を均一に含む。残存高21.4cm、復元外口径52.0cm、内口径43.6cmを測る。(Fig.31)

下甕 口縁打ち欠きの大型甕。胴中位よりやや下に貼り付け三角突帯1条。胴部最大径は、それより上位にあり、器形は卵形となる。器壁は、胴中位で8mm前後。調整は、内外面ともナデ、底部付近内面に指おさえ。器色は、内外面黄褐色を呈し、胎土には、砂粒を均一に含む。焼成良好。残存器高85.6cm、胴部最大径67.0cm、底部径11.2cmを測る。

(Fig. 31:PL-6)

Fig.31 1号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

2号甕棺墓

上甕 端部を丸くおさめた逆L字状の口縁をもつ鉢形土器。下半部を欠く。口縁平坦面は水平で、口縁下に粘土接合痕と思われる凹みとつぶれぎみの突帯1条が廻る。器壁は、胴部で8～12mm前後。調整は、内外面ナデ。器色は、内面黄褐色、外面橙黄褐色。内面に黒塗り痕が残る。胎土には、砂粒を均一に含む。残存器高22.8cm、外口径54.0cm、内口径45.6cmを測る。(Fig.32)

下甕 内に大きく張り出す分厚い口縁をもった大型甕。底部欠失。外に低く傾いた口縁は、内外とも端部を丸く且つ分厚く仕上げる。胴中位に貼り付け三角突帯2条。器形は、下半部がやや膨らみぎみに立ち上がり、口縁付近ですばまる砲弾形。器壁は、胴部で8～12mm。調整は、内外面ナデ。器色は、内外面黄褐色を呈する。胎土には砂粒を均一に含む。残存器高82.6cm、外口径63.0cm、内口径53.6cm、胴部最大径64.4cmを測る。

(Fig.32)

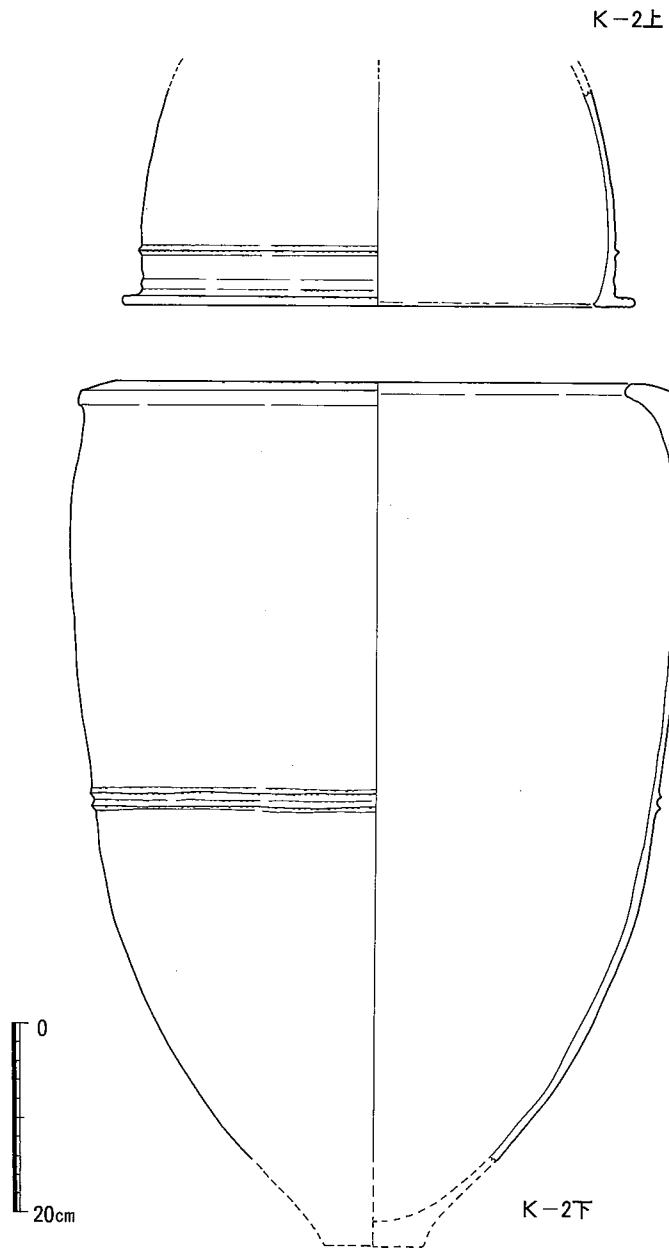


Fig.32 2号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

3号甕棺墓

下甕 底部のみ残存の大型甕。復元径18.0cmを測る径の大きな底部からやや開き気味に膨らみ立ち上る。器壁は胴下部付近で15～20mm前後と厚め。調整は内外面ナデ、底部内面に指おさえ、底部外面に指おさえと刷毛目痕が残る。器色は、内外面暗黄褐色。胎土には粗砂をまばらに含む。残存器高36.4cm。(Fig.33)

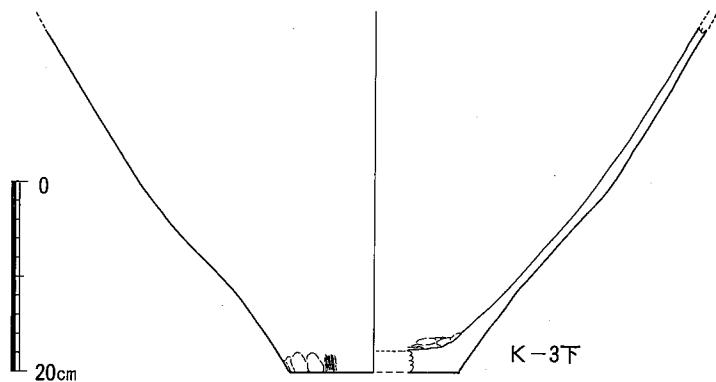


Fig.33 3号甕棺墓下甕実測図 (1/8)

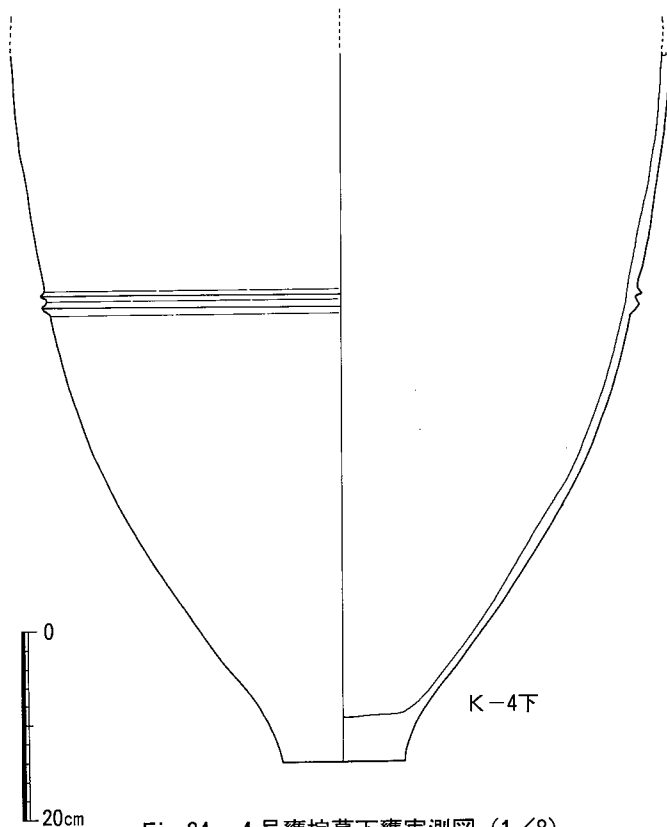


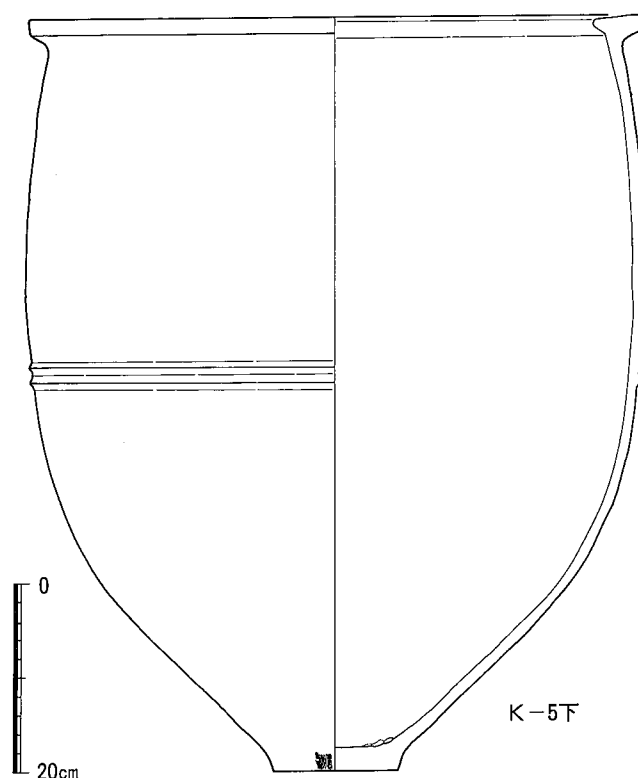
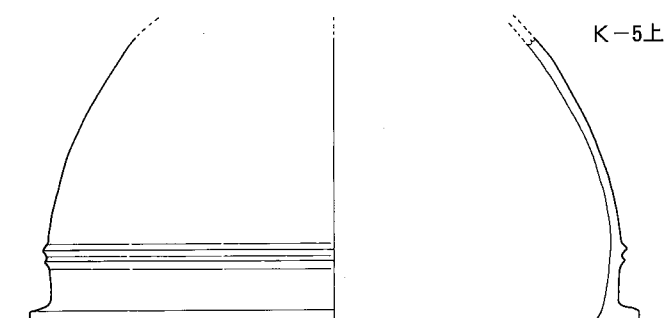
Fig.34 4号甕棺墓下甕実測図 (1/8)

4号甕棺墓

下甕 口縁部を欠く大型甕。厚さ4.6cmの分厚い底部。胴中位に貼り付け三角突帯2条。胴部最大径はそこより上位にあり、器形は砲弾形をなす。器壁は、胴部で10mm前後。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外面黄褐色。胎土には、砂粒を均一に含む。焼成良好。残存器高75.0cm、底部径13.0cmを測る。(Fig.34 : PL-6)

5号甕棺墓

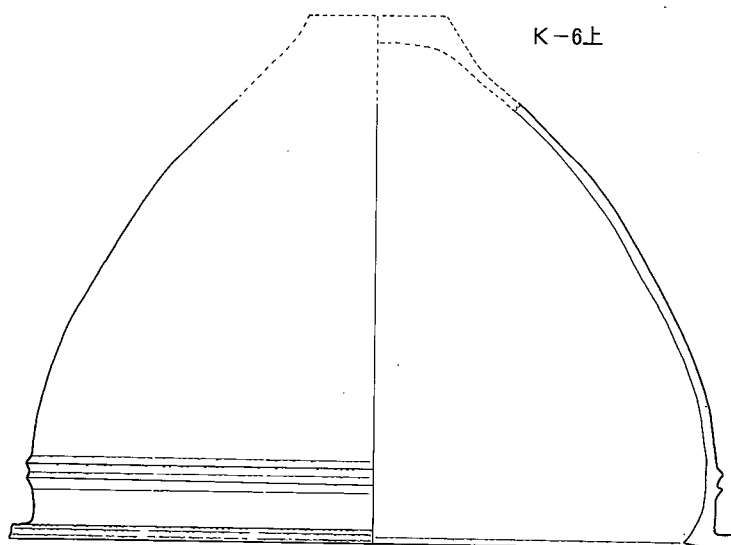
上甕 逆L字状の口縁をもつ鉢形土器。底部欠失。口縁平坦面は水平で、端部は丸く仕上げる。口縁下に三角突帯2条。器壁は厚く、外表面に黒塗痕残る。調整は内外面ナデ。器色は、内外とも赤味がかった黄褐色を呈する。胎土精良。焼成良好。残存器高30.0cm、外口径64.2cm、内口径55.2cmを測る。(Fig.35)



下甕 うちに低く内傾した逆L字状口縁の大型甕である。口縁は分厚く、外端部は丸く仕上げる。径の大きい平底の底部。胴中位につぶれ気味の2条突帯。器高に比して胴部幅が大きく、全体にずんぐりとした形状となる。器壁は全体に厚く均等。調整は、内外面ともナデ、底部内面に指おさえ、底部外面に刷毛目痕が残る。器色は、内外面とも赤味がかった黄褐色。胎土精良で焼成良好。底部外側付近に径30cm程の黒斑あり。胴部外面に黒塗痕。器高79.6cm、外口径64.2cm、内口径54.2cm、胴部最大径65.0cm、底部径は13.2cmを測る。(Fig.35 : PL-6)

6号甕棺墓

上甕 底部を欠く大型の鉢形土器。内傾気味の逆L字状の口縁をもち、口唇部はやや凹む。口縁下につぶれ気味の三角突帯2条。器壁は、胴部付近で10～12mm前後と厚く均一で、つくりはしっかりしている。器面は、内外面ともナデ調整で口縁付近は横ナデ仕上げである。器色は、内外とも赤味を帯びた黄褐色を呈する。胎土は、粗粒を含み、焼成は良好である。残存器高46.8cm、外口径76.4cm、内口径64.5cmを測る。(Fig.36 : PL-6)



下甕 内に低く傾斜した逆L字状の口縁をもつ大型甕。口唇部は平坦に整える。平底の底部から半球状に立ち上った胴部中位につぶれ気味の2条突帯を巡らし、胴上半でややすぼまる。全体に整美なしっかりした造りで、器壁も厚く均一に調整されている。焼成は良好であり、胎土には、砂粒を均一に含む。器面は、内外ナデ調整で、内面の壁面に銅剣の付着痕が残る。器色は、内外面ともやや赤味を帯びた黄褐色を呈する。器表面に黒塗り痕が残る。器高88.4cm、外口径74.0cm、内口径62.2cm、胴部最大径は72.8cm、底部径は12.8cmを測る。(Fig.36 : PL-10)

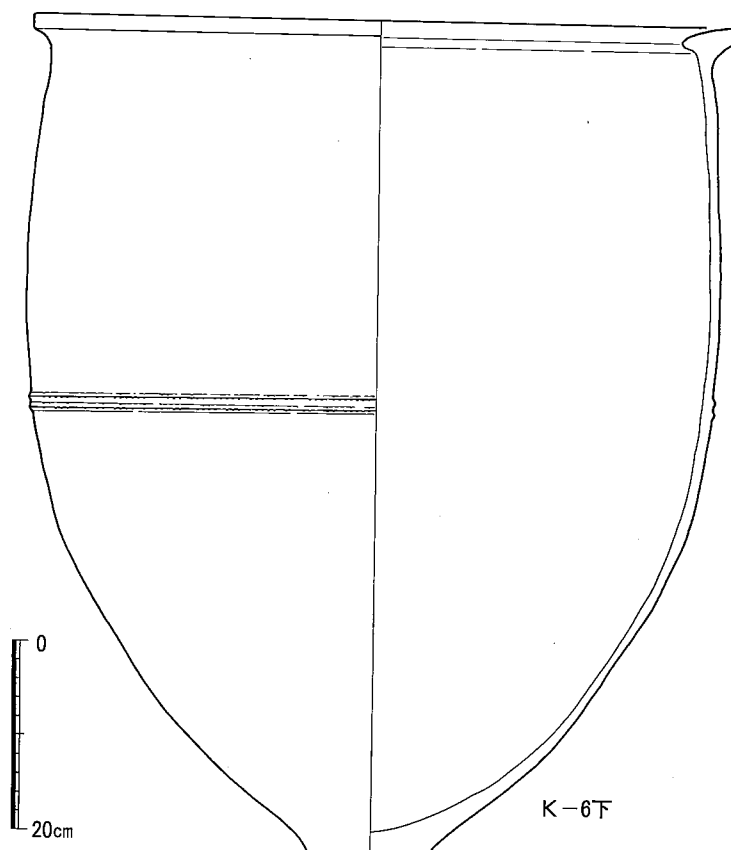


Fig.36 6号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

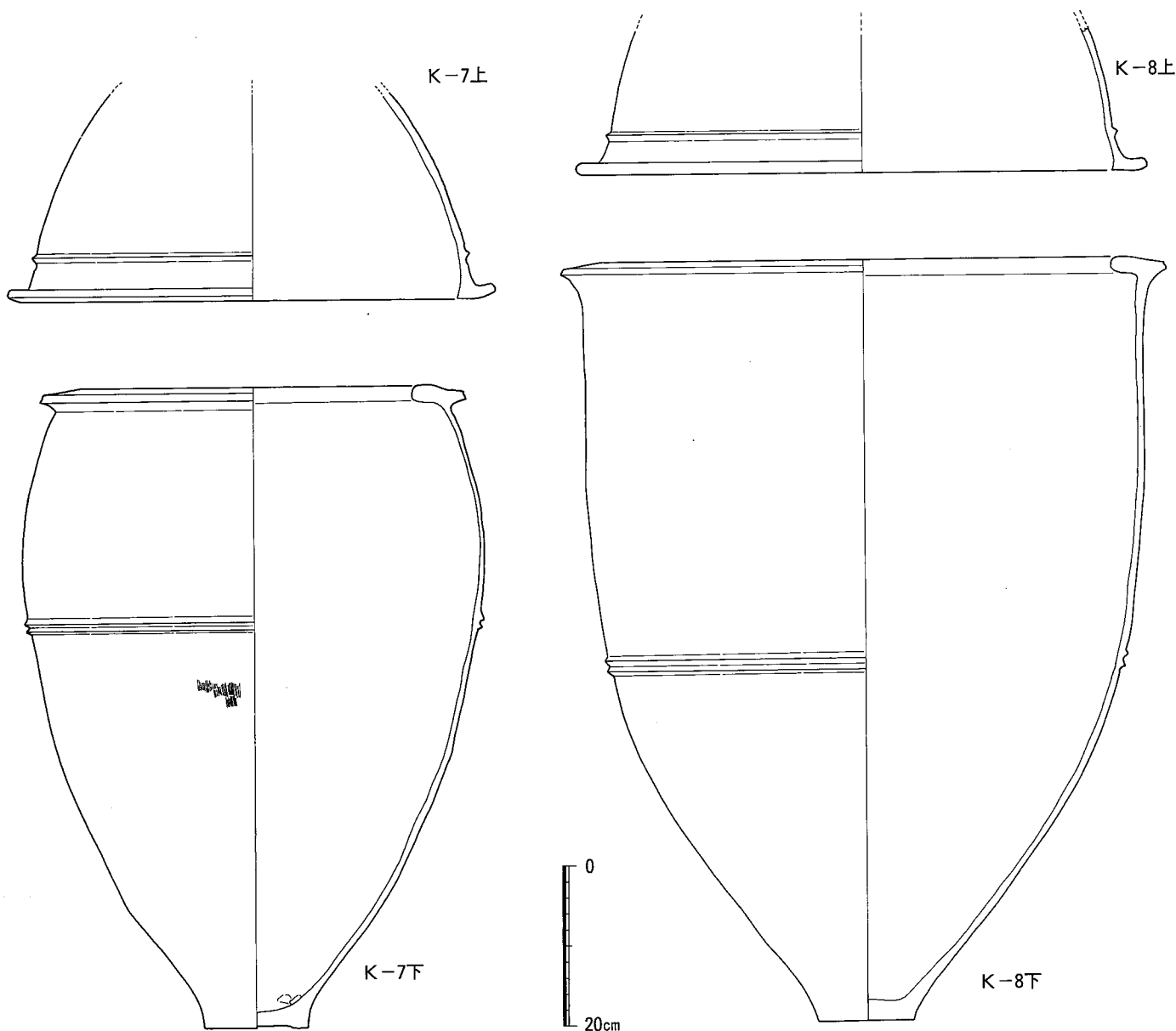


Fig.37 7・8号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

7号甕棺墓

上甕 逆L字状の口縁をもつ鉢形土器。口縁下に貼り付け三角突帯1条。調整は内外ナデ。器色は、内外面黄褐色を呈し、部分的に黒塗り痕が残る。焼成良好。胎土には、粗砂を多く含む。残存器高25.6cm、復元外口径60.2cm、内口径50.8cmを測る。(Fig.37)

下甕 内側に大きく張出した逆L字状口縁の甕。口縁部内側は肥厚し、外端はやや凹む。胴中位よりやや上に貼り付け三角突帯2条。器壁は、胴部で7～9mm、調整は内外ナデ、底部内面に指オサエ。器色は、内外面橙暗褐色を呈する。胎土に粗砂多く含み、焼成良好。器高79.4cm、復元外口径52.4cm、内口径40.0cm、胴部最大径は56.8cm、底部径は13.0cmを測る。(Fig.37: PL-6)

8号甕棺墓

上甕 逆L字状口縁をもつ鉢形土器。胴中位に三角突帯1条。径が外反して開く部分は、下甕と近似。内外面ナデ調整。残存器高18.0cm、復元外口径70.4cm、内口径62.0cmを測る。(Fig.37)

下甕 内側に張り出す逆L字状口縁をもつ大型甕。砲弾形の器形をもち、口縁下は外反する。胴中位に三角貼り付け突帯2条。調整は、内外面ナデ。器色は、内外とも黄褐色。内面に黒塗り痕。胎土には、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高94.5cm、外口径74.6cm、内口径61.2cm、胴部最大径68.8cm、底部径11.8cmを測る。(Fig.37: PL-7)

9号甕棺墓

下甕 底部のみ残存する。器種は大型甕と考えられる。底部はやや上げ底。器壁は内外面ナデ調整、底部外面に指オサエ痕。器色は、内外とも黄褐色。胎土には、砂粒を含み、焼成良好。残存器高13.6cm、底部径12.8cmを測る。(Fig.38)

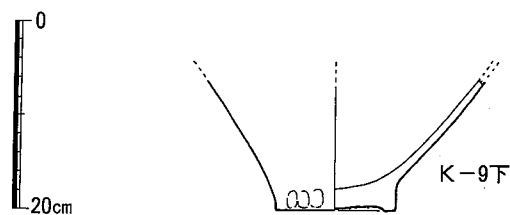
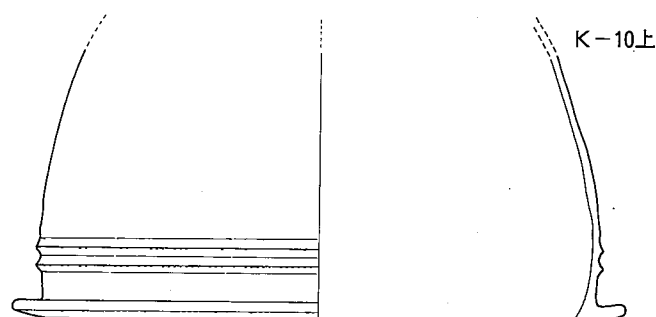


Fig.38 9号甕棺墓下甕実測図 (1/8)

10号甕棺墓

上甕 低く外側にたれた逆L字状の口縁をもつ鉢形土器。下半部を欠く。口縁は、端部を丸くおさめ、下に貼り付けの三角突帯が2条廻る。器壁は、胴部で7～9mm、調整は、内外面ともナデ。器色は、内外とも黄褐色を呈する。胎土には、砂粒を均一に含む。残存器高28.2cm、復元外口径64.2cm、内口径53.6cmを測る。(Fig.39)



下甕 低く外側にたれた逆L字状の口縁をもつ大型甕。底部を欠く。口縁端部を丸くおさめる技法は上甕に共通する。胴中位に三角突帯2条。胴部形状は細身の砲弾形である。調整は、内外面ナデ。器色は、内外とも黄褐色を呈する。胎土には、砂粒を均一に含む。残存器高81.2cm、復元外口径64.1cm、内口径52.0cm、胴部最大径62.8cmを測る。(Fig.39)

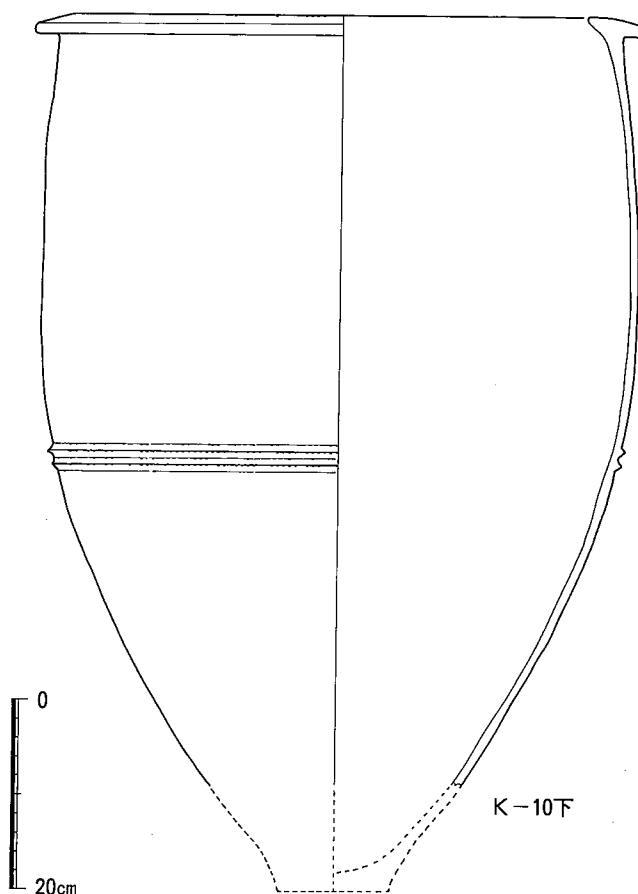
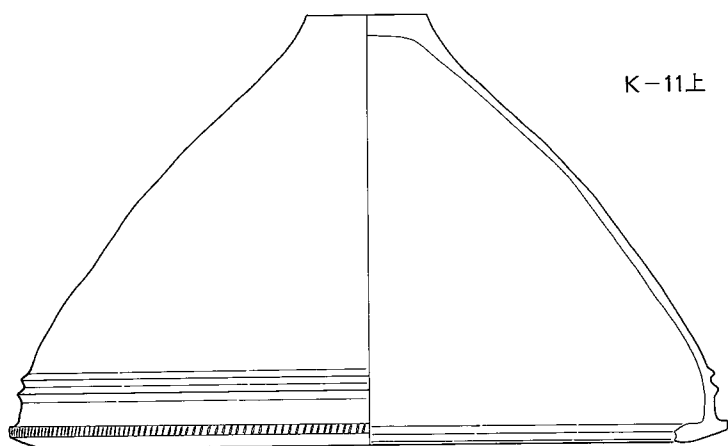


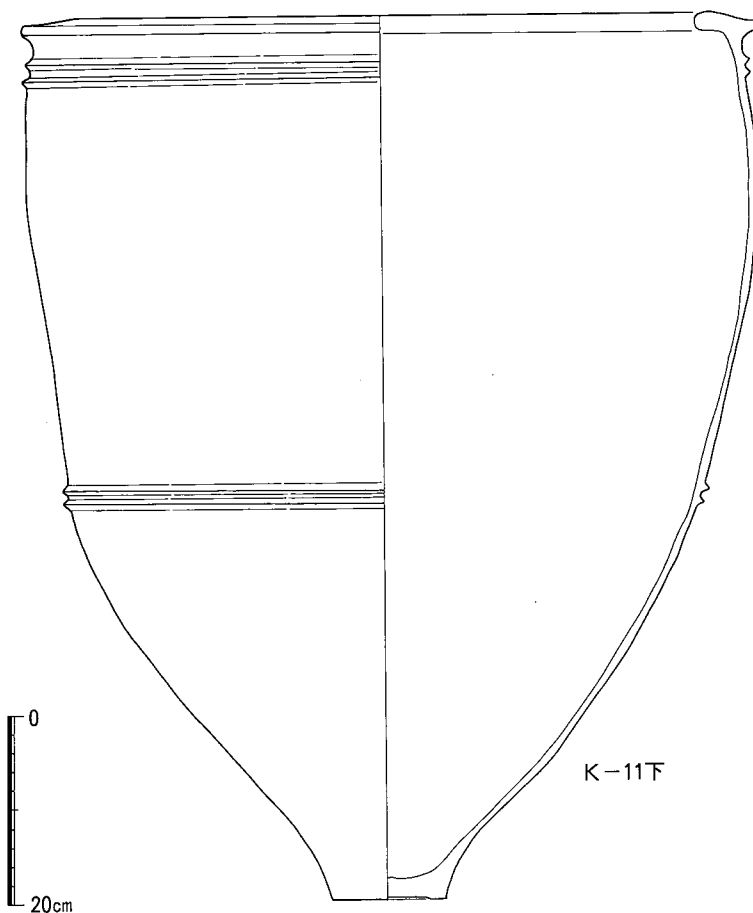
Fig.39 10号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

11号甕棺墓



K-11上

上甕 内側に大きく張り出した逆L字状口縁の鉢形土器。口唇部に刻み目施文。口縁下に三角突帯2条。器壁は、胴部で10～12mmと均一。調整は、内外面ともナデ、器色は、内外とも灰色がかった黄褐色を呈する。胎土は、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高45.4cm、復元外口径75.4cm、内口径64.4cm、底部径は12.8cmを測る。(Fig.40)



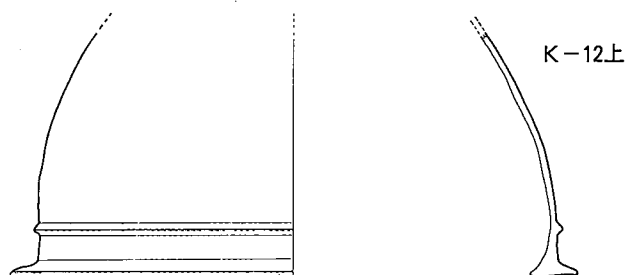
K-11下

下甕 内側に大きく張り出した逆L字状口縁の大型甕。口縁下と胴部中位よりやや下に貼り付け三角突帯2条。胴上半は直立ぎみに開き、口縁下のすばまりも小さい。器壁は、胴部で10～12mm、調整は内外面ともナデ。器色は、内外面とも灰色がかった黄褐色。胎土は、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高93.4cm、外口径77.2cm、内口径64.5cm、胴部最大径は77.0cm、底部径は12.0cmを測る。
(Fig.40 : PL-7)

Fig.40 11号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

12号甕棺墓

上甕 逆L字状の口縁部をもつ鉢形土器。口縁平坦面は水平で、外端部の稜線は明瞭。口縁下に貼り付け三角突帯1条。調整は内外面ナデ。器色は、白色がかった灰黄褐色であるが、これは焼成の度合いによるものか。胎土には、砂粒を均一に含む。残存器高26.0cm、復元外口径60.0cm、内口径50.4cmを測る。(Fig.41)



下甕 低く内側に傾き厚く肥大した逆L字状口縁をもつ大型甕。口唇部がやや凹み、上下同時施文の刻み目がつく。全体に丸味をもった胴部をしており、底部径が大きい。胴中位よりやや上に貼り付け三角突帯2条。調整は、内外面ナデ。底部内面に指オサエ。器色は、内外とも橙黄褐色で、内面に黒塗り痕、外面に黒斑が残る。胎土には粗砂をまばらに含む。焼成良好。器高85.2cm、外口径64.0cm、内口径54.0cm、胴部最大径は65.0cm、底部径は13.6cmを測る。(Fig.41 : PL-7)

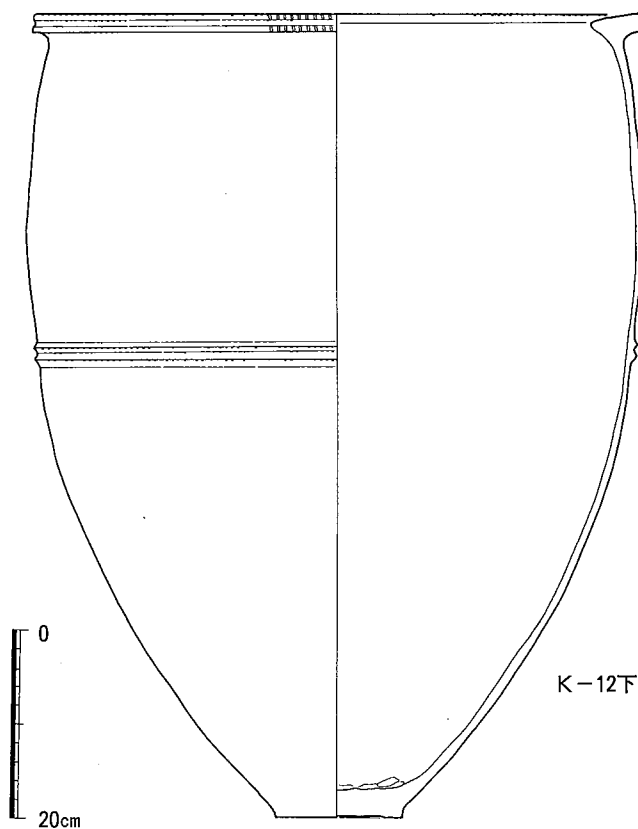


Fig.41 12号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

13号甕棺墓

下甕 胴下半部のみ残存の小型甕。厚く、やや上底ぎみの底部をもつ。調整は内外ナデ。器色は、内外とも黄褐色で、胎土には砂粒を均一に含む。焼成良好。残存器高36.6cm、底部径は10.0cmを測る。(Fig.42 : PL-7)

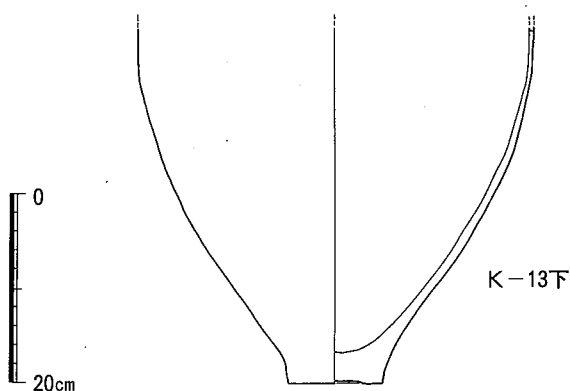
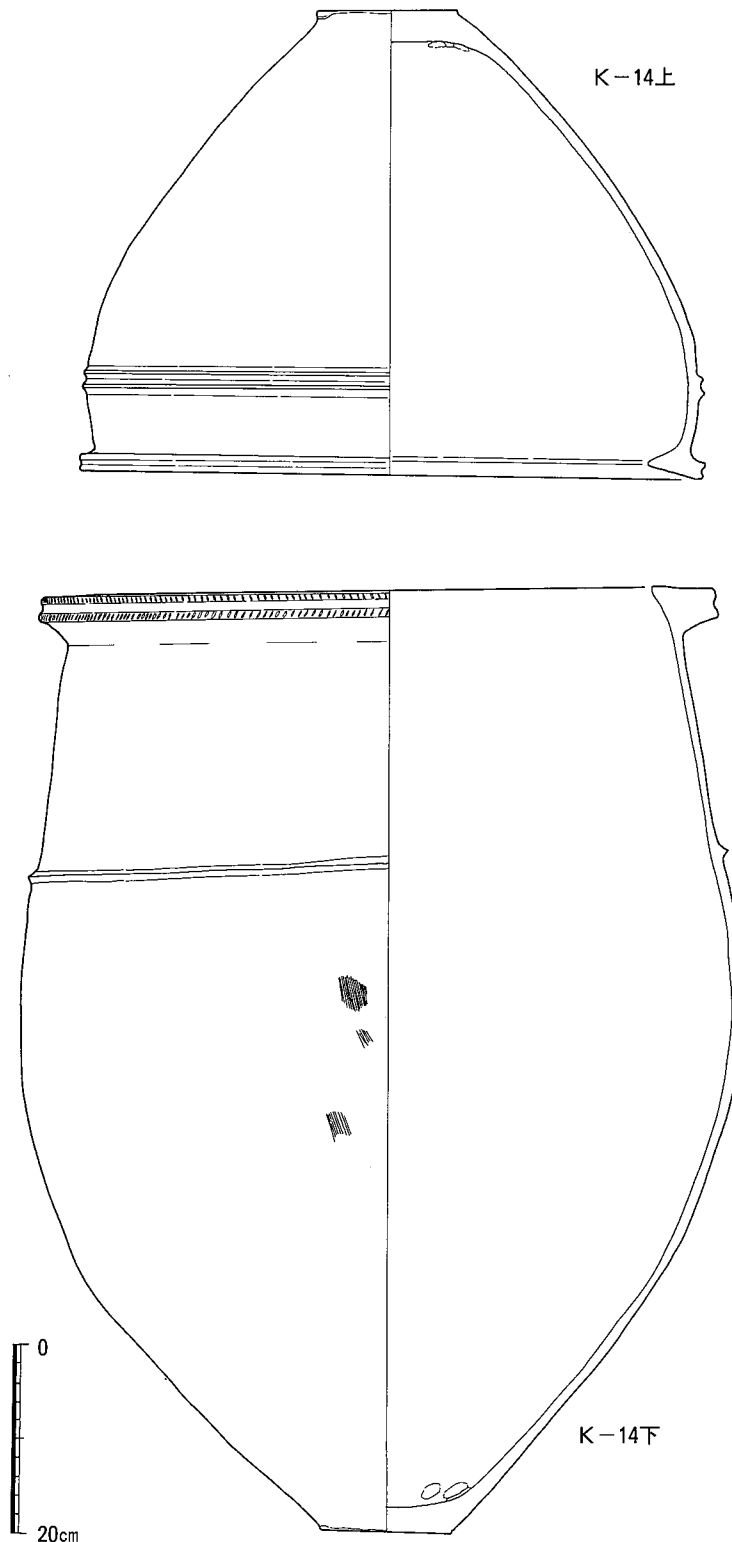


Fig.42 13号甕棺墓下甕実測図 (1/8)

14号甕棺墓



上甕 内に低く傾斜しながら張り出した逆L字状口縁の鉢形土器。口唇部は凹み、稜がつくが、刻目はない。粗雑なつくりの底部から膨らみ気味に立ち上がり、口縁下に貼り付け突帯2条を施す。それより上位は内傾する。器壁は厚く均一で、調整は内外面ナデ、底部内外面には指オサエ痕。器色は、内外とも橙色を帯びた黄褐色。黒塗り痕が部分的に残る。胎土は、粗砂を多く含む。器高48.8cm、外口径65.6cm、内口径54.8cm、底部径は14.8cmを測る。(Fig.43 : PL-7)

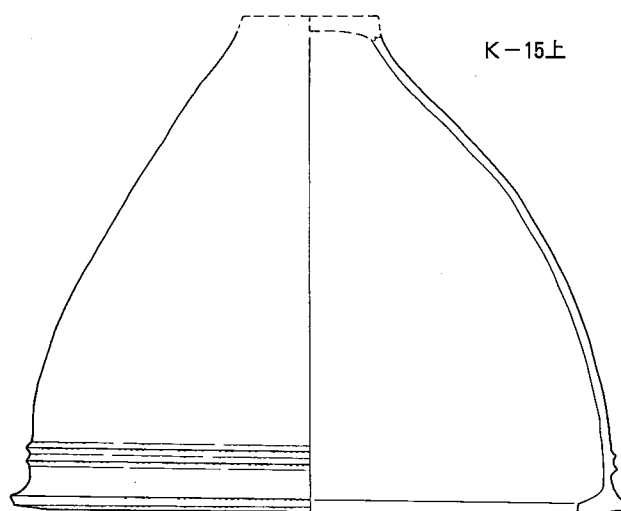
下甕 肥厚した逆L字状口縁をもつ大型甕。口唇部には、上下別々に施文の刻目。下膨れの胴部に貼り付け三角突帯1条が廻り、胴部最大径は胴下半部にくる。器壁は厚く均一に整えられる。器色は、内外面橙色がかった黄褐色を呈し、黒塗り痕が部分的に残る。胎土には、粗砂を多く含む。器高99.6cm、外口径71.6cm、内口径58.0cm、胴部最大径は76.0cm、底部径は13.4cmを測り、出土甕棺中で最大の法量をもつ。(Fig.43 : PL-8)

Fig.43 14号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

15号甕棺墓

上甕 内側に張り出す逆L字状口縁をもつ鉢形土器。底部を欠失する。口縁は、低く外側に傾斜し、口縁下に貼り付け三角突帯2条。器壁は、胴部で10mm前後。器面は、内外面ナデ調整。器色は、内外面黄褐色を呈し、部分的に黒塗り痕が残る。胎土は、砂粒が均一に混ざる。焼成良好。残存器高50.8cm、外口径65.0cm、内口径54.0cmを測り、下甕に比して法量が多い。

(Fig.15 : PL-8)



下甕 内側に大きく張り出し、外に低く傾斜した逆L字状口縁の大型甕。口縁下のすぼまりが大きく、胴部最大径は上位にある。胴中位に貼り付け三角突帯を2条。器壁は、胴部で10mm前後。調整は、内外ナデ。器色は、内外黄褐色を呈する。胎土は、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高78.6cm、外口径60.6cm、内口径48.8cm、胴部最大径は62.8cm、底部径は11.0cmを測る。

(Fig.44 : PL-8)

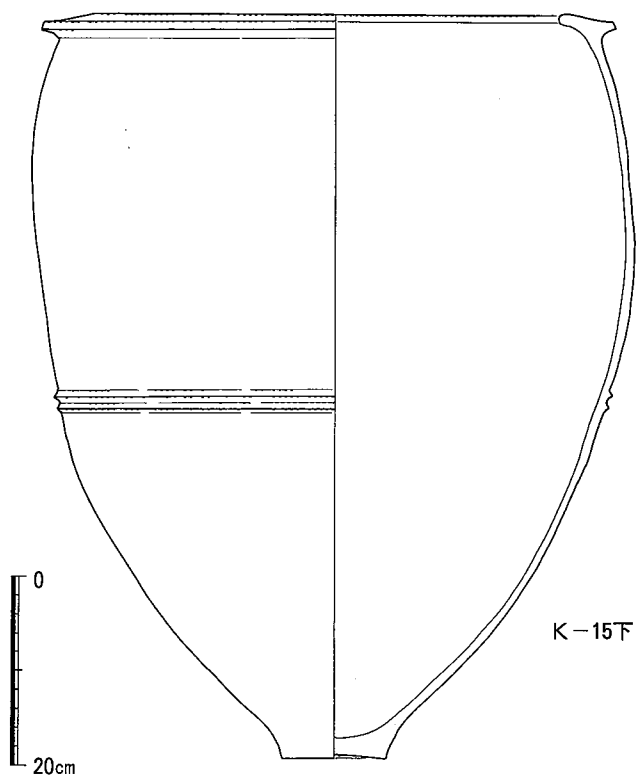
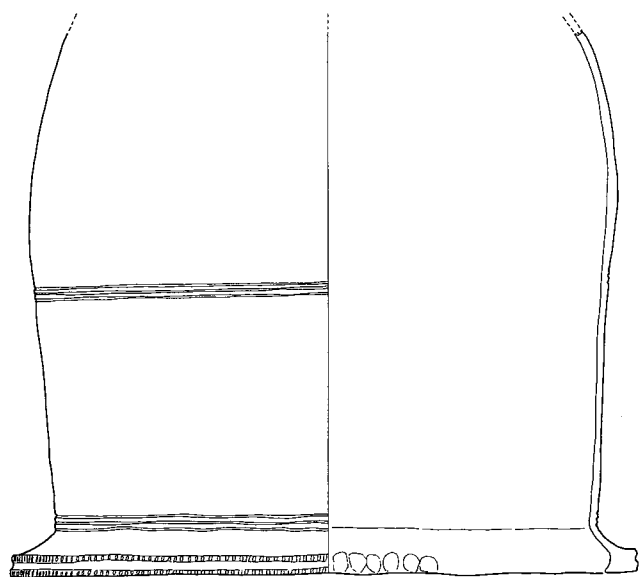


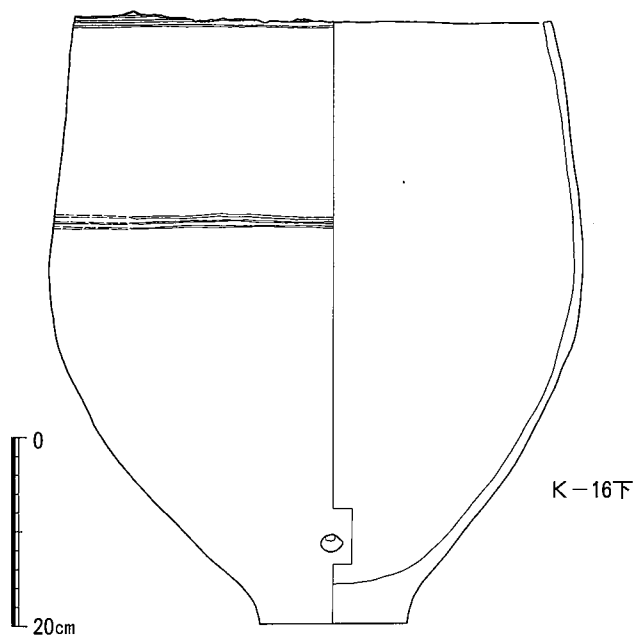
Fig.44 15号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

K-16上



16号甕棺墓

上甕 内に低く傾斜し上端に粘土帯を貼付した口縁をもつ甕。底部を欠く。口唇部の上下別々施文の刻目。口縁内側に指オサエ痕が残る。胴部と頸部上端に三本単位の横沈線を巡らす。器形は、胴部最大径が胴下位にあり、壺の名残りを残す。磨耗著しく器面調整は不明。器色は、内外とも白味を帯びた灰黄褐色を呈し、胎土には、大粒の粗砂を多く含む。残存器高57.2cm、外口径65.2cm、内口径58.0cm、胴部最大径は61.2cmを測る。(Fig.45 : PL-8)



下甕 口縁部を打ち欠いた甕。器形はいまだ壺の形状を呈しており、胴部最大径は胴下位にくる。頸部は内傾して立ち上り、胴中位よりやや上と頸部上端に三本単位の横沈線が廻る。底部付近に穿孔あり。器壁は厚く、調整は磨耗が著しく不明。器色は、内外とも白味がかった灰黄褐色を呈し、胎土は、大粒の粗砂を多く含む。現存器高63.4cm、胴部最大径は55.6cm、底部径は15.6cm、底部厚4.4cmを測る。(Fig.45 : PL-8)

Fig.45 16号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

17号甕棺墓

甕 強く外側に突出した逆L字形状口縁の甕。口縁部から頸部にかけて残存。口縁部は内側を欠くが平坦に整え、口唇部はやや凹む。口縁下にM字状の貼り付け突帯1条。器形は丸味を帯びた形状。内外面ともナデ調整。器色は、内外面黄褐色。胎土には、砂粒を均一に含み、焼成は良好。復元外口径44.2cm、内口径35.2cmを測る。(Fig.46)

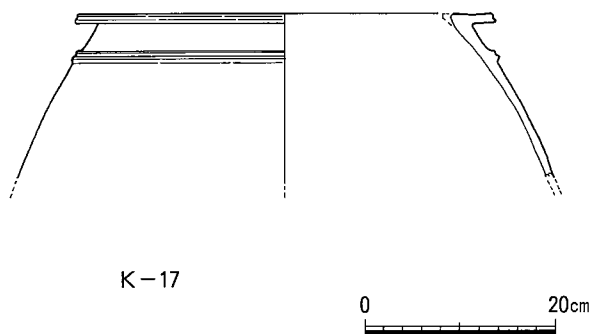
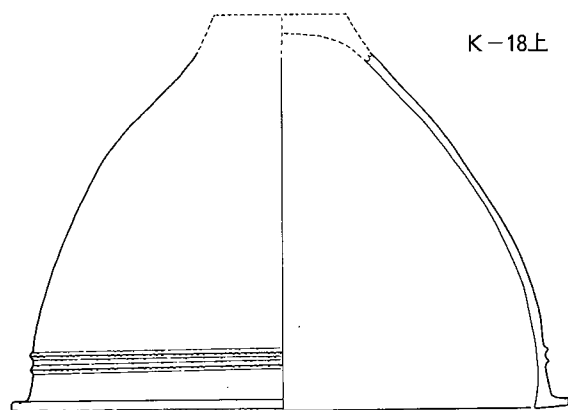


Fig.46 17号甕棺墓甕実測図

18号甕棺墓

上甕 外端面を丸くおさめた逆L字形の口縁をもつ鉢形土器。底部を欠く。口縁平坦面は、外にやや傾く。口縁下に貼り付け三角突帯2条。胴部は丸みを帯びる。器壁は、胴中位で10mm前後。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外面ともやや橙色がかった黄褐色を呈する。胎土には、砂粒を多く含み、焼成良好。残存器高37.6cm、復元外口径58.4cm、内口径51.4cmを測る。

(Fig.47 : PL-8)



下甕 外に発達ぎみの逆L字形状口縁の大型甕。口縁平坦面は水平で、端部を内側は丸く、外側は平坦に整える。小さくやや上げ底の底部。胴中位よりやや下につぶれ気味の2条突帯。上半部はややすぼまる。器壁は、大型棺にして非常に薄手である。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外ともやや橙色がかった黄褐色を呈し、部分的に黒塗り痕が残る。胎土には、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高82.4cm、外口径63.8cm、内口径54.8cm、胴部最大径66.0cm、底部径10.6cmを測る。

(Fig.47 : PL-9)

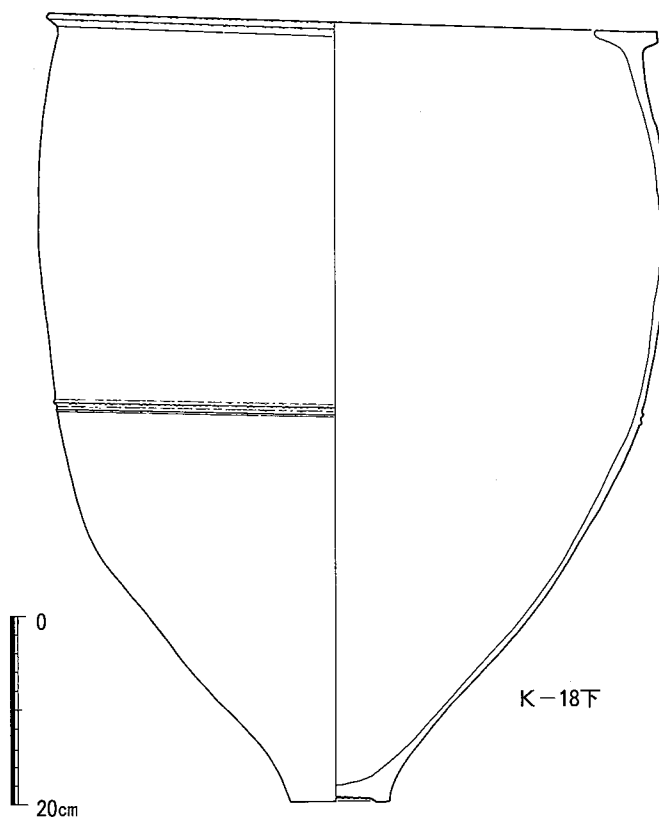
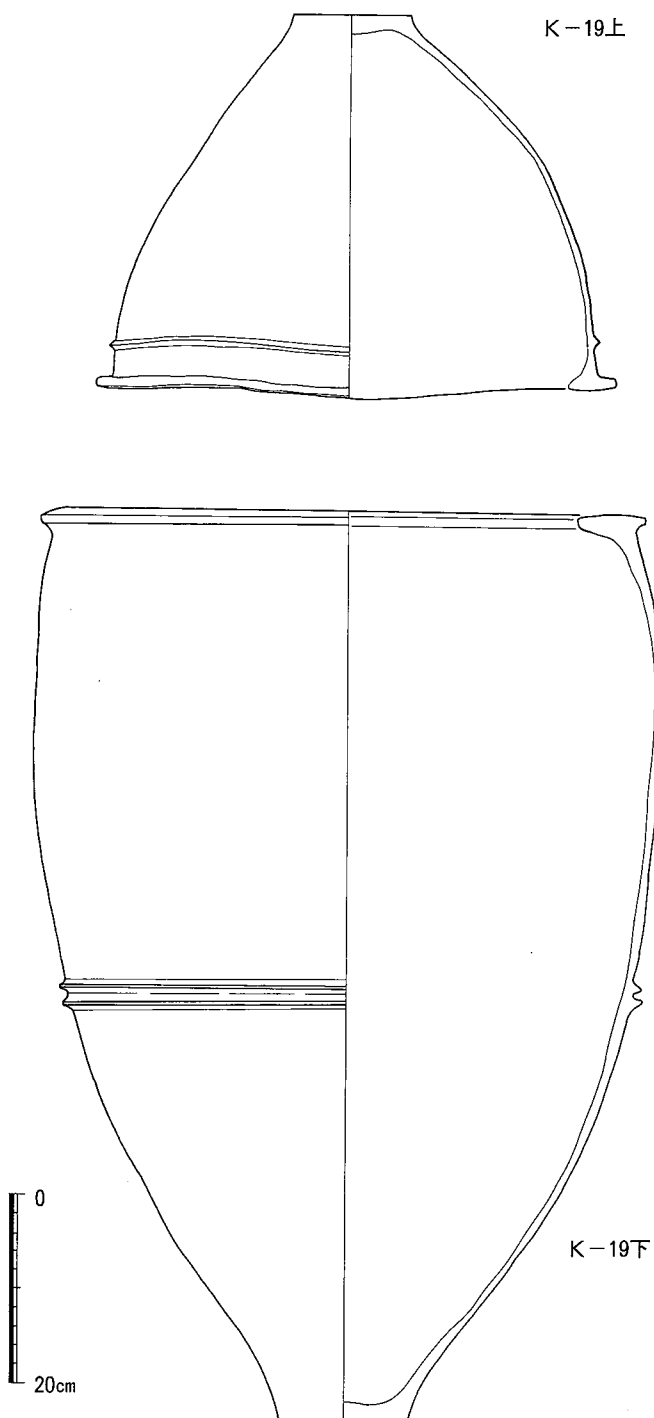


Fig.47 18号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)



19号甕棺墓

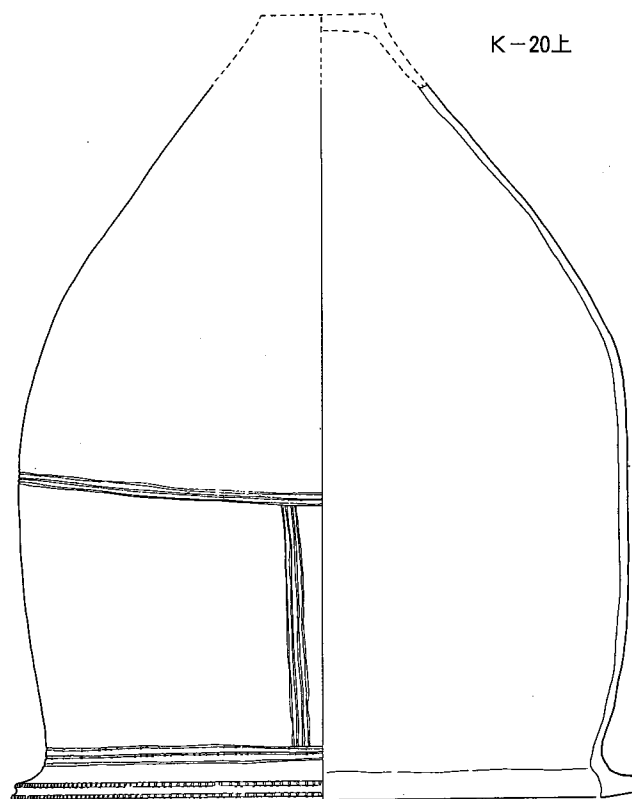
上甕 外端部を丸くおさめた逆L字状口縁の鉢形土器。口縁下に貼り付け三角突帯1条を巡らす。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外とも黄褐色を呈し、胎土には、砂粒を均一に含む。焼成は良好。器高40.4cm、外口径54.6cm、内口径46.8cm、底部径12.6cmを測る。(Fig.48 : PL-9)

下甕 内側に大きく張り出す逆L字状口縁の大型甕。細身の砲弾形の器形を呈し、口縁下でややすぼまる。胴中位よりやや下に貼り付け三角突帯2条。調整は、内外面ともナデ。器色は、やや灰色を帯びた黄褐色を呈し、部分的に黒塗り痕も残る。胎土には、砂粒を均一に含む。焼成は良好。器高96.0cm、外口径63.4cm、内口径49.4cm、胴部最大径66.0cm、底部径13.6cmを測る。(Fig.48 : PL-9)

Fig.48 19号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

20号甕棺墓

上甕 粘土帯貼り付けの肥厚した口縁をもつ大型甕。口唇部には、上下同時施文の整然とした刻目を施す。胴部はやや丸味を帯びて立ち上がり、頸部で緩く外反する。口縁下と胴中位に3本単位の横沈線が巡り、さらにこの間を繋ぐ4本単位の縦沈線を5箇所描き区画する。調整は、内外面ともナデ。器色は、灰黄褐色を呈し、胎土には、粗砂を多く含む。焼成良好。残存器高75.8cm、外口径65.8cm、内口径58.0cm、胴部最大径63.6cmを測る。(Fig.49 : PL-9)



下甕 口縁打ち欠きの大型甕。丸味をおびた器形で、頸部と胴中位に三本単位の横沈線が巡り、その間に4本単位の縦沈線を5箇所描き区画する。調整は、内外面ともナデ。外面底部付近に刷毛目痕残す。器色は、外面橙黄褐色、内面黄褐色を呈する。胴上位に対面する二つの黒斑がある。胎土には、粗砂を多く含み、焼成は良好。残存器高73.0cm、胴部最大径60.8cm、底部径12.4cmを測る。

(Fig.49)

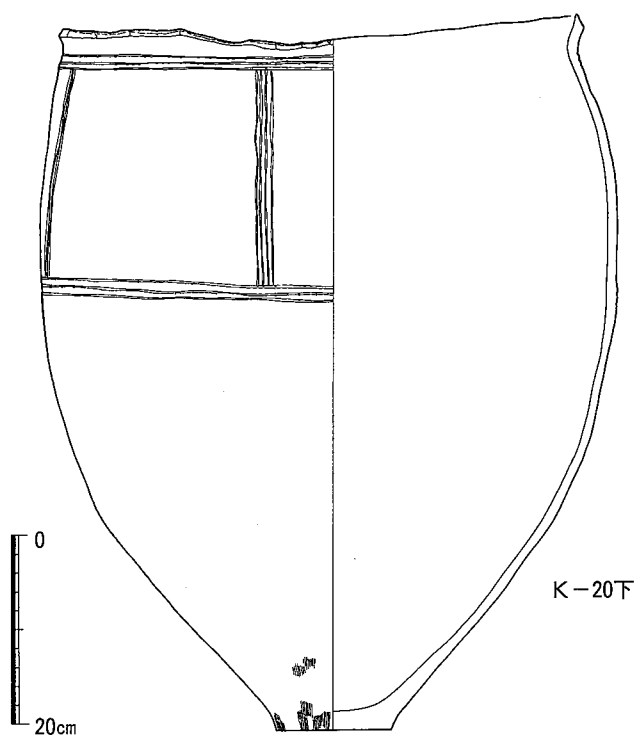
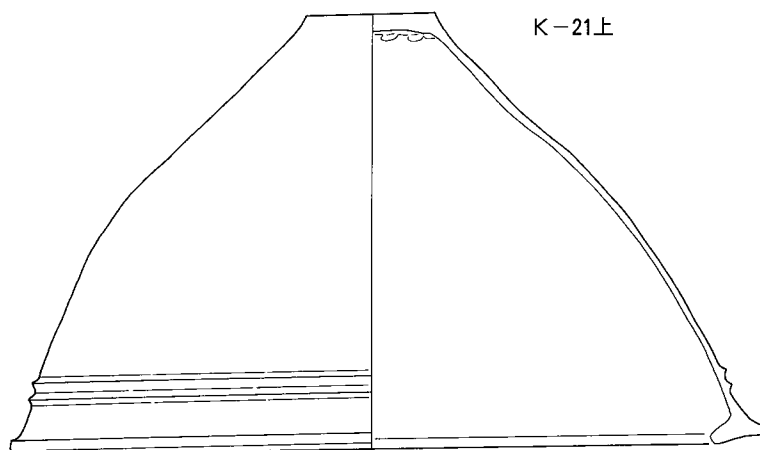
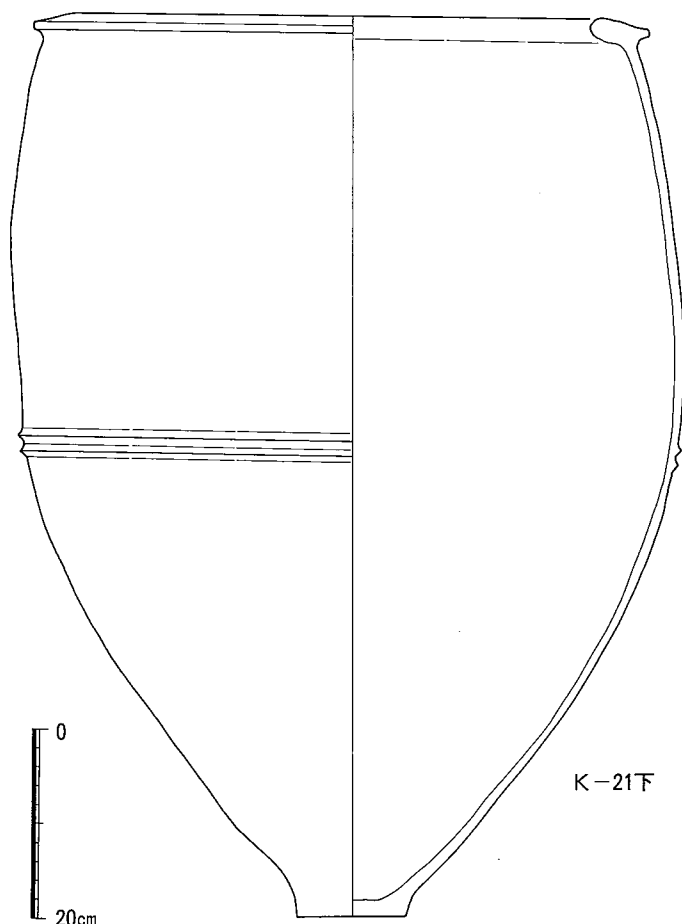


Fig.49 20号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

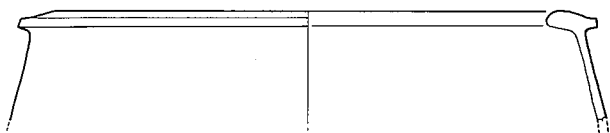


K-21上



K-21下

Fig.50 21号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)



K-22下



Fig.51 22号甕棺墓下甕実測図 (1/8)

21号甕棺墓

上甕 外に低くたれたT字状口縁をもつ鉢形土器。器高に反して口径が大きい。口縁下に貼り付け三角突帯2条。調整は、内外面ナデ。器色は、黄褐色を呈し、胎土には、砂粒を均一に含む。焼成良好。器高45.8cm、外口径79.0cm、内口径69.0cm、底部径13.4cmを測る。(Fig.50 : PL-9)

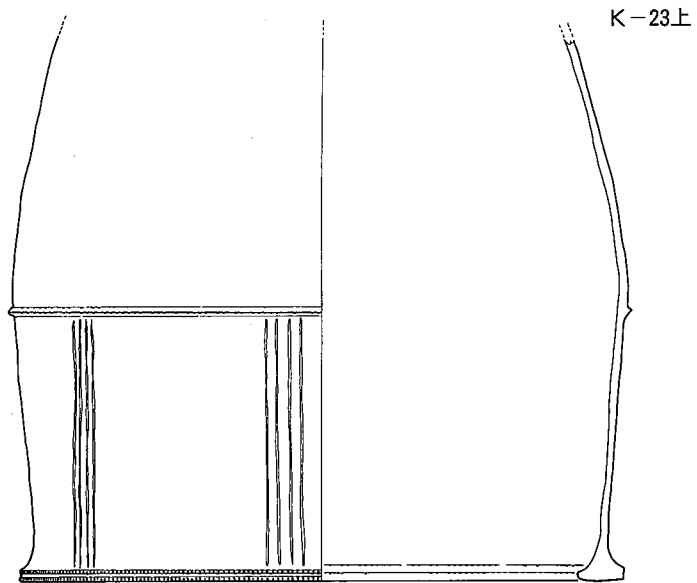
下甕 内に大きく張り出した逆L字状口縁をもつ大型甕。口縁内側は厚く肥大し、端部を丸く仕上げる。器形は胴上位でややすぼまる砲弾形。胴中位に貼り付け三角突帯2条。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外面黄褐色を呈する。胎土には、砂粒を均一に含み、焼成良好。器高95.2cm、外口径64.6cm、内口径54.6cm、胴部最大径70.2cm、底部径11.6cmを測る。(Fig.50 : PL-9)

22号甕棺墓

下甕 内に大きく張り出した逆L字状口縁をもつ大型甕。口縁部のみ残存。口縁内側は丸く仕上げる。調整は、内外面ともナデ。器色は、内外黄褐色を呈し、胎土は、砂粒を均一に含む。焼成良好。復元外口径61.0cm、内口径50.0cmを測る。(Fig.51)

23号甕棺墓

上甕 内外の張り出しの少ないT字状の口縁をもつ大型甕である。下半部欠失。口唇部に上下同時施文の刻目あり。間隔のひろい4本単位の縦沈線により胴部を8～9つに区画する。胴上位に貼り付け三角突帯1条。器壁やや厚く、調整は、内外面ともナデ。器色は、内外橙黄褐色で、胎土は、粗砂を疎らに多く含む。器表内面に黒塗り痕があり、焼成は良好。残存器高57.4cm、外口径63.6cm、内口径54.4cm、胴部最大径65.8cmを測る。(Fig.52)



下甕 内傾する逆L字状の口縁をもつ大型甕。不明瞭ながら口唇部に刻目が僅かに残る。底部は、胴下半で屈曲し丸味を帯びて立ち上がり、胴中位で直立、口縁下付近で内傾する。突帯がないなど独特な形態で、器壁が棺の法量に対して非常に薄く、無理やりに大きく仕立てた感がある。調整は、内外面ともナデ。底部外面に刷毛目痕。器色は、内外面やや暗い黄褐色を呈し、内外面に黒塗り痕が残る。胎土には、粗砂を多く含む。焼成は良好。器高92.8cm、外口径66.1cm、内口径56.4cm、胴部最大径72.8cm、底部径13.3cmを測る。(Fig.52 : PL-10)

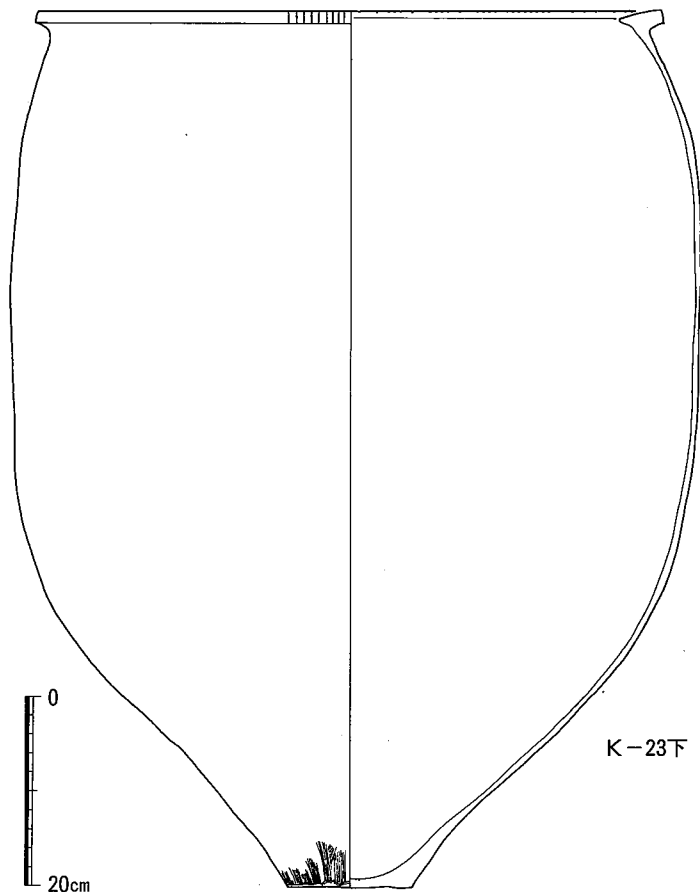


Fig.52 23号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

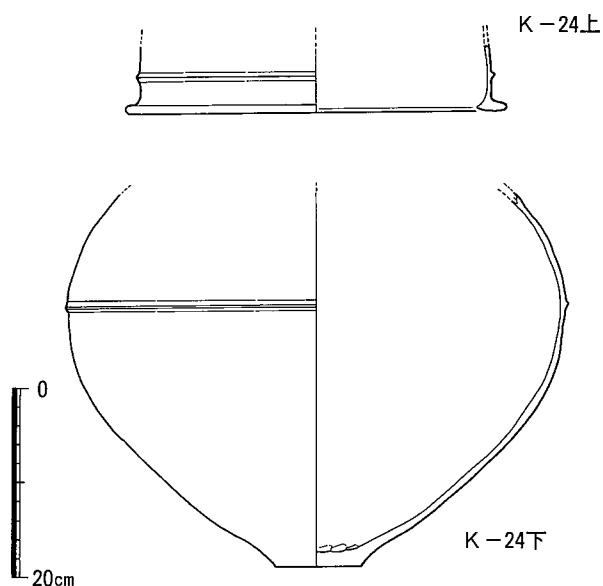


Fig.53 24号甕棺墓上・下甕実測図 (1/8)

24号甕棺墓

上甕 逆L字状の口縁をもつ小型甕である。口縁下に貼り付け三角突帯1条。器面は内外ナデ調整。器色は、内外橙黄褐色を呈し、胎土精良。残高器高7.0cm、復元外口径40.0cm、内口径34.0cmを測る。(Fig.53)

下甕 口縁から頸部にかけて打欠いた小型壺。胴部中位に丸い突帯が1条廻る。調整は内外ナデ。底部内面に指オサエ痕。器色は、内面全面は炭素吸着による暗黒褐色、外面は黄褐色。胎土は、砂粒を均一に含み、焼成良好。残存器高39.4cm、胴部最大径52.6cm、底部径9.0cmを測る。(Fig.53)

(b) 土壌出土の土器

1号土壌出土土器 (Fig.54)

1号土壌からは総数にして約80点の土器片が出土している。器種は、甕・壺などの日常土器であり、弥生時代中期前半期のものである。廃棄されたかのようにボロボロで図示できないものが大半であるが、ここでは、比較的残存の良好な7点について報告する。1・2は、広口壺の口縁部である。いずれも、内側の張り出しがあり外端部を丸くおさめる。復元口径それぞれ27.6cm、20.4cmを測る。3は、やや古相を残す甕の口縁部である。如意形に開き、口唇部に刻目、頸部に横沈線を施す。復元口径26.4cm。4は、壺の底部である。浅い平底を呈し底径10.0cmを測る。5～7は、甕の底部片である。5・6は、上げ底でそれぞれ底径6.8cm・6.2cm。7は平底で底径6.2cmを測る。

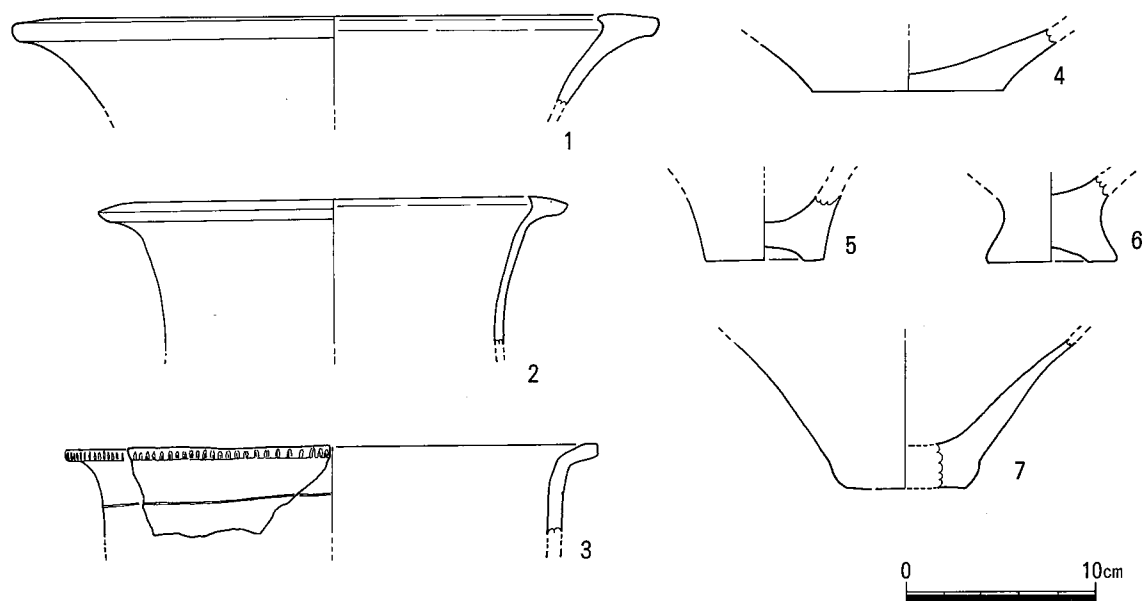


Fig.54 1号土壌出土土器実測図 (1/4)

No.	器種	法量 (cm)	胎土・色調・焼成	特 徴	No.	器種	法量 (cm)	胎土・色調・焼成	特 徴
K-1 上壺	鉢形土器	残存器高 21.4 復元外口径 52.0 復元内口径 43.6 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 黒塗り痕	K-13 下壺	小型壺	残存器高 36.6 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 10.0 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-1 下壺	大型壺	残存器高 85.6 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 67.0 底部径 11.2	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 打ち欠き 器形 倒卵形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 —	K-14 上壺	鉢形土器	器高 48.8 外口径 65.6 内口径 54.8 胴部最大径 14.8 底部径 —	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 肥厚した逆し字状 器形 下膨形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕
K-2 上壺	鉢形土器	残存器高 22.8 外口径 — 内口径 45.6 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 黒塗り痕	K-14 下壺	大型壺	器高 99.6 外口径 71.6 内口径 58.0 胴部最大径 76.0 底部径 13.4	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 肥厚した逆し字状 器形 下膨形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕
K-2 下壺	大型壺	残存器高 82.6 外口径 63.0 内口径 53.6 胴部最大径 64.4 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 肥厚した逆し字状 器形 砲弾形 調整 内外ナデ その他 —	K-15 上壺	鉢形土器	残存器高 50.8 外口径 65.0 内口径 54.0 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 黒塗り痕
K-3 下壺	大型壺	残存器高 36.4 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 18.0 復元底部径 —	胎土 粗砂混 色調 (内) 暗黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 — 器形 内外ナデ・刷毛目痕 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-15 下壺	大型壺	器高 78.6 外口径 60.6 内口径 48.8 胴部最大径 62.8 底部径 11.0	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-4 下壺	大型壺	残存器高 75.0 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 13.0 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 — 器形 砲弾形 調整 内外ナデ その他 —	K-16 上壺	打欠壺	残存器高 57.2 外口径 65.2 内口径 58.0 胴部最大径 61.2 底部径 —	胎土 粗砂混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 粘土帯貼付 器形 壺形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 胴・頸部に沈線あり
K-5 上壺	鉢形土器	残存器高 30.0 外口径 64.2 内口径 55.2 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 黒塗り痕	K-16 下壺	壺	残存器高 63.4 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 55.6 底部径 15.6	胎土 粗砂混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 打ち欠き 器形 内外ナデ 調整 内外ナデ・指おさえ その他 胴・頸部に沈線あり 胴部に穿孔
K-5 下壺	大型壺	器高 79.6 外口径 64.2 内口径 54.2 胴部最大径 65.0 底部径 13.2	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 すんぐりとした砲弾形 器形 内外ナデ・刷毛目痕 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕	K-17 壺	壺	器高 17.2 外口径 44.2 復元内口径 35.2 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-6 上壺	鉢形土器	残存器高 46.8 外口径 76.4 内口径 64.5 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-18 上壺	鉢形土器	残存器高 37.6 復元外口径 58.4 復元内口径 51.4 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-6 下壺	大型壺	器高 88.4 外口径 74.0 内口径 62.2 胴部最大径 72.8 底部径 12.8	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 厚い逆し字状 すんぐりとした砲弾形 器形 内外ナデ・刷毛目痕 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕	K-18 下壺	大型壺	器高 82.4 外口径 63.3 内口径 54.8 胴部最大径 66.0 底部径 10.6	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 黒塗り痕
K-7 上壺	鉢形土器	残存器高 25.6 外口径 60.2 内口径 50.8 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-19 上壺	鉢形土器	器高 40.4 外口径 54.6 内口径 46.8 胴部最大径 — 底部径 12.6	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-7 下壺	壺	器高 79.4 復元外口径 52.4 復元内口径 40.0 胴部最大径 56.8 底部径 13.0	胎土 粗砂混 色調 (内) 暗黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 すばまった砲弾形 器形 内外ナデ・指おさえ 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕	K-19 下壺	大型壺	器高 96.0 外口径 63.4 内口径 49.4 胴部最大径 66.0 底部径 13.6	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 砲弾形 調整 内外ナデ その他 黒塗り痕
K-8 上壺	鉢形土器	残存器高 18.0 復元外口径 70.4 復元内口径 62.0 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-20 上壺	大型壺	残存器高 75.8 外口径 65.8 内口径 58.0 胴部最大径 63.6 底部径 —	胎土 粗砂混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 粘土帯貼付 器形 倒卵形 調整 内外ナデ その他 口縁部に刻目 体部に沈線
K-8 下壺	大型壺	器高 94.5 外口径 74.6 内口径 61.2 胴部最大径 68.8 底部径 11.8	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 砲弾形 器形 内外ナデ 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕	K-20 下壺	打欠壺	残存器高 73.0 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 60.8 底部径 12.4	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 打ち欠き 器形 倒卵形 調整 内外ナデ・刷毛目痕 その他 体部に沈線
K-9 下壺	壺	残存器高 13.6 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 12.8 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 — 器形 内外ナデ・指おさえ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-21 上壺	鉢形土器	器高 45.8 外口径 79.0 内口径 69.0 胴部最大径 — 底部径 13.4	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 T字状 器形 内外ナデ・指おさえ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-10 上壺	鉢形土器	残存器高 28.2 復元外口径 64.2 復元内口径 53.6 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-21 下壺	大型壺	器高 95.2 外口径 64.6 内口径 54.6 胴部最大径 70.2 底部径 11.6	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 すばまった砲弾形 調整 内外ナデ その他 —
K-10 下壺	大型壺	残存器高 81.2 復元外口径 64.1 復元内口径 52.0 胴部最大径 62.8 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 砲弾形 器形 内外ナデ 調整 内外ナデ その他 —	K-22 下壺	大型壺	器高 — 復元外口径 61.0 復元内口径 50.0 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-11 上壺	鉢形土器	器高 45.4 復元外口径 75.4 復元内口径 64.4 胴部最大径 12.8 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-23 上壺	大型壺	残存器高 57.4 外口径 63.6 内口径 54.4 胴部最大径 65.8 底部径 —	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 T字状 器形 砲弾形 調整 内外ナデ その他 胴部沈線あり 口縁部に刻目
K-11 下壺	大型壺	器高 93.4 外口径 77.2 内口径 64.5 胴部最大径 77.0 底部径 12.0	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 砲弾形 器形 内外ナデ 調整 内外ナデ その他 —	K-23 下壺	大型壺	器高 92.8 外口径 66.1 内口径 56.4 胴部最大径 72.8 底部径 13.3	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 すばまった砲弾形 調整 内外ナデ・刷毛目痕 その他 胴部突帯なし 口縁部に刻目
K-12 上壺	鉢形土器	残存器高 26.0 復元外口径 60.0 復元内口径 50.4 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 灰黄褐色 焼成 (外) 不良?	口縁部 逆し字状 — 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —	K-24 上壺	小型壺	残存器高 7.0 復元外口径 40.0 復元内口径 34.0 胴部最大径 — 底部径 —	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 逆し字状 器形 内外ナデ 調整 口縁部に刻目 その他 —
K-12 下壺	大型壺	器高 85.2 外口径 64.0 内口径 54.0 胴部最大径 65.0 底部径 13.6	胎土 粗砂混 色調 (内) 黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 肥厚した逆し字状 器形 すんぐりとした砲弾形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 黒塗り痕	K-24 下壺	打欠壺	残存器高 39.4 外口径 — 内口径 — 胴部最大径 52.6 底部径 9.0	胎土 均一砂粒混 色調 (内) 暗黄褐色 焼成 (外) 良好	口縁部 打ち欠き 器形 卵形 調整 内外ナデ・指おさえ その他 —

Tab.4 久米遺跡出土甕棺一覧表

(2)青銅器

青銅器については、甕棺墓の副葬品として出土した細形銅剣1点（6号墓）と細形銅戈1点（23号墓）、表土剥ぎの際に発見された銅鏡片1点、の計3点がある。

細形銅剣（Fig.56：PL-11）

6号甕棺墓棺内出土。鎬が刳方までしか伸びない類のもので、鋒先端や刃部を細かく欠く。現存長31.9cm、うち茎部長2.2cm、剣身部長29.7cmを測る。刳方下端、突出部はそれぞれ関から6.9cm、10.1cmの位置にある。脊は元部で幅1.3cmを測り、厚さも元部では、1.2cmとあつくしっかりしたつくりである。身幅は、関部で3.1cm、刳方下端で4.1cm、突出部で4.0cm（復元）を測る。剣身部の研ぎだしはほぼ左右対称に直線的に調整され節帯も明確である。関は明瞭に直線をなさず、斜め方向に茎へ移行する。茎の断面はほぼ円形である。色調は、全体に淡い緑青色を呈する。茎には着柄の為の径1mm程度の細い繊維が巻き付けられた痕跡がみとめられる。甕棺と接地していた先端部と茎部に黒色の付着有機物が残り、鞘などで包装されていたと推定される。重量286.5gを測る。

細形銅戈（Fig.56：PL-11）

23号甕棺墓棺内出土。内が小さい極めて薄手の偏平脆弱な類で、銹化による腐食が著しく関部の一部と先端部を欠く。現存長20.3cm、復元長22.0cmを測る。厚さは、最も厚い関部で0.4cmしかない。内は鍍化により表面が剥けているが、現存では長さ1.2cm、幅1.2cmの方形で厚さ0.2cmを測り、関に平行して脊の中軸から100°振れる。身は関から緩やかに内湾しながらのび、先端部は膨らまずに鋒となる。先端部の研ぎだしが左右不対称で稜線が斜めにはしる。脊には鎬がなく、断面は薄い楕円形を呈する。脊と樋の境界線の段は丸味がつよい。樋の基部に突線による上下の区画がみとめられ、区画内に着柄の為の孔があく。全面に左右別々の斜め方向の研磨が施され、色調は暗い緑青色で素材は良質である。現重量76.8gを測る。

銅鏡片（Fig.55：PL-11）

表土剥ぎ取りの際、遺跡の東南端部、20号甕棺墓直上の表土中から発見されたもので、外区周縁と内区の一部、原鏡の約6分の1が残る。復元径10.6cm。厚さは、縁の部分で0.4cm、内区の最も薄いところで0.2cmを測る。外縁のふちが約50度で斜めに立ち上がる。文様は、銹化による磨耗でほとんど不明であるが、外区に1条の圈線と鋸歯文帯、内区外縁に圈線と櫛葉文、その内側に乳と考えられる円形の膨らみとそれを囲む乳座、最も鏡心に近いところに紐座と考えられる円い圈線がおぼろげにみとめられる。これらの形態から獣帯鏡の類であると判断され、遺物の性格上、20号墓との直接的な関連はないものとみられる。現重量40.5gを測る。

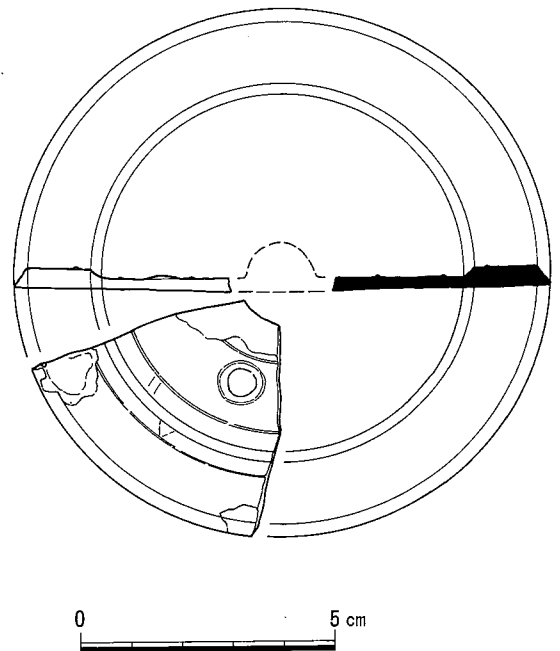


Fig.55 銅鏡片実測図（2/3）

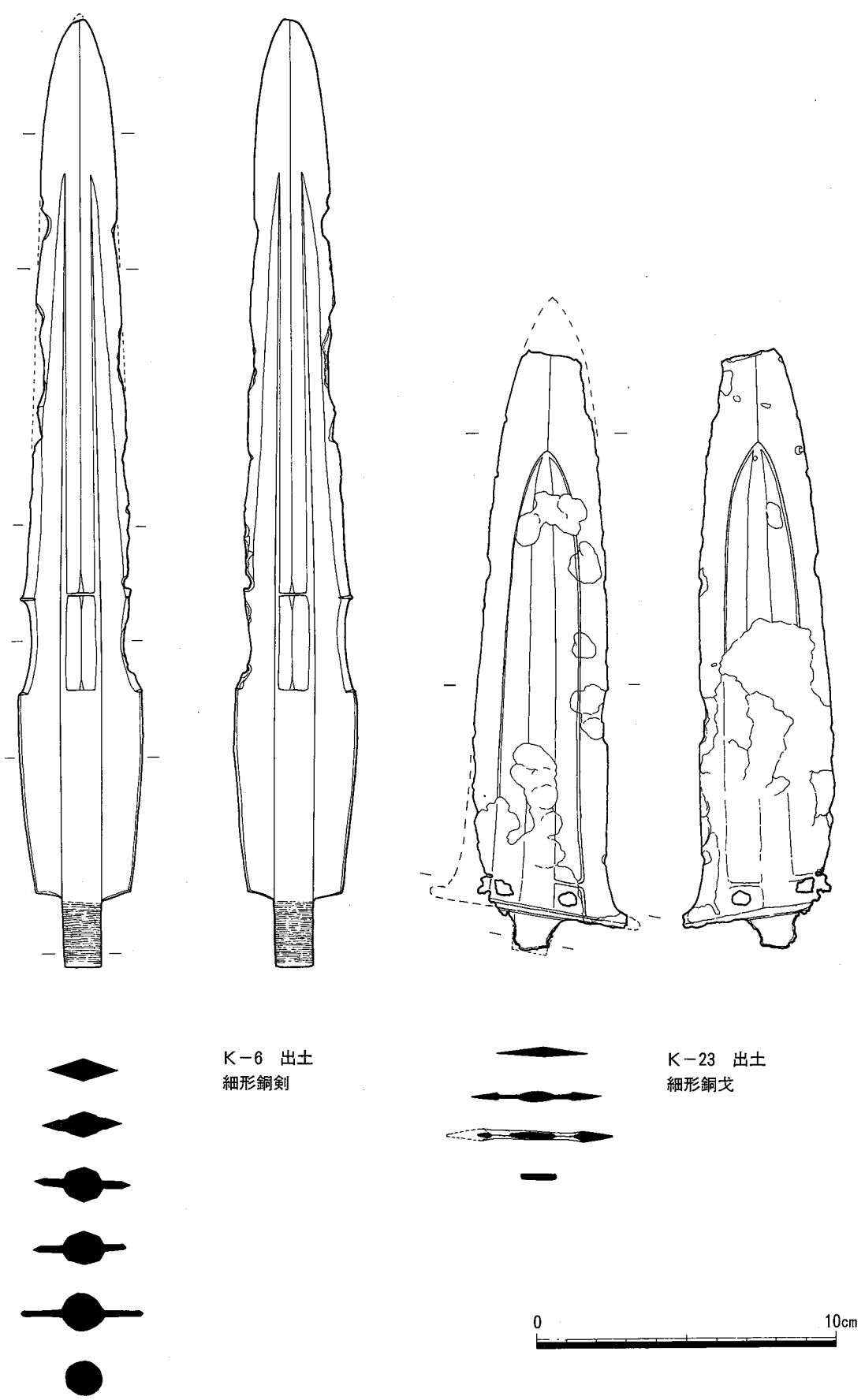
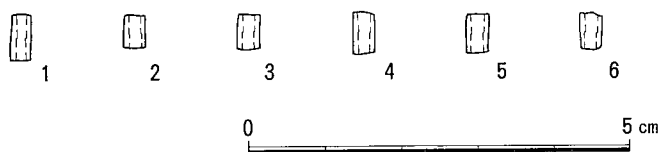


Fig.56 細形銅剣・銅戈実測図 (1/2)



番号	法 量		石材	色調	備 考
	全長	最大幅			
1	6.3	2.5	碧玉	淡灰緑色	古い欠損あり、最長
2	4.4	2.6	"	"	最短
3	4.8	2.8	"	"	古い欠損あり
4	5.5	2.6	"	"	
5	5.3	2.8	"	"	
6	(4.9)	2.8	"	"	欠失あり

Fig.57 6号甕棺墓出土管玉実測図 (1/1)

Tab.5 6号甕棺墓出土管玉計測表(mm)

(3) 玉類

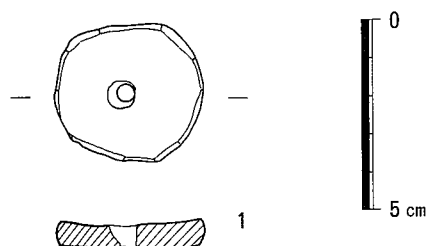
碧玉製管玉 (Fig.57 : PL-11)

6号甕棺墓の細形銅剣周辺の埋土中から出土した。総数6点で、すべて淡灰緑色をした軟質凝灰岩（グリーンタフ）を素材とする。非常に小型であることから、首飾りの一連のものとみられるが、数量的に少ないことから失われたものがあると考え。大きさは、最大のもので全長6.3mm、最大幅2.5mm、最小のものでも全長4.4mm、最大幅2.6mm程度であり、特に幅について均一性が高い。いずれも両面穿孔である。(Tab.5)

(4) その他の遺物

土製紡錘車 (Fig.58-1)

1号土壇出土。扁平円板状のもので、表面の風化が著しい。直径3.9cm、最大厚0.6cmと小型薄手で、中央に径0.4cmの孔があく。胎土に粗砂を多く含み、全体黄褐色を呈する。



磨製石斧 (Fig.58-2)

表土剥ぎ時にⅠ・Ⅱ区の境界付近で採集されたもので、硬質砂岩を石材とする。刃部は、蛤刃だが、裏面が平坦に仕上げられており、片刃に近い形状となっている。裏平坦面と基端面に装着痕とみられる打擦痕が残る。全長11.4cm、最大幅5.1cm、最大厚2.9cm、重さ250.9gを測る。

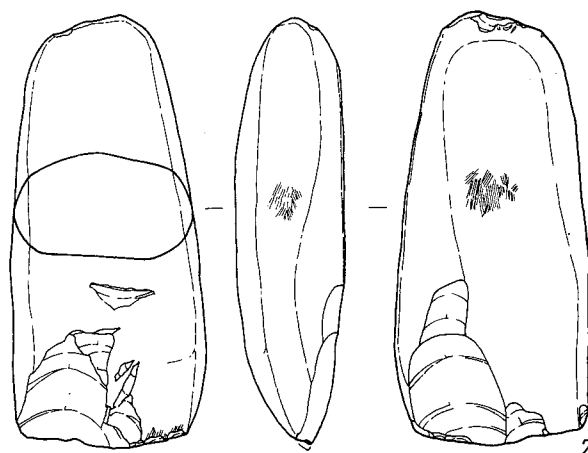


Fig.58 その他の遺物実測図 (1/2)

Ⅳ 分析と考察

i 久米遺跡の甕棺墓について

1. 甕棺墓の時期的変遷

今回の発掘では、甕棺墓24基が検出された。時期は弥生前期末から中期中頃にかけてのものであるが、棺それぞれの形態差が顕著であり、糸島地域の甕棺編年（註1）をより詳細にする上で非常に良好な資料といえる。また、墓地の形状に関しても、空間的な区画がみられるなど興味深いものがあり、墓地の形成過程を探る目的（註2）から、それぞれの甕棺墓の先後関係を把握する必要がある。墓地甕棺の編年に関しては、先学諸氏の業績（註3）により棺そのものの形態の時期的変化はほぼ把握されるに至っているので、ここでは、それらを援用して甕棺の編年的位置付けを行い、甕棺墓の先後関係を整理しておく。方法としては、先学の編年観に基づいて甕棺の組列を決定し、それらに、現場で確認できた切り合い関係、埋置角度など葬法の時期的変化の要素を加えて時期を区切った。その結果、久米遺跡甕棺墓の時期をⅠ～Ⅲ期に大別し、さらにそれを小期に細分して計6期を設定した。以下、各期の様態について述べる。

<久米Ⅰ期>

16号墓のみ該当する。甕棺は、口縁部が大きく外反して開き、端部上面に平坦を意識した粘土帯をのせる。口縁端部に刻目、頸部と胴部にそれぞれ3本単位の横沈線を施文する。器形は壺的な要素を残し、胴部最大径も胴下位にくる。法量は小さいが、底部径が大きく器壁が厚く仕上げてあり、胴下半は丸味を帯びて立ち上がる。焼成は軟質で器形の歪みがあり、器色は灰黄褐色を呈する。胎土には、大粒の粗砂を多く含む。直立的に傾斜埋置され、穿孔の風習など時期的に古い要素をもつ。甕（上甕）＋打欠甕（下甕）の上下棺の組合せである。Ⅱ期の甕棺墓とは、土器の焼成、葬送方法等にあきらかな違いが感じられる。

<久米Ⅱa期>

細形銅戈副葬の23号墓と、それを切って真上に埋葬される20号墓がこの時期に属する。甕棺は、20号墓上甕のようにⅠ期に引き続く器形を呈するものもあるが、口縁部の形成、刻目の施文等に明らかな進歩がみられ、胴部形状も甕として確立する。胴上半のすばまりが大きいことが特徴的で、この時期まで頸部及び胴部の沈線施文がみられる。23号墓の甕棺は、20号墓のそれに比べて形態的に新しい要素をもっているが、墓壇の切り合いによる先後関係は、逆である。これは、この時期において、棺の形態変異の幅が大きいことを示唆しており、上下甕で棺の形態が明らかに違うのもこの時期の甕棺墓の多様性を示す大きな特徴であるといえよう。23号墓下甕は、法量が大きく、形態が非常に独特で特別仕立て風にも感じられるが、その一方で器壁が非常に薄く器形が歪んでおり、製作技術の未発達な段階でむりやりに大きく作り上げたような感もある。製作時に棺をねせて転がしたかのように底部を雑につくるが、この手法は、Ⅱb期の3・14号甕棺に引き継がれている。焼成は軟質で、暗灰色がかった黄褐色を呈するものが多く、黒塗りの痕跡もみられる。胎土には、大きさにむらのある粗砂が多量に混じる。上甕に大型甕を使用するのは、この時期までで、埋置角をいまだ大きくして埋葬される。下甕を礫で固定する葬法がみられる。

＜久米Ⅱb期＞

細形銅剣副葬の6号墓をはじめ、3・5・12・14号墓がこの時期にはいるが、古い要素を残す3・14号墓と、新相の5・6・12号墓に細分できる。また、1号土壙もこの時期に営まれると考えられる。Ⅱa期との相違点として、法量が大きくそれでいてしっかりしたつくりの甕棺が製作されるようになったこと、上甕専用として鉢形土器を採用するようになったこと等があげられる。久米遺跡において、この時期以後、大型甕棺の上甕には必ず鉢形土器を使用している。古い要素を残す14号墓下甕は、口縁の刻目や底部のつくり等でⅡa期の手法を受け継ぐが、器壁が厚く焼成も堅緻になり、明らかな製作技術の発展が認められる。12号墓下甕は、底部の雑なつくり、口縁部の刻目などで古い要素を残す。それよりやや新しい5・6号墓は、器形が砲弾形に近いものになり、口縁はやや内傾し、外端部を平坦に整えたもので、汲田式甕棺へと変化する過渡期の所産といえる。器形は、胴下半が膨らんで立ち上がり、胴部突帯もつぶれ気味で幅の広い突帯を巡らす点で、やや古い要素が残る。器色が、橙色をおびた黄褐色を呈するのがこの時期の甕棺の特徴で、胎土には、いまだ粗砂が目立つ。黒塗りの痕跡も目立ち、埋置角を大きくして埋置されること、下甕を礫により固定することなど、葬法についてはⅡa期から引き続いている。

＜久米Ⅲa期＞

1・2・18号墓が該当する。この時期の甕棺は、いわばⅡ期からⅢ期への過渡的な形態を呈したもので、口縁が内側に張り出す傾向が生じ、器形も細身になるなど、甕棺の形態には明らかな変化があるが、棺の固定に礫を用いたり（2号墓）、傾斜埋置される（18号墓）など、葬法の面で一部古い要素が残る。胎土は、Ⅱ期のものに比べて砂粒を均一に含むようになり、この時期以降、器色は押し並べて黄褐色系になる。甕棺個々の形態に類似性がみられだす。

＜久米Ⅲb期＞

4・7・8・9号墓が該当する。小型墓の13・24号墓もこの時期にあてはまる。甕棺は、内側に大きく張り出す逆L字状口縁が発展する。胴上半のすぼまりがいまだ大きい、器形は明らかに砲弾形として定着する。8号墓は、器形は新相を示すが、器表の黒塗りや口縁が外に開くなど古い要素がある。埋葬形態はいまだやや傾斜して埋置される傾向がある。

＜久米Ⅲc期＞

やや古相を示す15・19号墓、新相の10・11・21号墓が該当する。残存不良で不明な点もあるが17・22号墓もこの時期のものであろう。甕棺の形態は、基本的にⅢb期から大きな形態的变化を示さないが、胎土の均一性、口縁部・突帯の形状などにやや進展がみられ、新相のものは須玖式甕棺に近いカタチまで発展する。17号墓の甕は、いわゆる「丸味を帯びた甕棺」の特徴を備えており注目される。Ⅲb期との大きな違いは、完全に水平埋置に変化している点があげられる。

以上、甕棺墓の時期的変遷を小6期に分けてみた。ここでは、先後関係の判断において棺の形態よりも葬法の変化を重視した。したがって、従来の編年観とやや異なった時期にプロットされたものもあるが、これは甕棺製作と葬送時期に多少のずれがあり、先後の型式が混在したものと考えたい。久米遺跡では、甕棺の形態差の著しいⅡ期と、棺の形態に類似性がみられだすⅢ期の間に、最も大きな画期を見いだすことができる。時期としては、Ⅰ期を前期末、Ⅱ期を中期初頭から中期前葉の古段階、Ⅲ期を中期前葉の新段階～中期中頃に位置付ける。

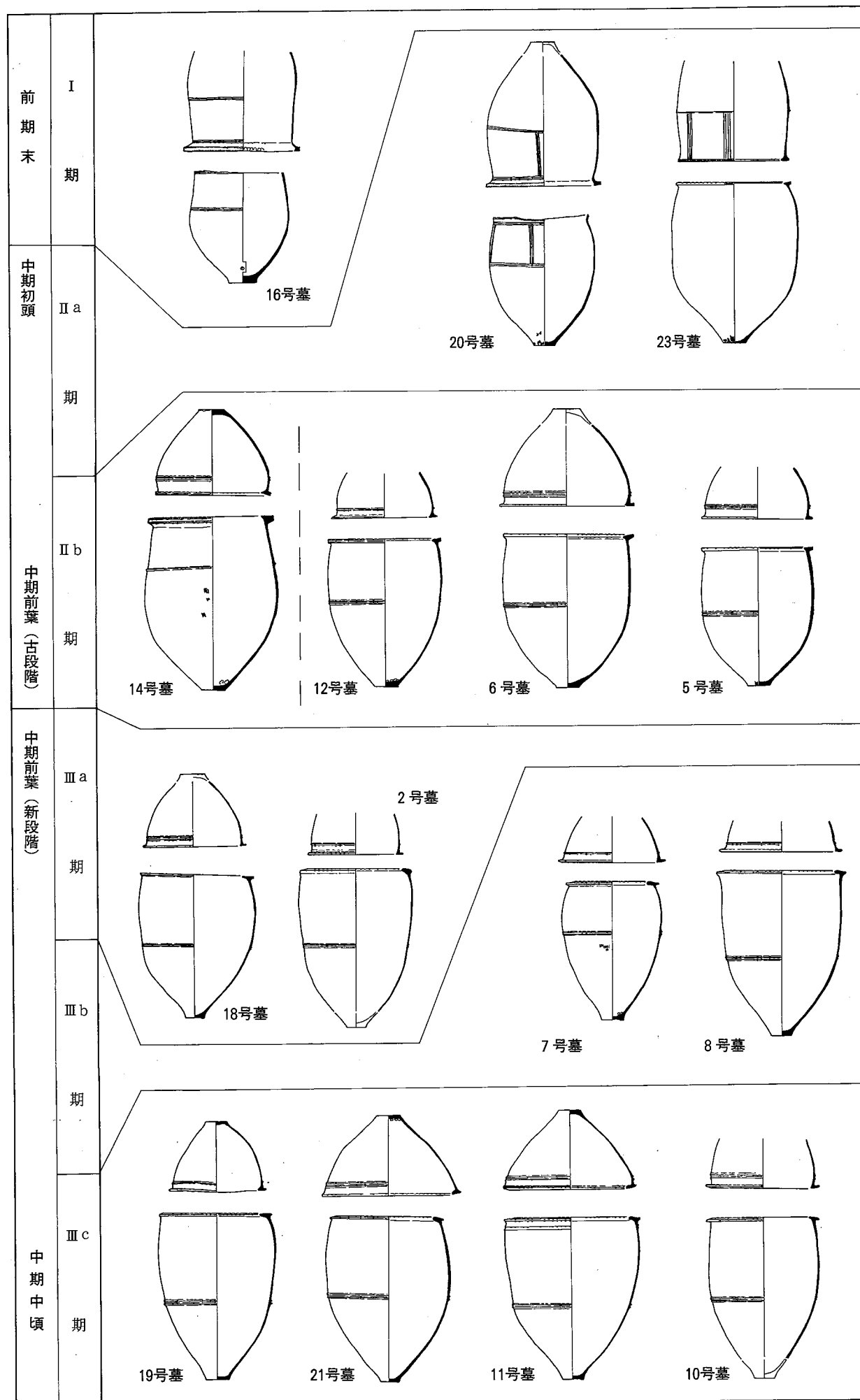


Fig.59 久米遺跡出土甕棺の変遷

2. 久米遺跡甕棺墓地の形成過程

前項でみた甕棺墓の時期的変遷にしたがって、墓地の形成過程をみてゆきたい。久米遺跡の甕棺墓は、墓地が埋葬のおこなわれない空閑地によって明確に区分されているのが特徴である。これには、造営当初から葬送集団による規制的な意図が介在していたものと考えられる。ここでは、墓域の設定区分が時期的にどのように展開するのかについて焦点を絞って各期の様相をみてゆくことにする。なお、ここで設定した各時期は、甕棺墓の時間的な形態差によって区切られた形式時期であって、必ずしもそのまま均等な時間幅を意味するものではない。

[久米Ⅰ期]

この時期に該当するのは、調査区北東部に営まれた16号墓のみである。ただし、墓地は現在削平されている北或いは東方向にのびていたと予想され、同時期の他の甕棺がそこに存在していた可能性が残る。この時点では、墓域などの区画・墓道の存在などは判断できない。

[久米Ⅱa期]

調査区の南端に切り合って2基の甕棺が埋葬される。そのうち1基は細形銅戈副葬の23号墓である。他に埋葬できる区域がありながらわざわざそれを切って埋葬される20号墓は、23号墓被葬者と血縁等で深いつながりがあったと推定される。南へと墓域が移動する事については、Ⅰ～Ⅱ期の間にかなりの時間幅があったか、あるいは、墓地造営に関して当初から集団内部での墓域の設定が行われていた可能性が考えられる。

[久米Ⅱb期]

C群を中心に、細形銅剣副葬の6号墓など、大型の甕棺墓が埋葬される。この時期に、南北に墓群が二分化する傾向が明確となり、墓群を斜めに区切る埋葬の行われない空閑地の存在が明らかとなる（墓地造営当初から存在していた可能性は高い）。この空閑地は、甕棺の運搬、葬送儀礼などが行われていた墓道であったと推定される。死者を葬る墓域と死者を見送る葬送の場が区別して設定されていたことが窺える。

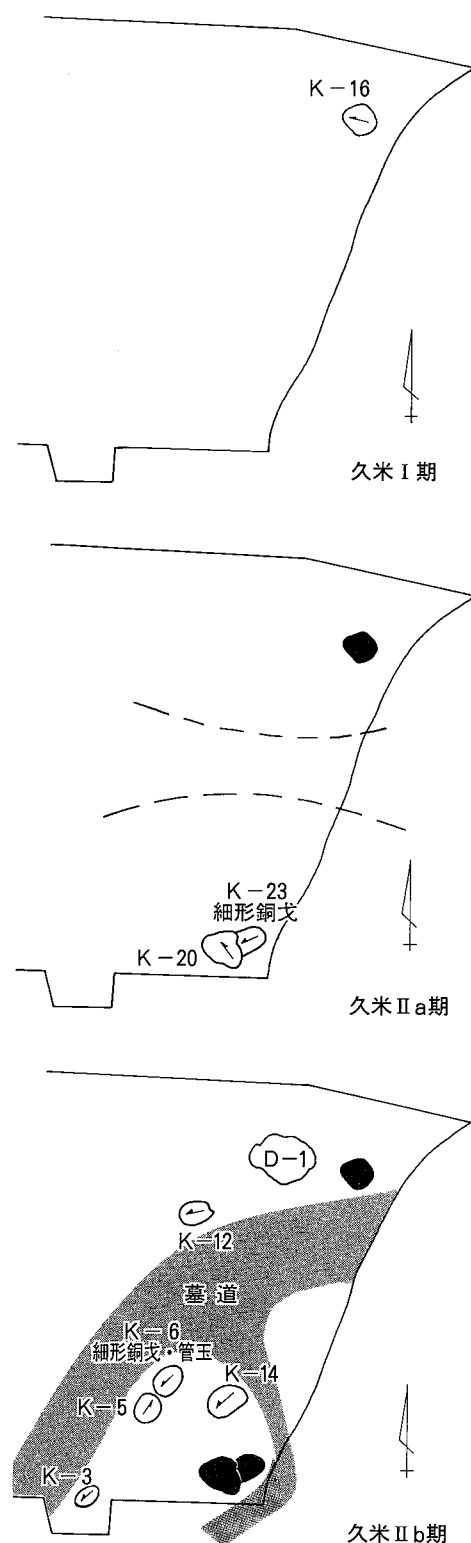


Fig.60 久米遺跡甕棺墓の形式過程①

[久米Ⅲa期]

Ⅱ期まで行われていた南北二つの墓群がさらに細かく分かれA群とD群に埋葬が行われる。集団内の細分化が進んだことが考えられる。これらの埋葬から、先期にみられた墓道と直交するかたちで別の墓道が存在することがわかる。

[久米Ⅲb期]

南群（C・D群）に埋葬が行われ、C群はほぼ隅丸方形の墓域を形成する。7・8・9号墓は、同時期にお互いに切り合って埋葬される。北群にスペースがあるにもかかわらず、こうして南群に集中埋葬されるのは、明確な墓域の区分が意図されたものと推定できよう。

[久米Ⅲc期]

B・C・D各群に埋葬が行われるが、D群に大型墓が集中する。この時期において、墓地の中心は完全に北群に移行するが、それを促しているのは、いままでの墓道のさらに北側に想定される別の墓道の存在である。この時期になって北群に墓地が集中するのは、分化した集団内の勢力変化によるものか、もしくは、単に新たな墓道の開発にしたがって北群に墓域を拡大させただけのものかいずれかであると考えられる。

以上からみた久米遺跡における甕棺墓の形成過程の特色を概括すれば次のとおりである。

①墓地の形成当初から明確な墓域の設定（方形に近い区画であると考えられる）が認められる。それを区切る墓道状の空地があり、そこから、墓域側にむかって埋葬が行われている。

②甕棺の挿入方向は、墓道側から、墓域側にむかって挿入されるもの（墓道の方と直交するものが多い。）、墓道と平行して埋置されるものの二つのパターンに統括され、墓域の内側に入りこんで埋葬される例はない。

③墓地は全体としては、南から北へと展開するが、各小期においては、意図的に群を選んで甕棺墓が埋置される。

これら久米遺跡甕棺墓の形成にみられる特徴的な事象は、葬送集団の構造や造墓に係わる諸規制

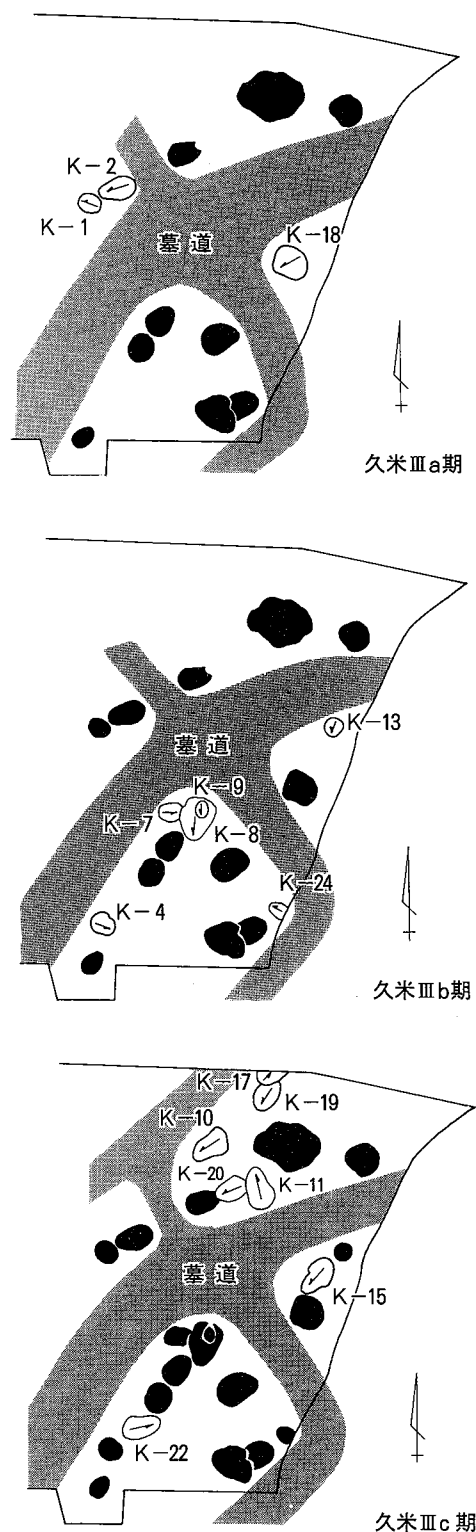


Fig.61 久米遺跡甕棺墓の形成過程②

を反映しているものと考えが、はたしてそれがどのようなものであったのかという具体的な意味づけまでは、ここでは言及できない。副葬品をもつ墓とそれ以外の墓との関係についてもさらに解明してゆく必要があるだろうし、方形区画の存在などは、墳丘墓の事例も含めて同時期の甕棺墓地に多くみられる事例であり、それらとの関連等も今後調べていく必要がある。現時点では、墓地形成過程にみられる特徴的事象をまとめるだけに留めておきたい。

註

1. 「飯氏遺跡群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集 1994
など福岡市教育委員会常松幹雄氏、宮井善朗氏によって近年、精力的に編年研究がなされている。
2. 甕棺の形式序列等で墓地の変遷を把握し、弥生時代の社会構成等の解明へのアプローチとする方法は、近年、各報告書・論攻などで取り上げられそれぞれ成果をあげている。
3. 代表的なものとして次のような論攻がある。
森貞次郎 「弥生時代における細形銅剣の流入について」日本民族と南方文化 1966
橋口達也 「甕棺の編年的研究」九州縦貫自動車道関連埋蔵文化財報告第31集中巻 福岡県教育委員会 1979

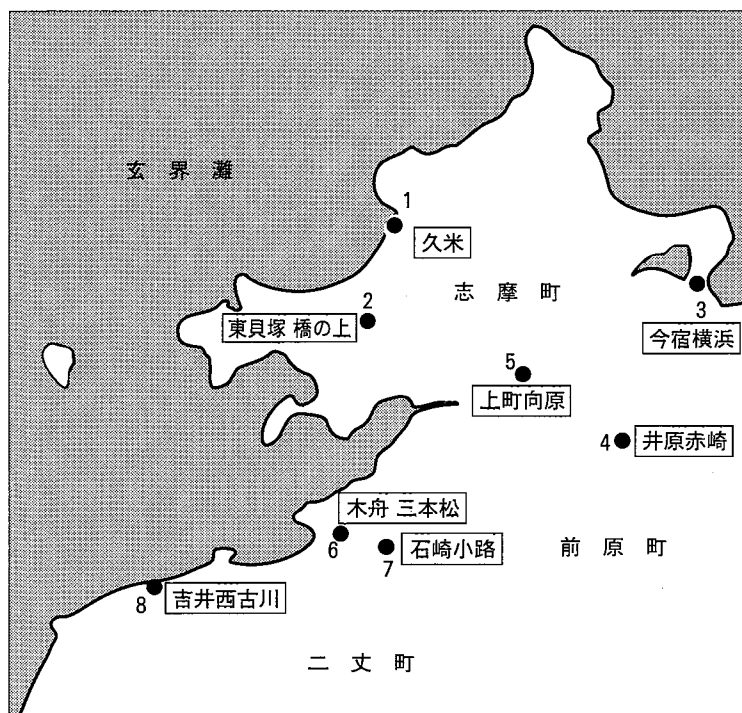
ii 久米遺跡出土の青銅器について

1. 甕棺墓出土の細形銅剣・銅戈について

久米遺跡からの細形銅剣・銅戈の出土は、糸島地域における当時の社会状況や青銅器の流入等を考える上で、重要な資料となりうるものである。以下、その特徴についてまとめておく。

まず、副葬の時期についてであるが、細形銅剣・銅戈とも弥生中期初頭から前葉の古い段階にかけての甕棺に副葬されている。銅戈を副葬する23号墓の甕棺は、かなり特殊な形状を呈するものだが、各部にいわゆる城ノ越式期の甕棺の特徴を備えており、その時期のものとみてよかろう。銅剣副葬の6号墓の甕棺は、23号墓のそれよりやや新相をしめし、いわゆる汲田式甕棺に近い形状となっているが、そこまでにはなりきっていない。23号墓と6号墓の時期差については、明確な基準を与えられないが、それほどなかったのではないかと思われ、青銅器副葬の時期はごく短期間であったと考えられる。

形態について、6号墓の細形銅剣は、脊の鎬が刳方下端までしかなされたない類で、その中では、研ぎだしがすすみ鎬が直線的で節帯が明確になったものである（註1）。仿製であるか微妙な時期の所産である。23号墓の偏平脆弱な細形銅戈は、朝鮮半島での出土例がまったくなく、以前から列島産の出現段階のものと位置付けられているものである。現在認識している限りで同タイプの銅戈の出土例は、玄界灘沿岸を中心に10例知られている（註2）が、それらは、有田出土のような樋が無文のもの、と樋に斜格子文をもつもの（宇木汲田17号甕棺、同58号甕棺、吉武大石53号甕棺など）の二類に分かれ、現状では前者のほうが後者よりもやや古い甕棺に副葬される傾向がみられる。久米23号墓の銅戈は、復元長が22.0cmと長く、樋が無文であるので前者の類に含まれる。副葬の時期は有田例よりも下るものと考えられるが、斜格子文の類の甕棺副葬例よりは一段階古い甕棺に副葬されているので、両者には、多少の時期差があったのではなかろうか。



No.	出土地名	遺構	副葬品
1	久米	甕棺墓	細形銅剣1 細形銅戈1 管玉6
2	東貝塚橋の上	甕棺墓	磨製石剣1
3	今宿横浜	土墳墓	銅剣1
4	井原赤崎	?	細形銅剣1
5	上町向原	?	細形銅剣1
6	木舟三本松	甕棺墓	磨製石剣1 ヒスイ勾玉1 管玉18 他
7	石崎小路	甕棺墓	管玉120以上 銅釧1 ヒスイ勾玉1
8	吉井西古川	甕棺墓?	細形銅剣1 細形銅矛1

(※出土伝承地・遺物が現存しないものを除く。)

Fig.62 糸島地域の弥生中期前半期における副葬墓の分布

2. 弥生中期前半期における糸島地域の副葬墓

さて、副葬青銅器の組合せや規模からみて、久米遺跡甕棺墓に葬られた有力層は当時の地域社会においてどのような位置にあったのであろうか。糸島地域での中期前半期の副葬墓の分布状況を見て検討してみよう (Fig.62: 註3)。まず現在まで遺物が現存しているものであげてみると、青銅製武器出土の遺跡として、前原市井原赤崎で細形銅剣 (1)、同市上町向原で細形銅剣 (1)、二丈町吉井西古川で細形銅剣 (1) と細形銅矛 (1)、福岡市西区の今宿横浜で銅剣の再加工品 (1) が出土している。前原市三雲の川底からは戦国期桃氏剣の発見例もある。遺物は現存せず、出土状況等も不明だが、前原市泊や松井、福岡市西区周船寺などにも銅剣出土の記録がある。青銅器類に準ずる磨製石剣等の副葬例としては、志摩町橋の上遺跡で完形の磨製石剣 (1)、やや新しい時期のものだが、二丈町木舟三本松遺跡では、磨製石剣やヒスイ勾玉、管玉が複数の甕棺に分散的に副葬されている。同町石崎小路では、時期・出土状況等に不明な点があるものの、管玉120点以上や銅釧等を出土した甕棺墓の記録も残っている。

以上にあげた副葬墓は、副葬品の種類から判断してそれぞれの時期にばらつきがあり、完全に同一時期とみることはできない。しかし、弥生前期末から中期前半期において地形にくぎられた各小平野単位ごとに有力集落が分散して存在し、積極的な交易活動を展開していたことは読み取れる。久米遺跡の副葬墓もそういった集落内の有力層の墳墓のひとつであったのだろう。久米遺跡の墳墓は、墓域の区画こそあるものの、いわゆる「普通の集団墓地」内に有力者が分散して埋葬されていること、装身具等が少ないこと等から当該期における小平野を統括する地縁的有力層墓の典型例といえる。海に近接した平野の開口部を占める久米遺跡の地理的位置から考えた場合、その性格は、玄界灘沿岸部の交易の中継地点として、もしくは、海洋航海に直接従事し発展した勢力集団であったと推定される。当該期には、玄界灘沿岸部に同じような基盤をもった集落が多数存在

し、朝鮮半島南岸も含めた海洋交易ルートが存在していたと考えられる。ここで注目されるのは、久米遺跡では中期前半期をつうじて墓地が営まれる中で、青銅器の副葬が中期はじめ頃のごく短期間でおわっていることである。副葬品をもたなくなっても墓地そのものは中期中頃まで継続するのは、久米集落の交易による繁栄が一過的であったことを示唆する。近隣勢力との交易権争いあるいは交易権の再編成等があったのか、半島もしくは列島内からの青銅器の流入が一時期をもっておわってしまっただけなのか、その意味づけについては結論づけることはできないが、これは、当時の交易体系を解明する糸口として注目すべき事象であると考ええる。

3. 久米遺跡出土の銅鏡片について

20号甕棺墓直上の表土中から出土した銅鏡片は、表面の磨耗が著しく背面の文様は明確でないが、外縁の縁が斜角をなしていること、外区と内区にそれぞれ一条の突線が残り、外区に鋸歯文、内区に櫛葉文がおぼろげながら認められること、乳が残存しており、それを囲む圈線が大きく乳座が大きいこと、紐座を囲む円形の突線が認められること等などから「獣帯鏡」の類であると判断した。推定復元鏡径は10.6cmで、中国鏡がまだ大型化する以前の数値にあり後漢鏡でも古い鏡式、つまり新の王莽時代から後漢初期にかけての所産であると考えられる。形態として近い類例に安徽淮南博物館所蔵の四乳四禽紋鏡がある（註4）。出土状況が遺構にともなうものでなく、共伴する遺物等との関連もないことから、その意味づけについては判断しかねるが、恐らくは削平された周辺の墳墓の副葬品であり、それが攪乱により表土層中に混入したものであろう。

註

1. 岩永氏の分類によるⅠ式、宮井氏の分類によるⅠB式の範疇に含まれる。
岩永省三「弥生時代青銅器型式分類編年再考」九州考古学55号 1980
宮井善朗「銅剣の流人と波及」東アジアの考古と歴史 中巻 1987
2. 福岡県有田・吉武大石53号甕棺・清宗・朝町竹重SK28・元町原、佐賀県宇木汲田17号甕棺・同58号甕棺・東尾、熊本県蒲生下原、大分県弘田大原で出土している。
3. 出土伝承等は多く知られているが、遺物はもちろんそれを記した文献等も散逸しており、不確実な情報も多い。ここでは、知り得るかぎり記載している。実状が不明な点もあるかもしれないが概略としては正しいものと考ええる。

参考文献

- 「日本青銅武器出土地名表」「青銅の武器展」展示図録 九州歴史資料館 1980
「王がいた証」伊都歴史資料館企画展展示図録 伊都歴史資料館 1998
「木舟・三本松遺跡」二丈町文化財調査報告書第9集 1994
4. 京都大学人文科学研究所助教授岡村秀典氏に実見・鑑定していただき御教示を賜った。

iii 福岡県志摩町久米遺跡および周辺遺跡出土甕棺の胎土分析

九州大学 中園 聡
奈良教育大学 三辻 利一

1. はじめに

筆者らは蛍光X線分析による胎土分析を用いて、弥生土器の生産・流通システムと葬送システムの実証的研究を目指しているが、その中でもとりわけ弥生時代甕棺の胎土分析は重要なものである。甕棺はそれ自体が墓であるとともに土器であるため年代の決定もしやすく、それ自体の形態・技法、そして胎土から得られる情報は、墳墓研究にとって大幅な進展をもたらすと考えられる。

胎土分析は必ずしも産地推定のみを目的とするものではない。弥生土器などの場合でももちろん胎土から産地推定をすることはある程度可能であるが、まだ基礎データの蓄積が少なく、さらに須恵器の窯跡などのような特定産地のデータを得ることが本来困難である。また、混和材による効果も明らかでない点が多い。しかし迅速かつ安定性のある蛍光X線分析による胎土分析を利用することによって、同一甕棺墓地内での時期的な胎土の変化や、上甕・下甕の胎土が一致するかどうかなどの問題設定が可能になり、考古学的に意味ある情報を引き出すことができると考える。

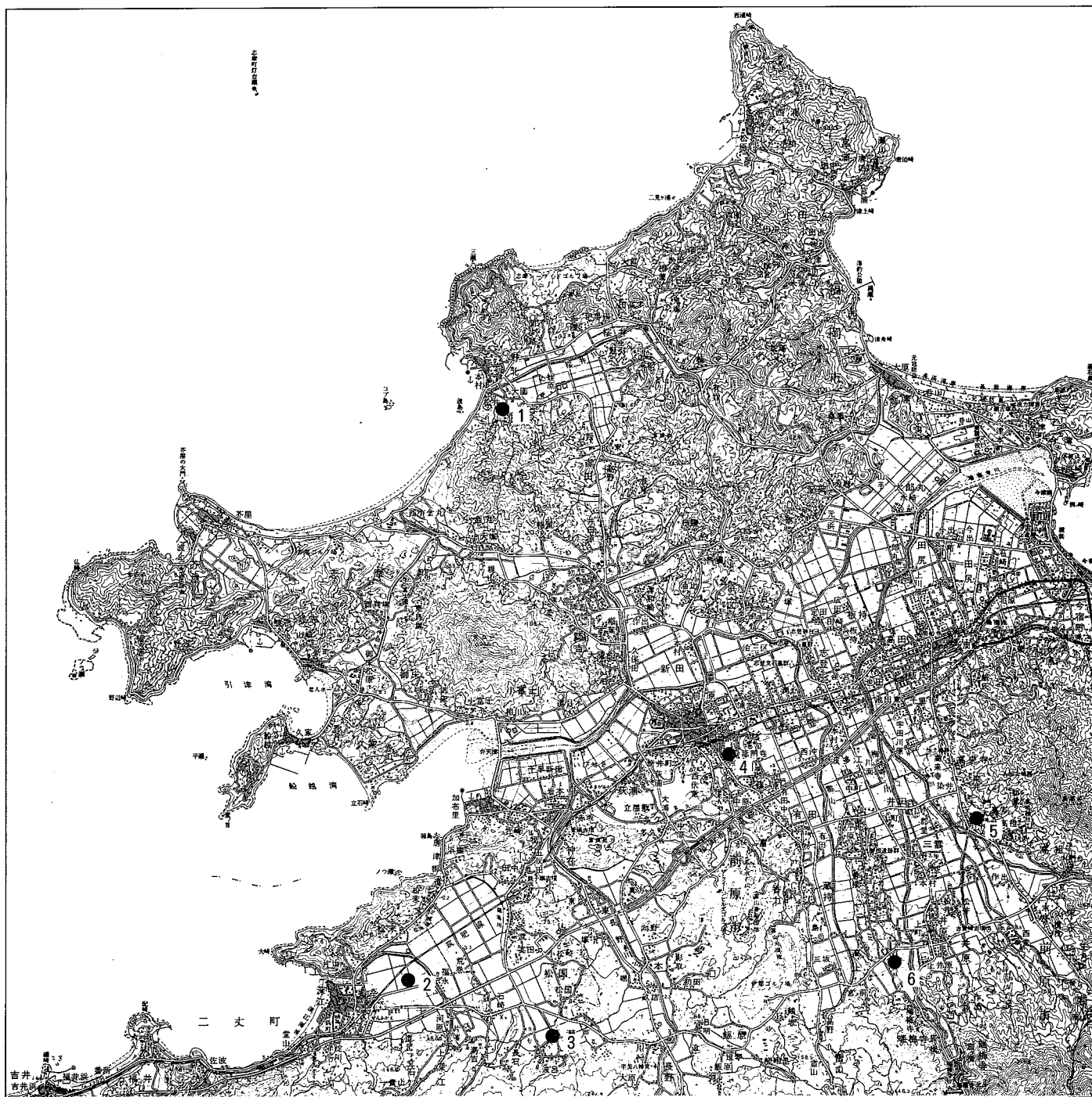
これまでいくつかの甕棺墓地で行ってきた胎土分析から、胎土の化学特性が遺跡ごとに一定の傾向をもったまとまりをみせることや、専用甕棺の胎土はその遺跡で出土した小型土器と類似する傾向があること、また専用甕棺の上甕・下甕の胎土が同一とっていいほど類似するものも多く、そうしたものは2個1対でセットとして作られた可能性が高いことなどがわかっている。さらに、甕棺の上下棺の一致度の差が遺跡や階層による可能性も考えられ、甕棺製作の契機が葬送に関する儀礼となんらかの関係があることも想定されてきている。

甕棺分布圏一帯でデータを蓄積していく必要があるが、かつて「伊都国」があったとされ歴史的に重要地域である旧糸島郡内において今回初めて甕棺の胎土分析に着手することができた。ここでは、副葬品として細形銅剣と管玉(K-6)、細形銅戈(K-23)が出土した甕棺墓地である福岡県糸島郡志摩町久米遺跡の甕棺の胎土分析を中心として検討し、旧糸島郡に属する近隣市町の甕棺の胎土分析結果も併せて考察する。

2. 資料

久米遺跡のほか、比較のため周辺遺跡のものも分析した。前原市の篠原新建遺跡、高上石町遺跡、高祖榎町遺跡、糸島郡二丈町の木舟三本松遺跡、辰ヶ下遺跡である(第1図)。これらはみな旧糸島郡に所在する。

久米遺跡のものとしては、甕棺墓(24基41個体)と土壇1出土土器(5個体)の計46点の土器試料と、甕棺の上甕・下甕の合わせ目に使用された目貼粘土(8点)と地山赤土(1点)の計9点の土壇試料、合わせて55点の試料が採取され分析された。なお、土壇1は甕棺墓群中にあり、祭祀土壇としての性格をもつものと考えられる。出土土器の時期も中期前葉を中心としており、甕棺墓群の存続期間にあてはまる。



第1図 分析に用いた遺跡 (1/100,000)

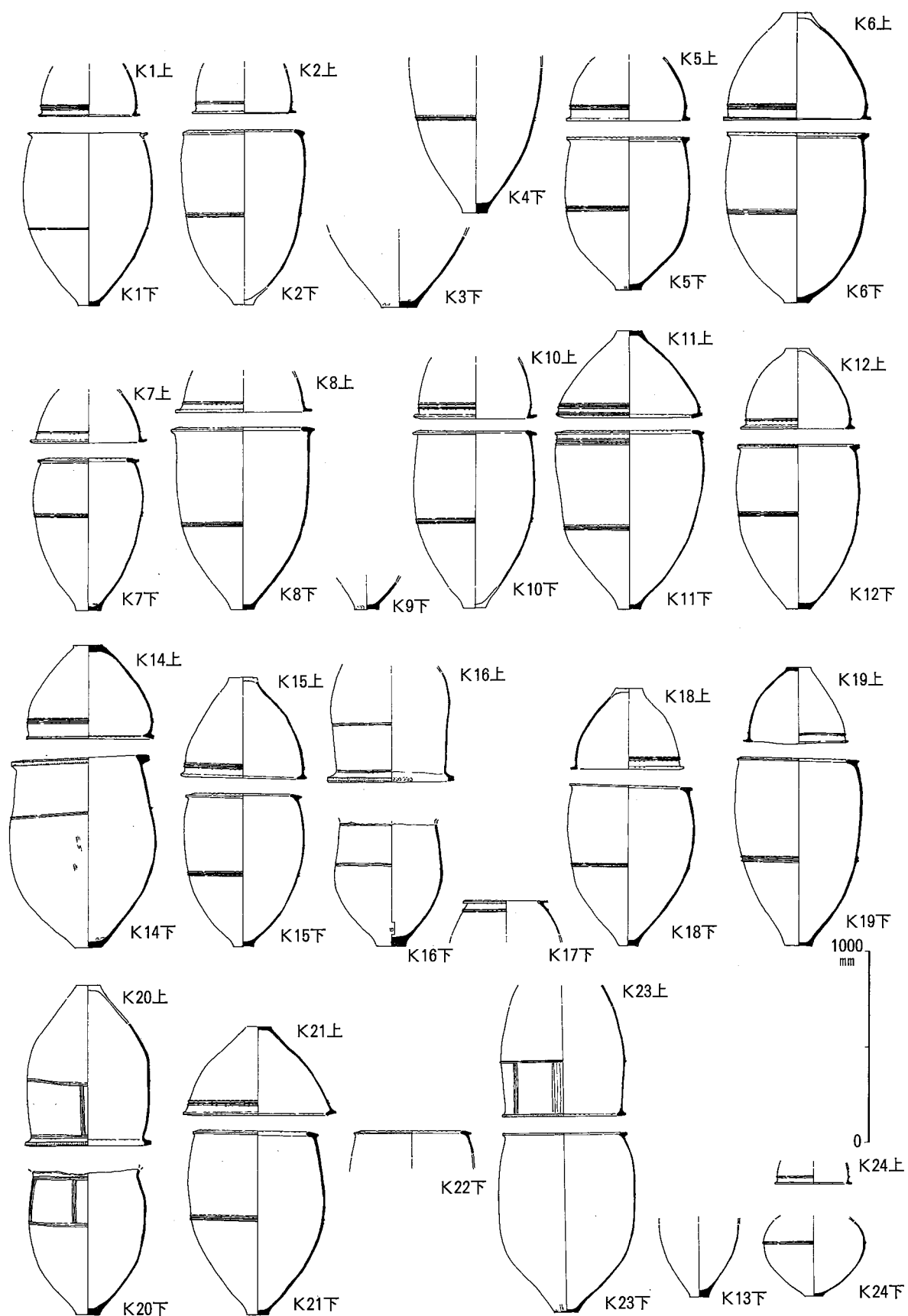
1. 久米遺跡 2. 木舟三本松遺跡 3. 辰ヶ下遺跡 4. 篠原新建遺跡 5. 高祖榎町遺跡 6. 高上石町遺跡

また、周辺遺跡の甕棺 (46基70個体) が分析に供された (第1表)。

今回分析した試料はいずれも弥生時代中期前葉を中心とする中期初頭から中期中頃に属するものである。

3. 分析法

試料の採取部位は胴部を中心としたが、採取しやすい任意の部位から各個体1点ずつ試料を採取したため、口縁部等別の部位を用いたものもある。それは筆者らは胎土分析の前提として、甕棺1



第2図 久米遺跡出土甕棺 (1/30)

第1表 胎土分析試料とデータ一覧表(1)

No.	遺 跡 名	種 類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	久米遺跡	K-1 上甕	0.545	0.464	2.05	0.456	0.808	0.220
2	久米遺跡	K-2 上甕	0.578	0.338	2.03	0.504	0.701	0.220
3	久米遺跡	K-2 下甕	0.583	0.399	2.83	0.543	0.692	0.245
4	久米遺跡	K-3 下甕	0.606	0.522	2.68	0.498	0.809	0.282
5	久米遺跡	K-4 下甕	0.573	0.481	3.15	0.476	0.809	0.241
6	久米遺跡	K-5 上甕	0.487	1.160	3.68	0.368	0.611	0.258
7	久米遺跡	K-5 下甕	0.638	0.143	2.79	0.478	0.479	0.102
8	久米遺跡	K-6 上甕	0.605	0.312	2.95	0.444	0.656	0.175
9	久米遺跡	K-6 下甕	0.697	0.247	1.61	0.557	0.714	0.133
10	久米遺跡	K-7 上甕	0.567	0.357	3.15	0.560	0.628	0.220
11	久米遺跡	K-7 下甕	0.610	0.530	1.99	0.467	0.938	0.229
12	久米遺跡	K-8 上甕	0.552	0.366	2.95	0.512	0.626	0.234
13	久米遺跡	K-8 下甕	0.622	0.432	2.26	0.583	0.825	0.224
14	久米遺跡	K-14 上甕	0.605	0.549	2.96	0.529	0.859	0.325
15	久米遺跡	K-14 下甕	0.606	0.196	2.31	0.542	0.511	0.135
16	久米遺跡	K-10 上甕	0.620	0.205	2.35	0.558	0.520	0.147
17	久米遺跡	K-10 下甕	0.622	0.196	2.53	0.564	0.512	0.148
18	久米遺跡	K-11 上甕	0.595	0.172	2.62	0.510	0.461	0.118
19	久米遺跡	K-11 下甕	0.537	0.598	2.13	0.491	0.881	0.278
20	久米遺跡	K-12 上甕	0.578	0.447	1.60	0.548	0.902	0.241
21	久米遺跡	K-12 下甕	0.472	0.553	3.52	0.396	0.836	0.236
22	久米遺跡	K-13 下甕	0.595	0.535	3.00	0.529	0.773	0.240
23	久米遺跡	K-9 下甕	0.641	0.168	3.30	0.577	0.491	0.142
24	久米遺跡	K-15 上甕	0.51	0.655	3.08	0.508	0.876	0.258
25	久米遺跡	K-15 下甕	0.589	0.351	2.21	0.536	0.654	0.160
26	久米遺跡	K-16 上甕	0.503	0.296	1.70	0.467	0.762	0.259
27	久米遺跡	K-16 下甕	0.605	0.226	1.55	0.603	0.716	0.248
28	久米遺跡	K-17 下甕	0.607	0.464	2.92	0.645	0.718	0.204
29	久米遺跡	K-18 上甕	0.61	0.549	2.92	0.581	0.804	0.251
30	久米遺跡	K-18 下甕	0.666	0.426	2.52	0.586	0.739	0.330
31	久米遺跡	K-19 上甕	0.618	0.303	2.39	0.597	0.642	0.153
32	久米遺跡	K-19 下甕	0.604	0.528	1.49	0.596	1.030	0.305
33	久米遺跡	K-20 上甕	0.639	0.286	1.83	0.546	0.759	0.181
34	久米遺跡	K-20 下甕	0.531	0.261	2.77	0.494	0.593	0.171
35	久米遺跡	K-21 上甕	0.507	0.543	2.96	0.556	0.876	0.224
36	久米遺跡	K-21 下甕	0.56	0.364	2.99	0.502	0.731	0.147
37	久米遺跡	K-22 下甕	0.508	0.242	2.05	0.502	0.577	0.199
38	久米遺跡	K-23 上甕	0.623	0.608	3.11	0.501	0.922	0.300
39	久米遺跡	K-23 下甕	0.614	0.507	2.84	0.523	0.825	0.287
40	久米遺跡	K-24 上甕	0.527	0.628	3.15	0.463	0.886	0.301
41	久米遺跡	K-24 下甕	0.633	0.388	1.75	0.554	0.947	0.207
42	久米遺跡	土壇1 出土土器1	0.582	0.281	2.08	0.587	0.737	0.237
43	久米遺跡	土壇1 出土土器2	0.571	0.562	3.05	0.651	0.963	0.281
44	久米遺跡	土壇1 出土土器3	0.674	0.351	2.86	0.506	0.644	0.180
45	久米遺跡	土壇1 出土土器4	0.594	0.284	2.78	0.643	0.620	0.200
46	久米遺跡	土壇1 出土土器5	0.611	0.387	2.73	0.445	0.735	0.180
47	久米遺跡	K-2 目貼粘土	0.583	0.345	2.78	0.519	0.638	0.237
48	久米遺跡	K-6 目貼粘土	0.507	0.165	5.59	0.410	0.306	0.016
49	久米遺跡	K-8 目貼粘土	0.360	0.173	5.83	0.323	0.238	0.019
50	久米遺跡	K-9 目貼粘土	0.344	0.230	5.62	0.310	0.247	0.027

第1表(2)

51	久米遺跡	K-20目貼粘土	0.269	0.787	4.37	0.502	0.378	0.061
52	久米遺跡	K-21目貼粘土	0.426	0.209	5.28	0.442	0.274	0.038
53	久米遺跡	K-23目貼粘土	0.421	0.199	2.94	0.514	0.348	0.051
54	久米遺跡	K-24目貼粘土	0.750	0.175	3.45	0.646	0.388	0.046
55	久米遺跡	地山赤土	0.465	0.065	4.54	0.417	0.208	0.014
56	木舟三本松遺跡	K-1上甕	0.399	0.238	2.57	0.369	0.333	0.067
57	木舟三本松遺跡	K-1下甕	0.527	0.390	3.40	0.455	0.603	0.143
58	木舟三本松遺跡	K-12	0.497	0.480	3.16	0.446	0.723	0.197
59	木舟三本松遺跡	K-20	0.413	0.573	2.15	0.365	0.931	0.189
60	木舟三本松遺跡	K-30上甕	0.541	0.688	3.32	0.441	0.626	0.184
61	木舟三本松遺跡	K-30下甕	0.414	0.696	1.89	0.329	1.010	0.182
62	木舟三本松遺跡	K-31	0.567	0.513	2.46	0.486	0.744	0.211
63	木舟三本松遺跡	K-32	0.491	0.351	2.66	0.433	0.527	0.124
64	木舟三本松遺跡	K-33	0.409	0.587	1.78	0.379	1.130	0.208
65	木舟三本松遺跡	K-35	0.526	0.410	2.29	0.475	0.543	0.168
66	木舟三本松遺跡	K-37	0.510	0.568	3.93	0.416	0.488	0.144
67	木舟三本松遺跡	K-38	0.477	0.670	2.08	0.381	1.040	0.202
68	木舟三本松遺跡	K-42	0.516	0.364	3.11	0.409	0.554	0.135
69	木舟三本松遺跡	K-43	0.512	0.288	2.22	0.488	0.529	0.152
70	木舟三本松遺跡	K-44上甕	0.438	0.814	2.87	0.379	0.869	0.221
71	木舟三本松遺跡	K-44下甕	0.552	0.397	2.41	0.502	0.684	0.222
72	辰ヶ下遺跡	K-1上甕	0.336	0.177	2.87	0.351	0.393	0.062
73	辰ヶ下遺跡	K-1下甕	0.395	0.264	2.03	0.505	0.610	0.098
74	篠原新建遺跡	K-5上甕	0.491	0.564	3.03	0.376	0.871	0.242
75	篠原新建遺跡	K-5下甕	0.387	0.210	3.11	0.290	0.442	0.111
76	篠原新建遺跡	K-13上甕	0.413	0.549	1.82	0.285	0.959	0.259
77	篠原新建遺跡	K-13下甕	0.440	0.506	1.96	0.323	0.974	0.243
78	篠原新建遺跡	K-21上甕	0.479	0.269	2.40	0.335	0.543	0.173
79	篠原新建遺跡	K-21下甕	0.412	0.293	2.22	0.349	0.580	0.180
80	篠原新建遺跡	K-32下甕	0.426	0.414	2.31	0.387	0.736	0.210
81	篠原新建遺跡	K-42下甕	0.507	0.562	3.08	0.451	0.874	0.211
82	篠原新建遺跡	K-56下甕	0.477	0.433	1.53	0.402	0.833	0.246
83	篠原新建遺跡	K-58上甕	0.481	0.484	2.74	0.374	0.696	0.202
84	篠原新建遺跡	K-58下甕	0.497	0.393	2.43	0.495	0.730	0.177
85	篠原新建遺跡	K-68上甕	0.483	0.474	2.77	0.406	0.756	0.207
86	篠原新建遺跡	K-68下甕	0.475	0.470	2.72	0.449	0.737	0.182
87	篠原新建遺跡	K-70上甕	0.478	0.399	2.08	0.444	0.769	0.209
88	篠原新建遺跡	K-70下甕	0.469	0.399	1.87	0.377	0.811	0.235
89	篠原新建遺跡	K-73下甕	0.485	0.323	3.64	0.365	0.635	0.219
90	篠原新建遺跡	K-81上甕	0.429	0.395	3.37	0.329	0.774	0.180
91	篠原新建遺跡	K-81下甕	0.412	0.248	3.04	0.345	0.461	0.154
92	篠原新建遺跡	K-100上甕	0.453	0.372	3.12	0.375	0.710	0.256
93	篠原新建遺跡	K-100下甕	0.441	0.394	3.60	0.328	0.726	0.207
94	篠原新建遺跡	K-105下甕	0.444	0.328	4.21	0.320	0.575	0.153
95	篠原新建遺跡	K-205上甕	0.415	0.533	3.30	0.313	0.883	0.249
96	篠原新建遺跡	K-205下甕	0.473	0.606	3.13	0.443	0.893	0.232
97	篠原新建遺跡	K-208上甕	0.432	0.467	4.04	0.291	0.846	0.223
98	篠原新建遺跡	K-208下甕	0.419	0.261	4.94	0.346	0.470	0.160
99	篠原新建遺跡	K-210上甕	0.424	0.508	2.77	0.330	0.869	0.229
100	篠原新建遺跡	K-212下甕	0.441	0.465	2.00	0.425	0.809	0.180

第1表 (3)

101	篠原新建遺跡	K-213下甕	0.419	0.263	3.53	0.325	0.479	0.138
102	篠原新建遺跡	K-217上甕	0.464	0.476	3.03	0.349	0.789	0.193
103	篠原新建遺跡	K-217下甕	0.447	0.460	3.19	0.374	0.709	0.176
104	高祖榎町遺跡	K-1上甕	0.543	0.419	2.71	0.431	0.735	0.239
105	高祖榎町遺跡	K-1下甕	0.612	0.183	1.70	0.564	0.614	0.162
106	高祖榎町遺跡	K-2上甕	0.433	0.443	1.93	0.282	0.716	0.186
107	高祖榎町遺跡	K-2下甕	0.546	0.261	2.43	0.588	0.591	0.138
108	高祖榎町遺跡	K-3下甕	0.581	0.214	2.43	0.578	0.595	0.141
109	高祖榎町遺跡	K-4下甕	0.474	0.291	1.58	0.542	0.549	0.173
110	高祖榎町遺跡	K-5下甕	0.401	0.707	2.38	0.297	1.040	0.278
111	高祖榎町遺跡	K-6上甕	0.601	0.148	1.36	0.637	0.427	0.134
112	高祖榎町遺跡	K-6下甕	0.589	0.208	2.17	0.520	0.616	0.168
113	高祖榎町遺跡	K-7上甕	0.478	0.154	2.01	0.468	0.396	0.130
114	高祖榎町遺跡	K-7下甕	0.606	0.216	1.15	0.546	0.672	0.244
115	高祖榎町遺跡	K-8上甕	0.540	0.426	2.25	0.497	0.743	0.172
116	高祖榎町遺跡	K-8下甕	0.572	0.320	2.57	0.582	0.632	0.259
117	高上石町遺跡	K-5上甕	0.385	0.375	2.05	0.305	0.691	0.145
118	高上石町遺跡	K-5下甕	0.378	0.775	2.09	0.305	1.090	0.233
119	高上石町遺跡	K-8上甕	0.408	0.392	2.09	0.361	0.615	0.134
120	高上石町遺跡	K-8下甕	0.419	0.432	2.25	0.320	0.634	0.154
121	高上石町遺跡	K-13下甕	0.441	0.660	1.98	0.348	0.906	0.211
122	高上石町遺跡	K-14上甕	0.356	0.308	1.48	0.344	0.657	0.160
123	高上石町遺跡	K-14下甕	0.397	0.324	1.56	0.403	0.740	0.178
124	高上石町遺跡	K-19上甕	0.404	0.359	1.62	0.397	0.781	0.184
125	高上石町遺跡	K-19下甕	0.391	0.495	1.66	0.310	0.942	0.227

個体の胎土は比較的均質であり基本的にはどの部位を測定してもよいと考えられるからである（中園ほか、1997）。

まず形態、調整、色調、胎土などの基本的な考古学的観察を行った。観察にあたっては、上甕と下甕の同時製作の可能性を検討するために両者の類似度の検討を行った。採取した試料は、別途以下の測定に供した。

試料の表面の付着物や汚染を除去するために研削を行い、その後タングステンカーバイド製乳鉢を用いて100メッシュ以下の粉末に粉碎した。その粉末試料を内径20mm、厚さ5mmのビニール製リングの枠に入れて約13tの圧力をかけてプレスし、錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。

使用した装置は、奈良教育大学の波長分散型蛍光X線分析装置（理学電気製3270型機）である。この装置には、同時に48個の試料が装填できる自動試料交換装置が連結されている。この48個のうちの1個には岩石標準試料JG-1が常に装填されている。それは、定量分析のための標準試料とするためである。また、自動分析が定常状態で進行したことを確認するためのモニターとしての役割も併せもっている。

以上のようにして、K、Ca、Fe、Rb、Sr、Naの6元素を測定した。なお、ここで用いる分析値はすべてJG-1の各元素の蛍光X線強度を使った標準化値で表示する。

測定値の分析にあたっては、K-Ca、Rb-Srの2次元分布図の視察をはじめとして多変量解析を用いる。

4. 分析結果と考察

(1) 久米遺跡での検討

形態については、墓群全体としてはあまり類似性が高いとはいえず、各甕棺ごとに特徴を有している。中期前葉でも古い段階までは、甕棺分布圏で広くそのような傾向は認められ、必ずしもこの遺跡に特有のこととはいえない。久米遺跡の甕棺にみられる個体別の変異は、大まかにいえば糸島地域にみられる該期の甕棺の変異に包括されるものである。糸島地域の地域性を強く表す個体も多いことから、それらは久米遺跡近辺で製作されたものか、広くみてもせいぜい糸島地域で製作されたものであろうと推定される。なお、上甕に大型の鉢を用いたものが多い点も糸島地域の地域性ともいえる。

久米遺跡では専用の大型鉢を上甕にしているものが多いが、上甕と下甕の口縁部形態や口径が一致しないものが多い。また、口縁部の作りなどに差があるものも多い。したがって、こうしたものは本来上下で器形が異なるという点を差し引いても、積極的に同時製作といえるほど類似したものはほとんどない。そのような中でとりわけ注目されるのが、K-10の上甕と下甕である。それぞれ専用鉢、専用甕棺という器種の違いをこえて、外側に伸びて垂れ下がり気味の口縁部形態や突帯の形態を含めて非常に類似していることが注目された。なお、K-11は上下の形態が比較的類似しているが、作りのくせが異なっており、上甕の口唇部に刻目を施す点でも差異がある。

また、K-20は型式学的にK-23より古いとみられるが実際の切り合い関係は逆であり、また、K-23の上甕、下甕は専用甕棺でありながらも形態や文様に著差がある。このようなことから、やはり中期前半でも古い段階以前においては形態的な変異の幅が大きいことを示唆している。また、K-16、K-20は専用甕棺どうしを用いているが、それぞれ下甕のサイズが上甕より小さく、その口縁部も打ち欠いて調整しているなど、上下の類似性は低いといえる。

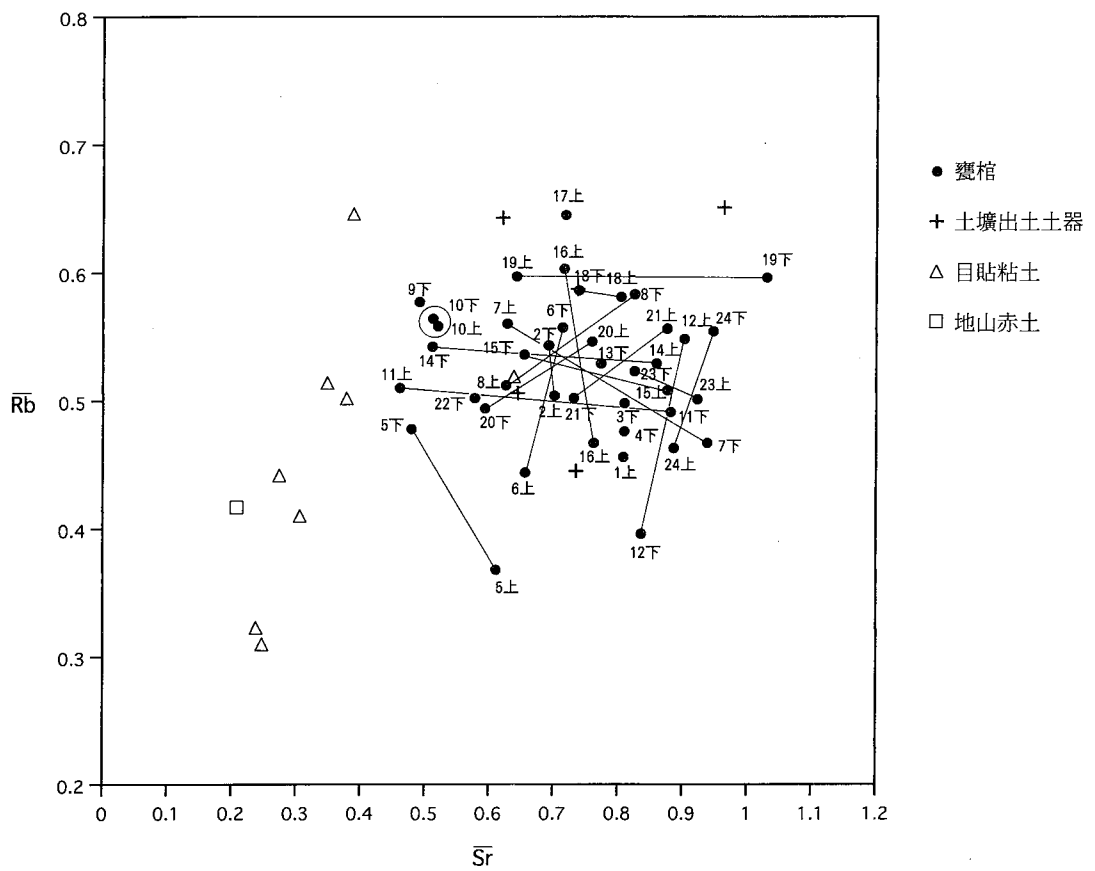
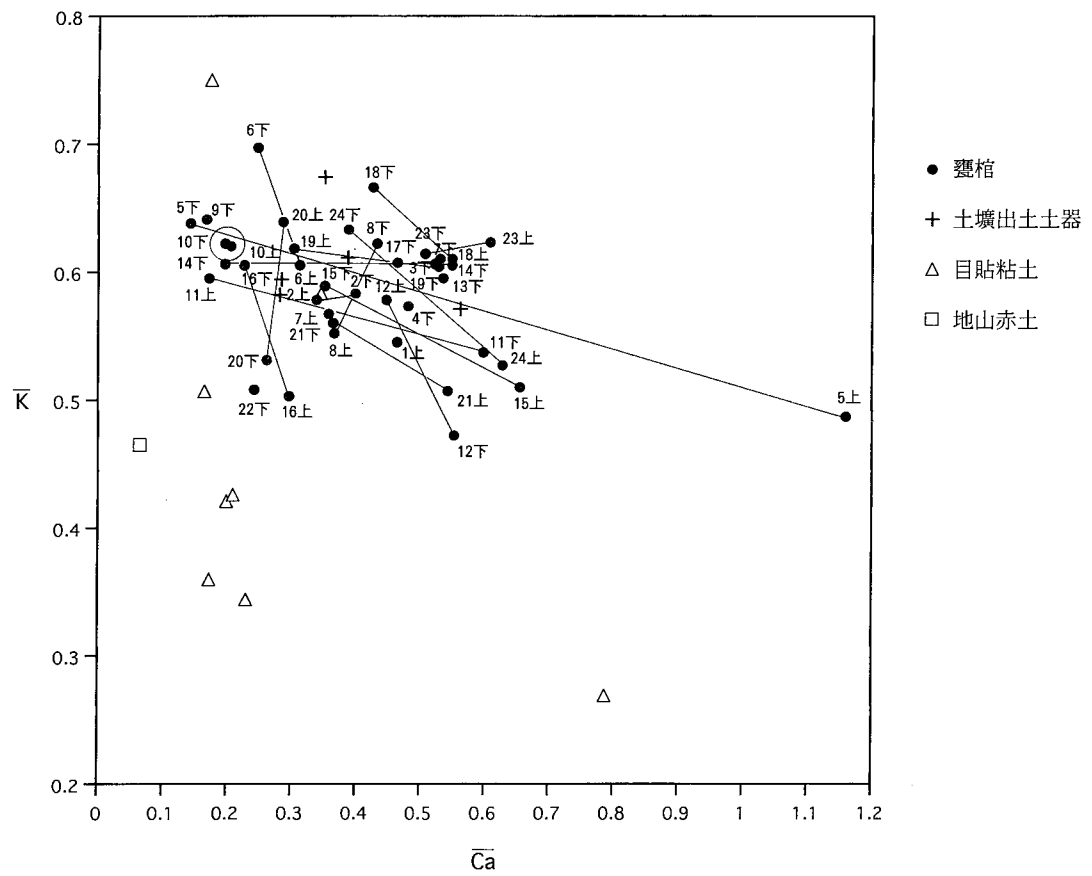
分析値は第1表に示したとおりである。

分析値のK-C a分布図とR b-S r分布図（第3図）を示す。分布状況はばらつきがあるようにみえるが、この程度の散布は経験上1遺跡でとり得る範囲を越えるものとはいえない。弥生土器の胎土分析の現状では、北部九州においては細かな産地を特定することは無理である。しかし、分析値が重なり合いながらも重心にずれをもつという程度でならば遺跡や小地域ごとの特徴を論じることある程度可能である。久米遺跡のKとR bは北部九州の弥生土器においては比較的高い値を示しており、本遺跡で固有のまとまりがあるといえる。

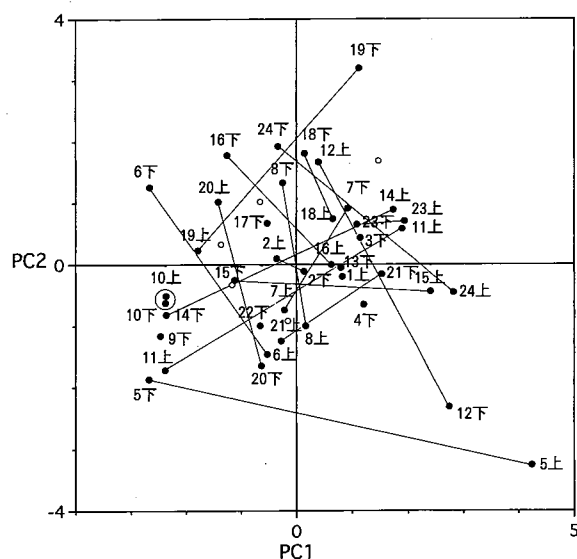
K-10の上甕と下甕はK-C a、R b-S rのどちらの分布図でも非常に近い値であり、隣接してプロットされている。両者の分析値はF e、N aでもきわめて類似しており、同一の胎土であるといってよい。これは事前の観察の結果を指示するものであり、両者は外見上からも胎土からも非常に類似しているといえる。したがって、両者はおそらく同時に製作されたものであり、同一製作者が関与していることはほぼ疑いないと考える。

我々が分析したことのある他遺跡の甕棺の例でも、この程度の類似性をもてば同一胎土であり同時製作は間違いないものと判断している。また多くの例は、外見上様々な点にわたって上甕下甕が非常に類似しているものは、分析値がこの程度類似していることが多い。

K-2の上甕と下甕も比較的近いところにプロットされている。器種が異なることもあり事前の観察では類似性は高いとはいいがたく、判断しかねた。ただし色調は類似している。分析値からは、



第3図 久米遺跡試料のK-Ca(上)、Rb-Sr(下) 分布図



● 甕 棺
○ 土壌出土土器

変量	固有ベクトル		
	主成分 1	2	3
K	-0.3780	0.3512	0.3916
Ca	0.5613	-0.0105	0.1731
Fe	0.2286	-0.4875	0.7449
Rb	-0.2650	0.5135	0.4788
Sr	0.4230	0.4956	-0.1289
Na	0.4905	0.3600	0.1264
固有値	2.6395	1.5903	0.8178
寄与率	43.9911	26.5057	13.6305
累積寄与率	43.9911	70.4968	84.1273

第 4 図 久米遺跡甕棺・土壌出土土器の主成分分析結果

両者は同時製作の可能性もあるが K-10 ほどの類似性はなく、胎土の完全な一致とまではいいがたい。しかし、少なくとも両者が同一産地である可能性は示唆しているとみてよかろう。なお、甕棺の胎土研究についてはまだ研究途上にあり、どの程度の分析値の近さをもって同時製作を示唆する胎土の同一性とみなすかについては絶対的基準をもっていない。今後分析例を蓄積しつつ考古学的観察と比較しながら明確にしていきたい。

K-18 は R b - S r においては比較的近い値を示しているが、K - C a ではわずかに離れている。形態からは上甕と下甕は砂粒の量や色調が似ているが、共通要素が積極的には見出せるわけではなく、むしろ突帯の本数や口径等の点で差異がある。6 元素を総合した判断としては K-2 同様、少なくとも上甕と下甕が同一産地である可能性を示唆している。

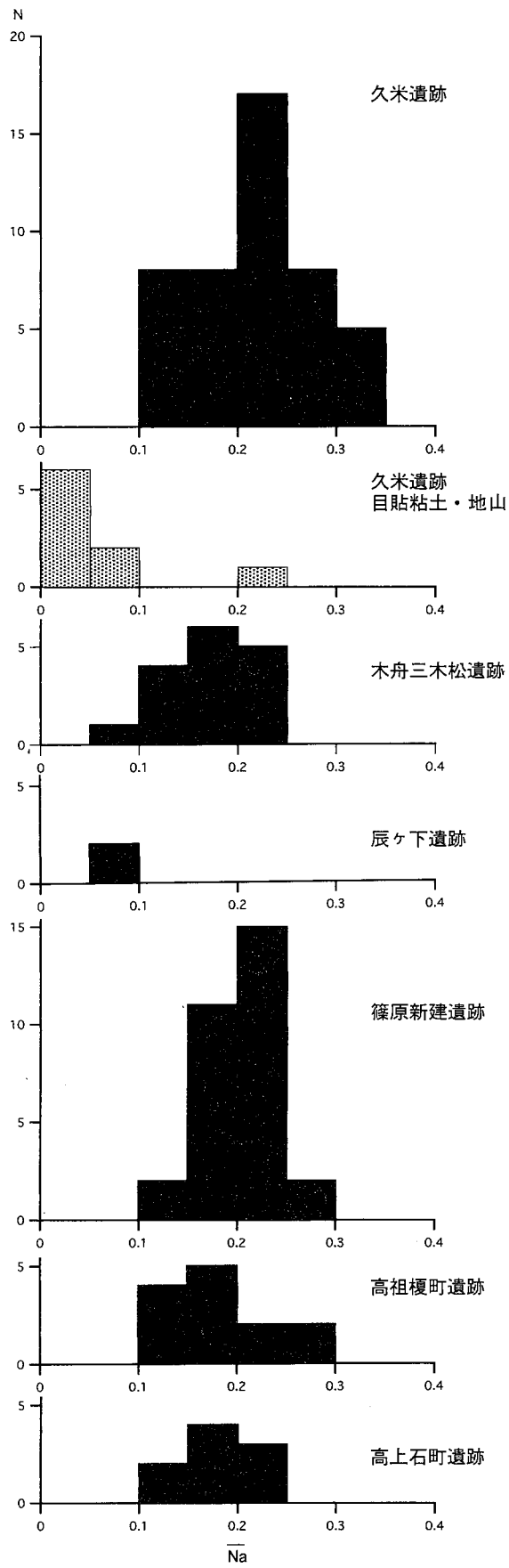
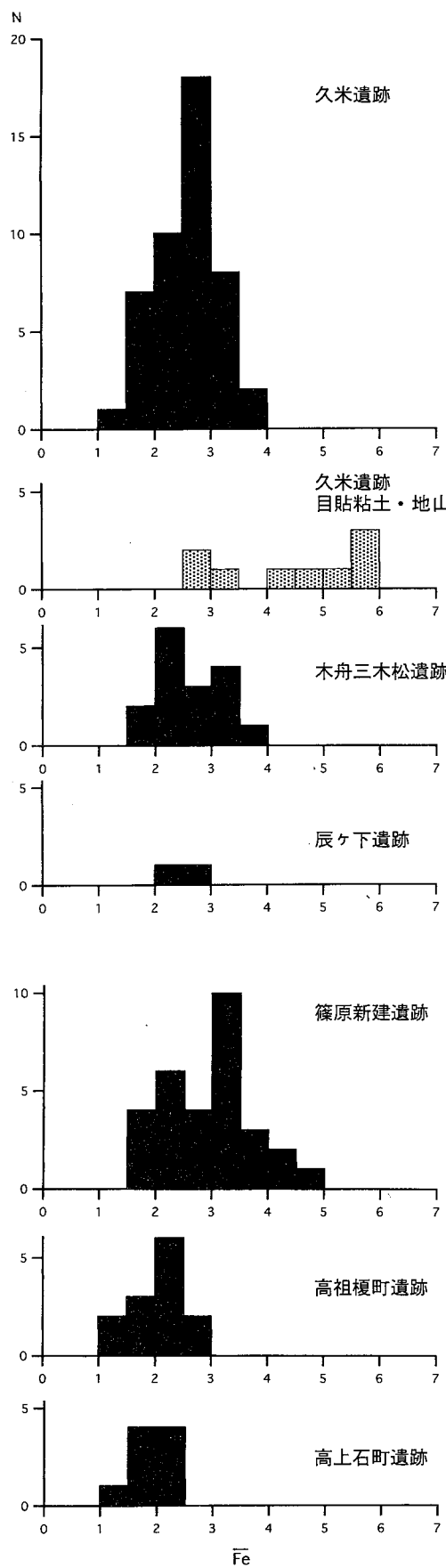
細形銅戈を副葬していた K-23 の上甕と下甕の形態・文様は、著しく異なっている。分析値は一致してはいないがさほど離れておらず、やはり同一産地の可能性があろう。なお、副葬品をもつもう 1 つの甕棺墓である K-6 についても、上甕と下甕の分析値は比較的近いということはできるが同一とはいいいがたい。口唇部刻目の有無という違いはあるが、外見上比較的類似しているとした K-11 については、C a、S r において上甕と下甕は大きな差があり、明らかに同一胎土とはいいたがたい。

その他の甕棺墓では上甕・下甕で分析値が一致しておらず、墓群全体としては外見的に上甕・下甕の類似性が高くないとした判断を指示する結果となった。

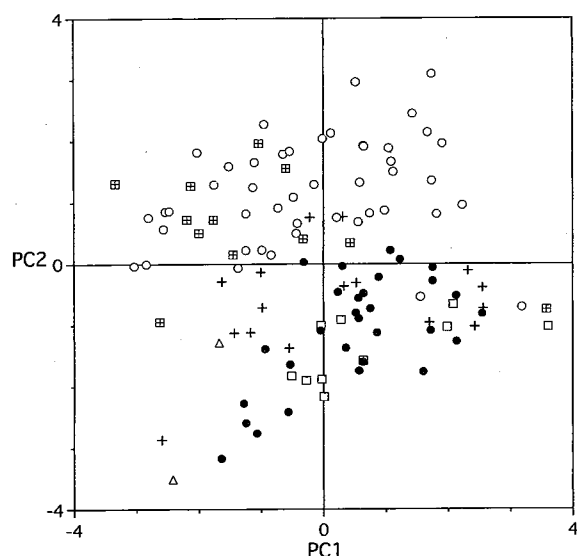
K-5 上甕は C a が著しく大きいなど、上甕・下甕の差が非常に大きい。

なお、以上はいずれも上甕と下甕とを比較した際の一致度を比較したものであり、上甕・下甕が同時に調整された素地を用いて製作されたものかどうかを推定したものである。したがって、上甕・下甕で胎土が不一致としたものでも同一集落内で製作された可能性が十分にある。前述のとおり、久米遺跡全体の胎土の化学特性は K、R b で比較的高い値をとるという傾向をもっているからである。

いわゆる祭祀土壌としての性格が考えられる土壌 1 から出土した土器 5 点については、どちらの分布図上でも甕棺の分布とほぼ重なっており、両者に有意な差を見出すことはできない。これは他の甕棺遺跡での分析例とも同様な傾向といえる。したがって、土壌 1 から出土した土器も甕棺も同



第6図 糸島地域試料のFe(左)、Na(右) ヒストグラム



- 久米遺跡
- + 木舟三本松遺跡
- △ 辰ヶ下遺跡
- 篠原新建遺跡
- 高祖榎町遺跡
- 高上石町遺跡

変量	固有ベクトル		
	主成分 1	2	3
K	-0.2197	0.6218	0.2346
Ca	0.5774	0.0214	0.1862
Fe	0.0375	-0.2135	0.9193
Rb	-0.2729	0.6140	0.0802
Sr	0.5638	0.2107	-0.2153
Na	0.4739	0.3821	0.1116
固有値	2.3867	1.9328	1.0522
寄与率	39.7779	32.2133	17.5366
累積寄与率	39.7779	71.9912	89.5278

第7図 糸島地域試料の主成分分析結果

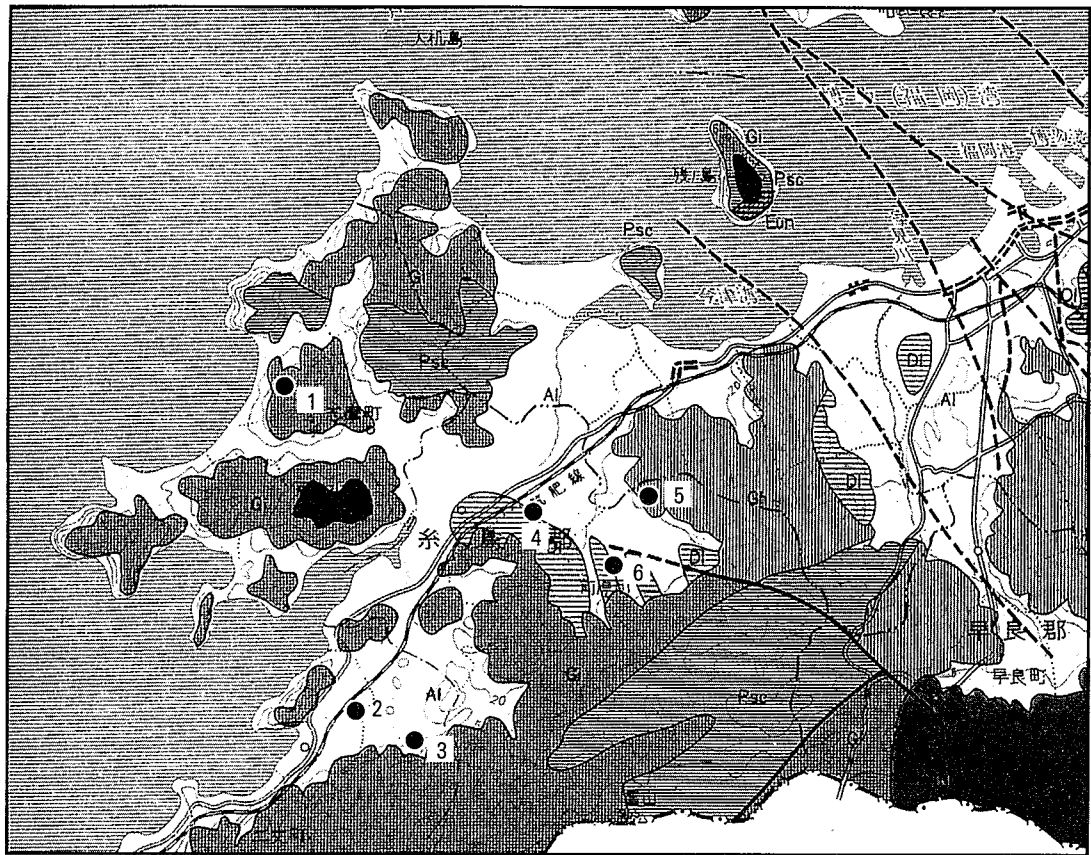
次に6元素を用いた主成分分析を行った。やはり目貼粘土・地山土は除いている。第1・第2主成分スコアの2次元散布図を示す(第7図)。なお、第2主成分までの累積寄与率は約72%である。この図から、一見すると比較的明確に異なる2つのグループがあるように見える。つまり久米遺跡・高祖榎町遺跡と、篠原新建遺跡・高上石町遺跡の2群である。ただし高祖榎町遺跡は、久米遺跡と大きく重なりながらも第1主成分方向でマイナス側に布置されており、特性は異なっている。また、それら2群の中間に位置するように木舟三本松遺跡が布置されている。辰ヶ下遺跡の2点は図中第3象限に布置され、篠原新建遺跡・高上石町遺跡や木舟三本松遺跡と近い位置にある。この結果は、上で行った2次元分布図の視察の結果と矛盾しない。

各遺跡の所在地を地質図に重ねてみる。すると、久米遺跡は糸島型花崗閃緑岩、辰ヶ下遺跡はやはり背後が糸島型花崗閃緑岩ですぐ前面に沖積層がある。木舟三本松遺跡は周囲を糸島型花崗閃緑岩の囲まれた沖積層に立地する。高祖榎町遺跡の背後は嘉穂型黒雲母花崗岩である。以上に比べて篠原新建遺跡と高上石町遺跡は堆積岩からなる洪積層に立地しており、糸島地域においては特異なあり方をしている。以上の分析で久米遺跡とこの両者は明確な胎土の化学特性の差異を有していることが指摘できたが、これはこうした地質構造の違いを反映しているものと考えられる。分析を行った他の遺跡についてもそれぞれの遺跡をとりまく地質環境が反映しているとみられる。

筆者らは従来、胎土の化学特性が遺跡ごとに一定の傾向をもったまとまりをみせることが多いことから、遠隔地に甕棺が移動することが通常であったと考えるのは困難とみてきた。今回の結果は遺跡周辺での甕棺製作という考えをよりいっそう強固に支持するものといえよう。なお、分析値で外れ値をとるものや他の遺跡の値と似たものもあるので、多少、個体の移動の可能性は考えておかねばならないが、それが甕棺の移動であるのか胎土の調整法や採取地点などの差によるものなのかは今後の検討に委ねられる。

5. おわりに

久米遺跡は甕棺墓地としては前半期に属するものであり、汲田式として完成度の高い器形を呈す



第8図 地質図と遺跡の立地（福岡県地質図より）

1. 久米遺跡 2. 木舟三本松遺跡 3. 辰ヶ下遺跡 4. 篠原新建遺跡 5. 高祖榎町遺跡
6. 高上石町遺跡

る以前のものが多く含まれている。分析を行った他の糸島地域の遺跡もほぼ同時期であり、該期のこの地域の実態をある程度うかがうことができたといえよう。甕棺の胎土と地質環境の関係を指摘できたことは重要な成果といえよう。

今回の分析はより高次の研究に進む手がかりとして確かな手応えを感じることができた。歴史的にも重要な本地域の甕棺および弥生土器の胎土分析は大きな意味があると思われる。弥生土器胎土分析の研究に深くご理解をいただき、資料提供ならびにご協力をいただいた調査担当者の河合修氏、志摩町教育委員会の河村裕一郎氏、また全面的にご協力いただいた糸島地区の各教育委員会文化財担当者の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 三辻利一・中園聡、1995 「福岡県大刀洗町甲条神社遺跡出土甕棺の蛍光X線分析」『甲条神社遺跡』大刀洗町文化財調査報告書第7集 大刀洗町教育委員会
- 中園聡・三辻利一・松尾宏、1997 「蛍光X線分析による甕棺胎土分析の基礎的検討」『日本文化財科学会第14回大会発表要旨集』 日本文化財科学会
- 中園聡・三辻利一・松尾宏・時津裕子、1999 「弥生時代大型甕棺胎土の均質性に関する基礎的研究」『人類史研究』11 人類史研究会

iv 福岡県志摩町久米遺跡出土の弥生時代人骨

九州大学大学院比較社会文化研究科

中 橋 孝 博

1. はじめに

福岡市の西隣り、糸島郡志摩町は、先年、支石墓下から人骨が出土したことで知られる新町遺跡など、考古・人類学上、重要な遺跡が多数検出されている地域である。今回、志摩町教育委員会による発掘調査によって、同町北部の久米遺跡から新たに24基の甕棺墓が出土し、細形銅剣や碧玉製管玉などの副葬品とともに、少量ながら人骨資料も出土した。残念ながら、人骨の保存状態が悪く、その形質に関する詳しい人類学的検討は出来なかったが、以下に知り得たところを報告する。

2. 遺跡・資料・方法

久米遺跡は糸島郡志摩町の北部、玄界灘を望む標高約14mの丘陵上に位置する。1997年度の発掘調査によって、弥生時代前期末から中期中頃にかけての甕棺墓24基が検出された。多くは、弥生中期前半期のものであり、この内人骨片が出土したのは下記の3基であるが、特に23号甕棺からは細形銅戈1口が出土し、他にも同遺跡からは、細形銅剣や碧玉製管玉などが出土している。

人骨資料は、16号、18号、及び23号甕棺墓から出土した。土壌により遺物の保存状態が悪く、人骨も頭蓋や四肢の破片少量を残すのみであった。

3. 所見

(1) 16号甕棺墓（成人？・性不明：弥生前期末、副葬品なし）

残存していた人骨は、頭蓋と四肢骨の小片のみである。いずれも細片化、腐食が激しく、正確な部位同定は困難であった。一応、骨の厚さからみて成人の可能性が高いと考えるが、詳しい年齢、性別は不明である。

(2) 18号甕棺墓（熟年・男性：弥生中期前葉、副葬品なし）

遺存部は、頭蓋片（右乳突部など少量）、第二頸椎片、右肩胛骨片、右上腕骨下端部、左橈骨近位半、右膝蓋骨、左右下腿骨の遠位端、及び足根骨などである。全体に骨の厚み、周径が大きく、非常に頑強な特徴が窺える。骨盤などは観察不能であるが、男性と見なして差し支えない。また、一部観察可能な頭蓋の縫合がかなり癒合しており、熟年以上の高齢のたくましい男性と見なされる。身長など、詳しい特徴は不明である。



18号甕棺墓 人骨出土状況

(3) 23号甕棺墓（成人？・男性？：弥生中期前葉、細形銅戈を副葬）

遺存していたのは、左上腕骨の肘関節部のみである。かなりサイズが大きく、また、骨端線などもみられないことから、一応、成人男性の可能性が高いと考えられるが、正確な判定は困難である。

以上、志摩町久米遺跡出土の弥生人骨は、削平などの人為的攪乱もあって人骨の保存状態が非常に悪く、一部の性、年齢が推定されたに留まった。しかし、最初にも記したように、当地域は、北部九州の弥生人成立に関する諸問題を解決する上で非常に重要な位置を占めており、今後、当地における縄文～弥生期の人骨資料を充実させていくことは、人類学的な重要課題になるものと考ええる。

Ⅴ 久米遺跡 6 号甕棺内銅剣周囲の黒色物について

国立歴史民俗博物館 永 嶋 正 春

1. はじめに

発掘担当者によれば、久米遺跡 6 号甕棺は弥生時代中期前半に所属している。この甕棺からは細形銅剣が 1 点出土しており、また碧玉製管玉も 6 点が出土している。この細形銅剣は、糸島地域で発掘調査によって確認されたものとしては初例とのことであり、したがってどのような埋納方法をとっていたのかについては可能な限り情報化すべきであろう。具体的な問題点としては、埋納時に鞘を伴っていたのかあるいは銅剣本体のみであったのかを把握する事がまずは挙げられよう。ところで発掘調査時において、銅剣裏面すなわち甕棺内面に面する側の切っ先部付近より、黒色～濃褐黒色を呈する塗膜様の小片が検出されており、またほぼ銅剣の範囲に相当する甕棺内面は、やや斑ではあるものの周囲の器表面とは明らかに異なって黒色～褐黒色の汚れ状の痕跡を残している状況であったという。

筆者は、本銅剣が九州歴史資料館に於いて保存処理されている時点でこれらの事実に接し、漆塗りされた木製の鞘が存在したのかどうかを見極める必要性から調査を行った。

2. 調査結果

(1) 漆塗膜様小片

本小片(図 1 の 1, 1の2)は、土と共に樹脂処理されているが、黒色～濃褐黒色の塗膜様部分には銅剣の長さ方向に一致する方向性が認められ(図 1 の 1)、銅剣との関係性が強いことを示唆している。この塗膜様黒色物には非常に細かな皺(図 1 の 3)と、主に銅剣の長さ方向に直行する微細な断文とが発生しているが(図 1 の 1)、それらの状況は良質な漆塗膜の質感からはやや離れたものであるため、少なくとも黒目漆を丁寧に塗布したものである可能性は小さいものとする。塗膜様黒色物の表面の所々には、銅剣の長さ方向に一致する木質様繊維の付着が認められるが(図 1 の 4)、それらの状況はこれらの繊維と塗膜様黒色物とが一体の関係にあることを示している。すなわち同一製品の胎、おそらく木胎とその表面部(塗りか)であると見ることに間違いなからう。

この塗膜様黒色物を微小に採取し、ポリエステル樹脂に埋包固定した後その層断面を作製したものが図 1 の 5 である。塗膜様黒色物の厚さは部位によって変化しているが、図 1 の 5 では層厚が 40 ミクロン(0.04mm)前後である。全層が均一な単一の層になっていないところにこの層の特徴があり、厳密な層数は確認し難いものの、相当多くの層の重なりを読み取ることが可能である。これらの層の重なり状況を、何らかの素材を人為的に塗装したものとするか、自然な状態に起因する層組織を反映したものとするかであるが、この層断面試料のみではどちらとも積極的な判断を下しがたい。この点に関しては、良好な層断面薄片試料を作製して検討を進めるべきものと考えている。

漆塗膜様小片についての観察結果は以上に述べたごとくであり、今後課題を残すものとはなっている。しかしながら、銅剣に伴うことをもって概ね次の様な判断をしたとしてもさほど誤りはな

いものとする。すなわち、漆塗膜様小片は鞘の痕跡であり、6号甕棺内の細形銅剣は木製の鞘に納められた状態で埋納されていた。木製の鞘は白木ではなく、漆以外の何らかの素材で塗装されていたと考えるのである。

(2) 甕棺内面の汚れ状痕跡

銅剣よりも広がりを持った範囲に存在する黒色～褐黒色の痕跡である(図1の6)。この部分以外の器表面の色調、質感とは明らかに異なっているところから、積極的な意味合いを有する痕跡と理解せざるを得ない。前述のごとくに判断される塗膜様黒色物と同一の面に存在することから考えれば、この塗膜様黒色物に連続する部分が更に痛んだ状態で痕跡化しているものとの予測が成り立つ。

当初の観察においては、図1の6、1の7に見られるように銅剣の長さ方向に直行する通直性のある痕跡も認められ、あるいは絹布等に起因する痕跡かとも予測したのであるが、詳細な観察を行った結果、この種の痕跡は出土後に付いた二次的なものと判断せざるを得なかった。

黒色～褐黒色物の微視的な外観は、図1の8に示した通りであり、塗膜的な連続性には欠ける状況で辛うじて器表面に付着残存しているに過ぎない。この素材そのものは確定できていないが、予測通り塗膜状黒色物が更に変質したものと理解するのが自然であり、全体としては鞘の痕跡と見るのが妥当であろう。

3. おわりに

6号甕棺に埋納されていた細形銅剣の周囲に存在した黒色物を調査し、上記のような結果を得た。すなわち、木製の鞘が存在した可能性が高いものと判断したのである。

この結論は、顕微鏡等による微視的な観察手法によったものであり、本文中に記したように曖昧な部分も残されている。これらの点については今後も更に追求を進め、より確定的な判断が得られるようにしたいと考えている。

最後になったが、資料紹介の労をお取りいただいた九州歴史資料館の横田義章氏、資料観察のために多大なお手数をおかけした志摩町教育委員会の河村裕一郎、河合修の両氏に感謝の意を表したい。



図1の1 切っ先付近の黒色付着物

2.6×



図1の2 同左

2.6×



図1の3 同上の微細部

33×



図1の4 同左

33×

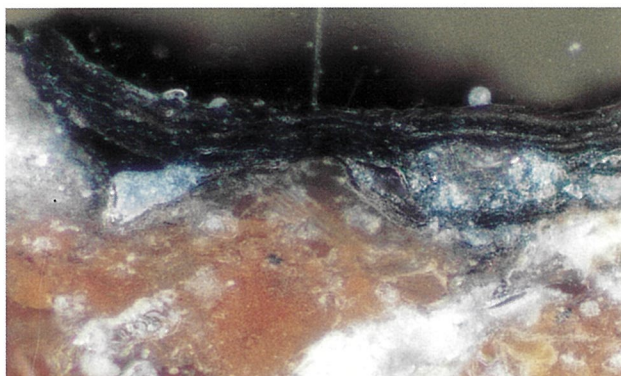


図1の5 同上部分の層断面

260×



図1の6 銅剣位置部の黒色付着物



図1の7 同前の細部状況

2.6×

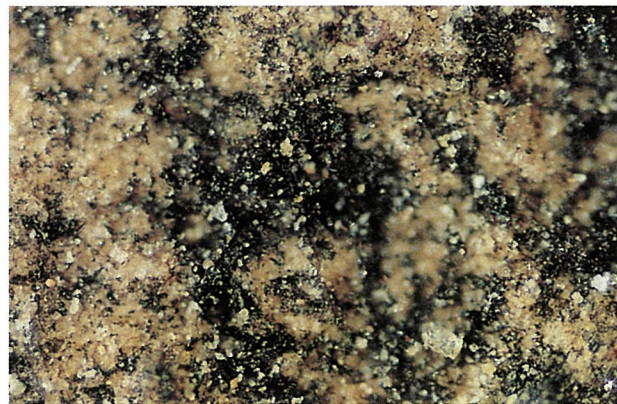


図1の8 同左部の微視的状況

66×

図1. 6号甕棺出土銅剣周囲の付着物

V 結 語

今回の調査では、弥生時代中期前半期の甕棺墓地とそれに伴って細形銅剣・銅戈といった青銅製武器が出土し、当時の社会・墓制・交易等の歴史的諸問題を考える上で重要な成果があった。

また、それと並んで、いままで埋蔵文化財の発掘調査例の知られていなかった野北地区において、重要な発見があったことにより、地元の方々の文化財に対する理解・文化財保護の気運が少しでも高まったことは大きな成果であったと思われる。今回の調査成果が今後とも、地元の文化財保護思想の高揚に役立ってくれることを願うばかりである。

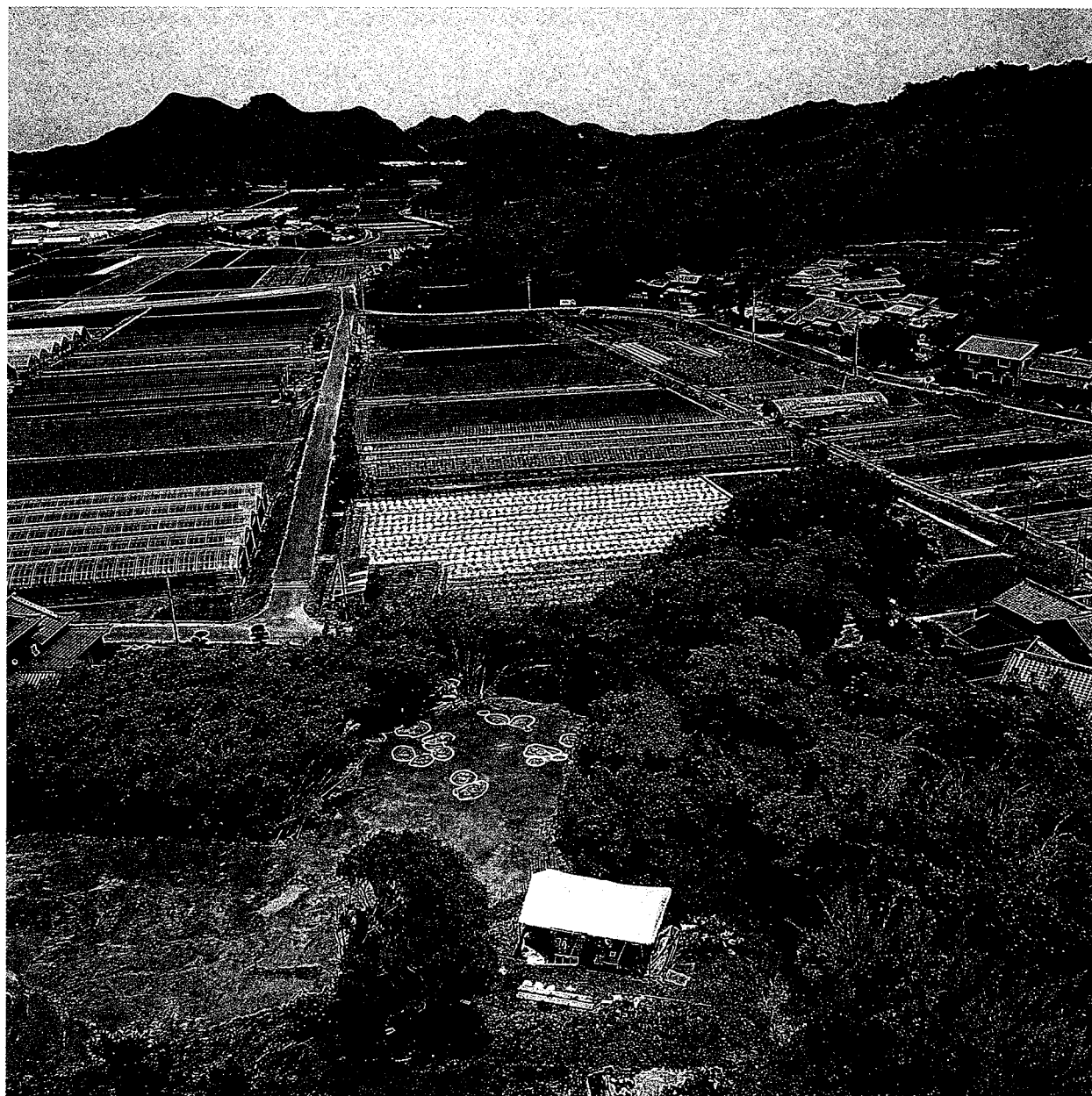
本報告においては、筆者の勉強不足で十分な報告になり得ず不備な点が多々あるものと思われるが、これは、全て筆者の責任に帰するもので、今後、ご指導・ご叱責を賜り、不十分な面を補ってゆきたいと思う。

最後に、調査および本報告書の作成においては同僚の洞龍二郎氏、河村裕一郎氏の多大なるご協力があつたことを記しておく。また、各種分析等に尽力し成果をまとめていただいた中橋孝博氏、中園聡氏、三辻利一氏、永嶋正春氏の各位には、記して格別の謝意を表したい。

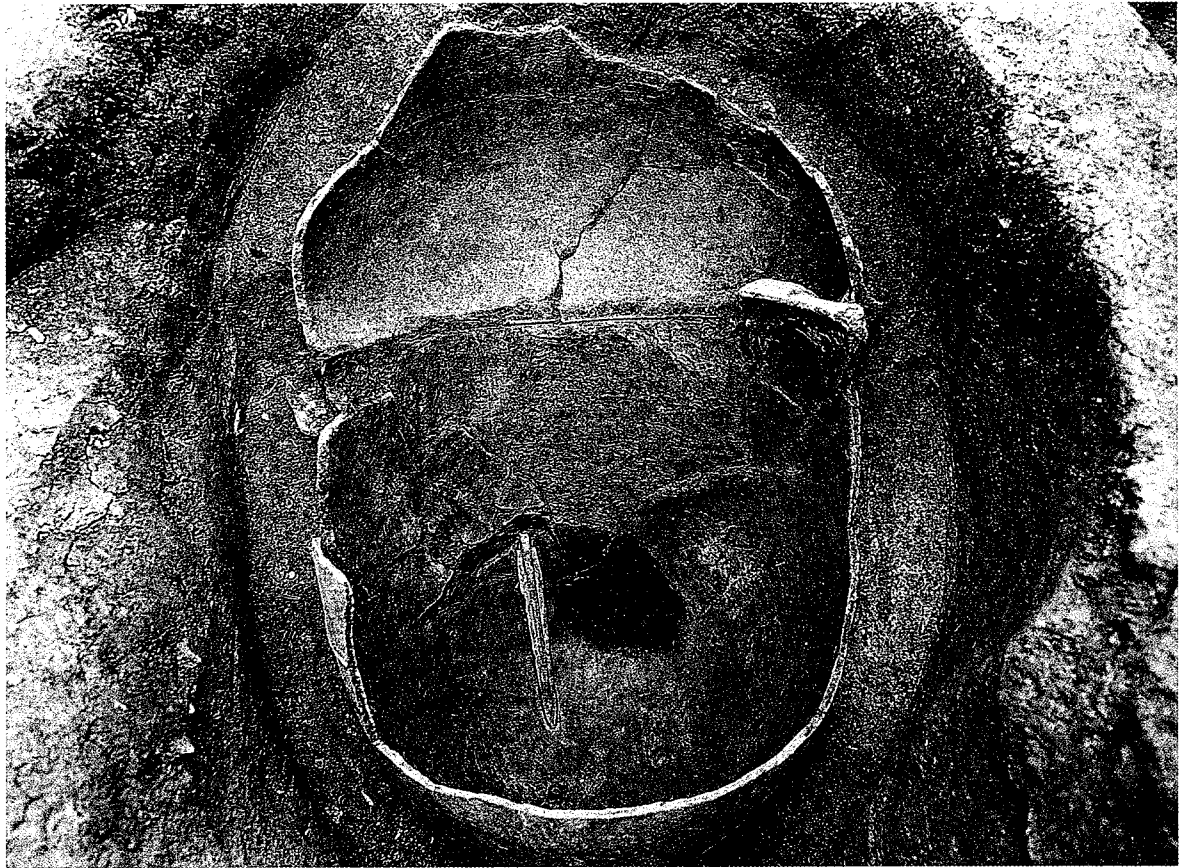
そのほか、本報告の作成にあたり、下記の各位にご指導・ご助言ならびにご協力を頂いた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

横田義章 柳田康雄 橋口達也 中間研志 池辺元明 西谷 正 宮本一夫 岡村秀典
宮井善朗 深澤芳樹 岩永省三 肥塚隆保 細川金也 吉村耕治 岡部裕俊 角 浩行
野田純子 平尾和久 古川秀幸 村上 敦 津国 豊 木下文子 古藤紀子

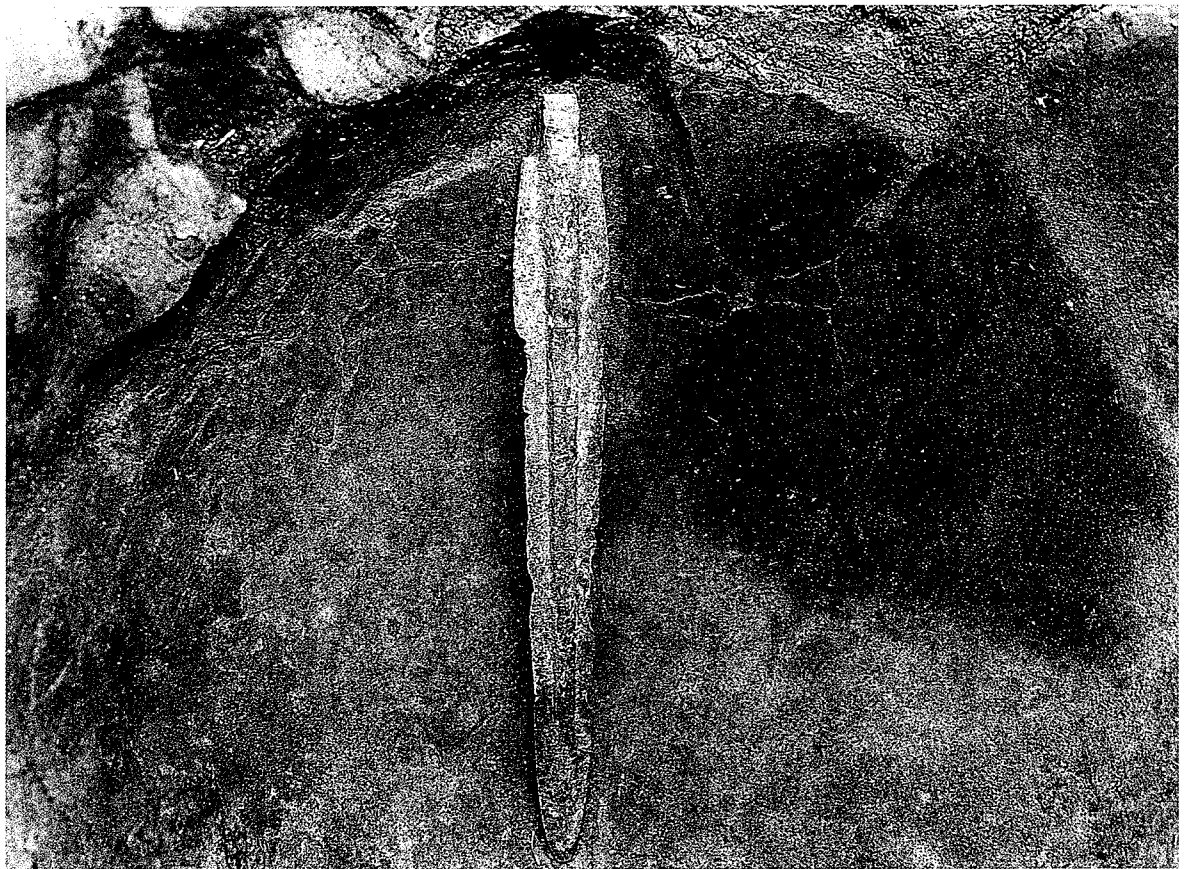
図 版



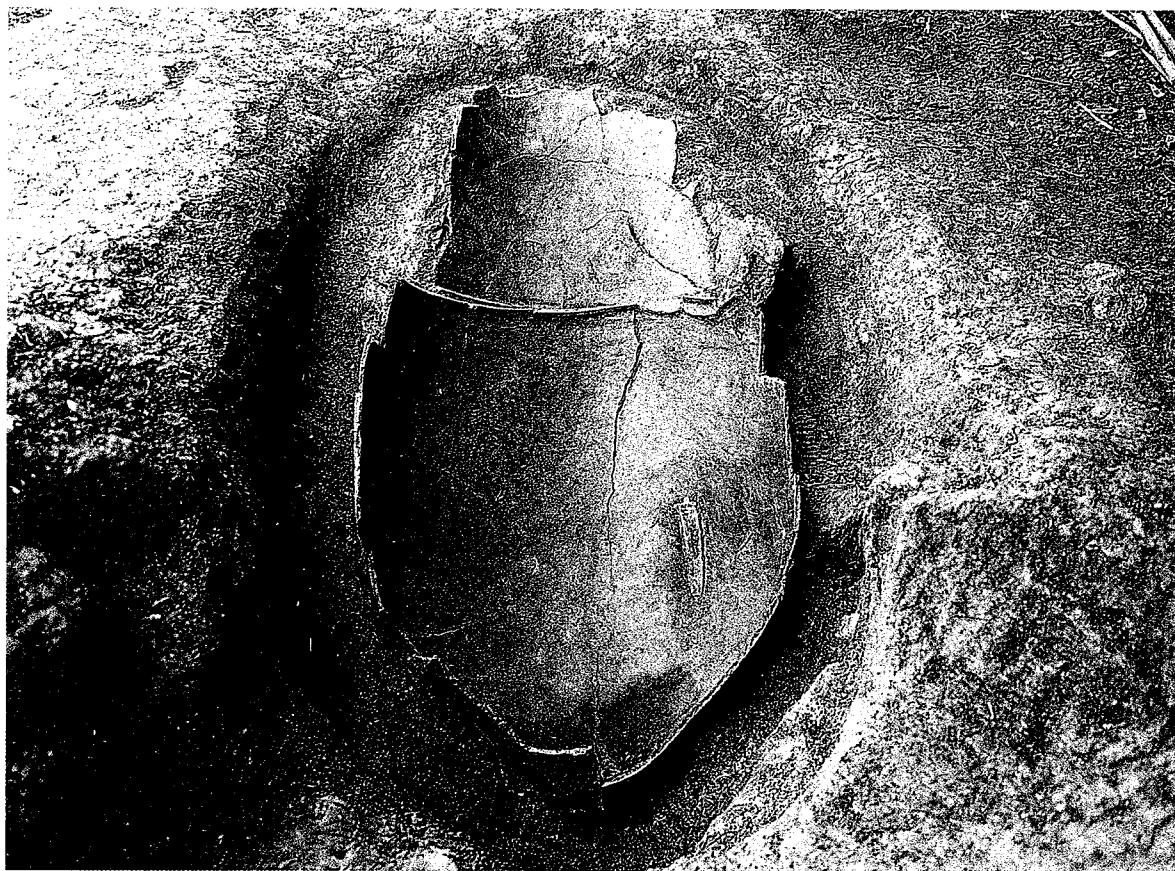
久米遺跡遺景（西側上空から）



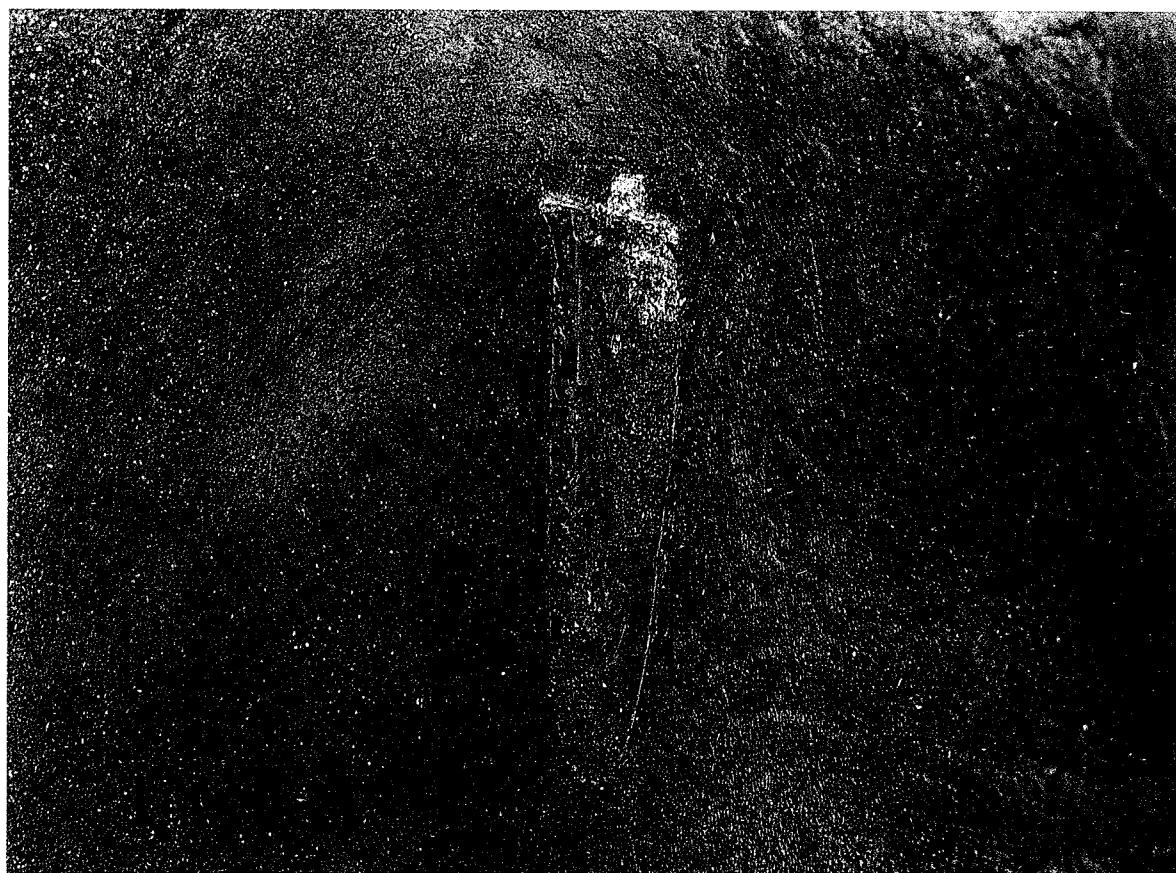
a. 6号甕棺墓 細形銅剣出土状況



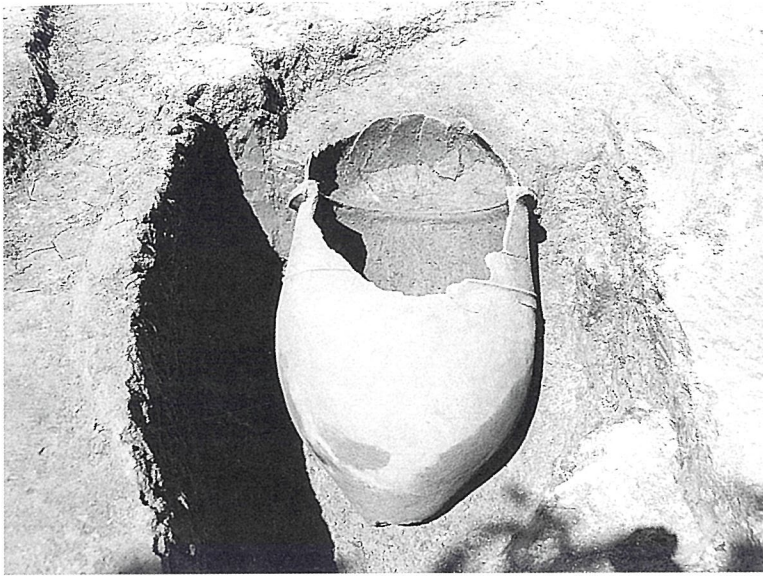
b. 細形銅剣出土状況



a. 23号甕棺墓 細形銅戈出土状況



b. 細形銅戈出土状況



a. 14号甕棺墓出土状況



b. 15号甕棺墓出土状況



c. 16号甕棺墓出土状況

a. 18号甕棺墓出土状況



b. 21号甕棺墓出土状況



c. 22号甕棺墓出土状況





a. 1号甕棺墓下甕



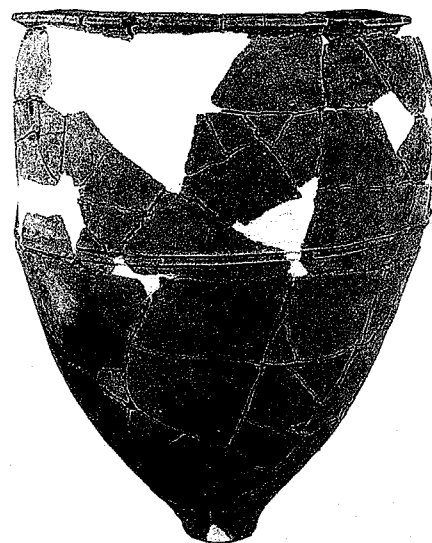
c. 5号甕棺墓下甕



b. 4号甕棺墓下甕



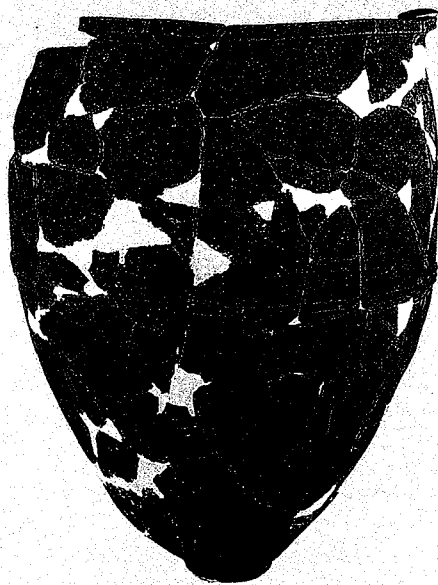
d. 6号甕棺墓上甕



e. 7号甕棺墓下甕



a. 8号甕棺墓下甕



c. 12号甕棺墓下甕



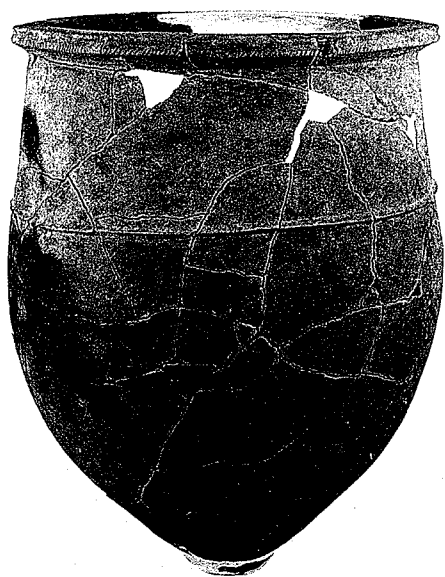
b. 11号甕棺墓下甕



d. 13号甕棺墓下甕



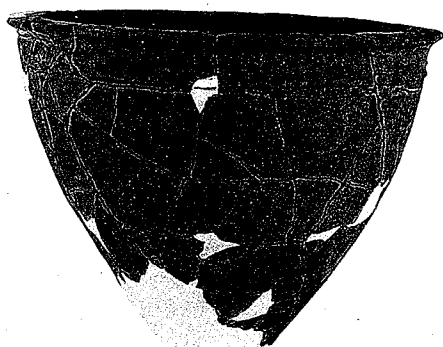
e. 14号甕棺墓上甕



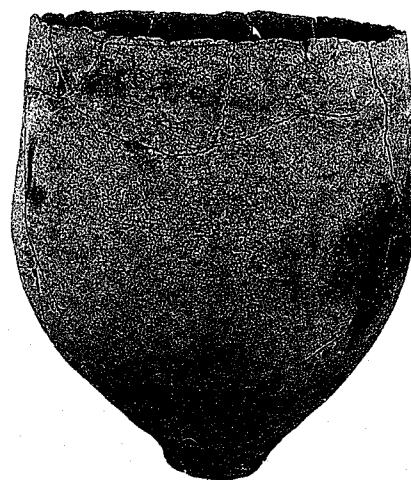
a. 14号甕棺墓下甕



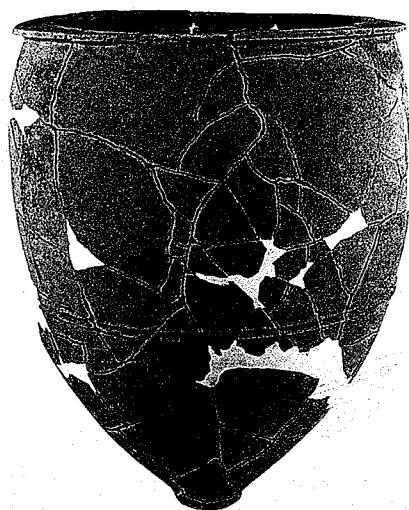
d. 16号甕棺墓上甕



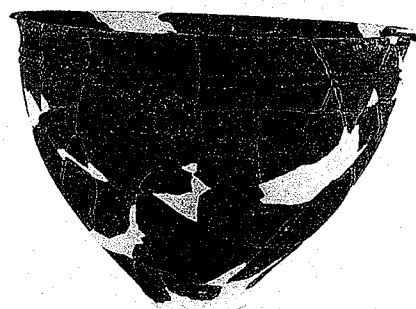
b. 15号甕棺墓上甕



e. 16号甕棺墓下甕



c. 15号甕棺墓下甕



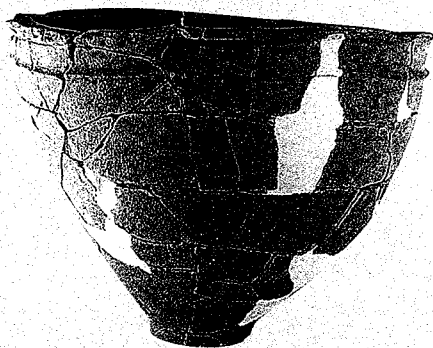
f. 18号甕棺墓上甕



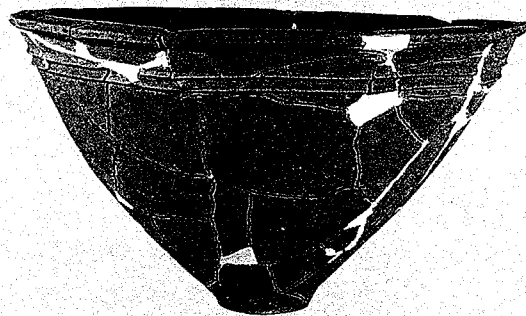
a. 18号甕棺墓下甕



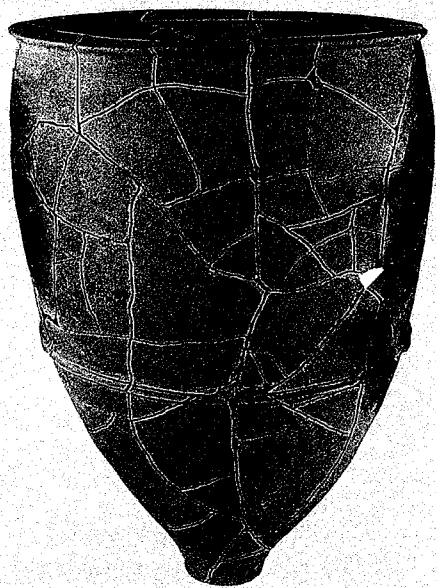
d. 20号甕棺墓上甕



b. 19号甕棺墓上甕



e. 21号甕棺墓上甕



c. 19号甕棺墓下甕



f. 21号甕棺墓下甕

報告書抄録

ふりがな	くめいせき							
書名	久米遺跡							
副書名	県営農業担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	志摩町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編集者名	河合 修							
編集機関	志摩町教育委員会							
所在地	〒819-1392 福岡県糸島郡志摩町大字初30番地 TEL092-327-1111							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久米遺跡	福岡県糸島郡志摩町大字野北字久米3177-1			33°36′	130°10′	19970602 } 19970824	800㎡	県営農業担い手育成基盤整備事業(溜池改修工事に伴う事前調査)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺跡			主な遺物	
久米遺跡	甕棺墓	弥生時代中期		甕棺墓 24基 土 墳 4基 等			甕棺 24基 細形銅剣 1口 細形銅戈 1口 管 玉 6点 銅鏡片 1点 等	

久米遺跡

志摩町文化財調査報告書第21集

1999年3月31日

発行 志摩町教育委員会
福岡県糸島郡志摩町大字初30番地
印刷 株式会社 松古堂印刷
福岡市西区周船寺1丁目7-64
